
春の精霊たち

小宮山蘭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の精霊たち

【Nコード】

N2755K

【作者名】

小宮山蘭子

【あらすじ】

大正時代の華族社会を舞台に、早乙女伯爵家の三姉妹／雪子・月子・華子が織りなす恋と生の物語。

雪月花 1 【正臣】

僕が、早乙女家の三姉妹にはじめて会ったのは、遠い春の日。
大正5年のことだった。

京都のとある庭園で、皇族の方々や華族・政財界の要人たちを招いて、春の茶会が開催されていた。

茶会の主催者は、早乙女伯爵夫妻。

茶会は、早乙女家の邸宅にある大きな庭園で行われていたのだ。

僕の父である内藤伯爵が茶会に招待されており、僕・ないとうまさおみ内藤正臣も両親とともに、最年少の11歳で出席していた。

僕は、髭をたくわえた立派な紳士や美しい婦人たちの群れに圧倒され、父の影に隠れるように振舞っていた。万が一、宮家の方々の前などで粗相があつてはならないと両親から厳しく言いつけられていたため、茶会が始まってからずっと緊張の連続だったのだ。

厳粛な時間が過ぎ、皆が庭園に散って談笑などはじめた頃、僕は両親から離れ、大きな池のほとりにやってきてため息をついた。

その時分になってやっと、庭園の美しさに目が行き、手入れの行き届いた木々の緑に触れたり、桜の下で雪のように散る花びらに見とれたりしていた。

少し離れたところで、人々の歓声が上がった。しばらくすると、
琴の音が聴こえてきた。重奏だった。

その音色に惹かれるように、僕は先ほど野点のだてが行われていた場所へ引き返した。

大人たちをかきわけて進むと、群れの最前列に母の後姿が見えたので、僕はなんとかその側にたどついた。

目の前に、真っ赤な絨毯を敷き詰めた空間が開け、琴の音がより

鮮明に迫る。そこには、艶やかな着物をまとった女の人が三人で並んで座り、琴を弾いている。

女の人……といっても、みんな若かった。

一番右端の人は、僕より少し年上ぐらいの、まだあどけなさの残るかわいらしい少女だ。

左端の人は、眉毛がきりりとつりあがり、とても凛とした雰囲気をも漂わせている。

真中の一番年上に見える人は、透き通るように色が白く美しい。

僕が横にいるのに気づいた母が、そつと耳うちした。

「正臣さん、あれが早乙女家の3人のご令嬢よ。真中が雪子さま。左が次女の月子さま。そして、右が三女の華子さまよ」

琴の旋律に合わせるように、桜吹雪が踊っていた。

三姉妹は、まるで天から舞い降りた桜の精のようだった。

雪月花 2 【正臣】

大正12年、18歳になった僕は、京都帝国大学に進学した。

父や母は東京帝国大学への入学を望んでいたようだが、自由な学風を基本理念として掲げていた京都帝大には、心惹かれるものがあった。

もちろん、僕には美しい古都そのものへの強い憧れがあったから、そんな地で青春時代を謳歌したいという思いもあった。

父は、僕を京都の知人の監視下に置く……という条件を出した。「寮に入る手続きはしなくともよい、早乙女伯爵の御宅に住まわせていただくことになった」

と、父が言ったとき、僕は胸の奥から歓喜が湧き上がってくるのを抑えられなかった。

早乙女……。あの三姉妹に会える。

初恋、恋心……。そういうものとは少し違う。

京都の伝統美が日本人に深く浸透し心をつかんで離さないように、あの日の三姉妹の姿は忘れえぬ名画のように、僕の胸に刻みつけられていた。

幼い僕にとって、「尊敬」にも値するような、手の届かない憧れの存在だった。

京都への進学が、期せずしてあの三姉妹との縁を運んでくれる……胸が躍った。

4月。京都。

僕は迎えの車に揺られ、7年ぶりに早乙女邸の門をくぐった。

桜は、この数年でますます樹を増やし、庭一面を薄桃色に彩って

いた。

しばらく進むと、大きな洋館が見えた。

数人の女性が僕を出迎えに玄関に出ていた。

僕は緊張のあまり目がかすんで、女性たちをまっすぐに見ることができなかった。

「正臣さん、遠いところ、ようこそいらっしやいました」
和服の婦人が微笑んだ。早乙女伯爵夫人だった。

「奥様、このたびは誠にありがとうございます」と、深く頭を下げる。

夫人が、隣に佇んでいた女性たちの紹介をはじめた。

「右から、長女の雪子、次女・月子、三女・華子ですわ」

キラキラと降り注ぐ木漏れ日の中、佇む三姉妹をはじめて真っ直ぐに見た。

雪月花 3 【正臣】

「雪子です」

色白で、か細い体。けれども誰よりも上品で、僕がこれまでに見た令嬢の中でも群を抜いた美貌だ。鈴のなるような声だった。

「月子です」

少しかすれた声で、低くつぶやく。つぶらな瞳は、こちらが考えていることを見透かしてしまいそうなほど強く、澄んだまなざしをたたえていた。

「華子です」

まだ少女だったあの頃の面影を残す、愛らしい表情。うわずった声は、僕の歓迎をあらわしてくれている気がした。少しホッとした。

「内藤正臣です。よろしくお願い致します」

早乙女夫人が、

「お疲れになられたでしょう」

と微笑まれ、召使へ、

「高波、正臣さんをお部屋にご案内してさしあげて」

と、お命じになった。初老の和服姿の召使が近寄ってきて、慇懃に頭を下げながら、

「高波と申します。私がお部屋にご案内いたします」

早乙女邸・この洋館の2階の一室が、僕の部屋だった。

窓から庭園が見渡せた。車からみた桜の群れが、大きな砂糖菓子のように見えた。

高波がお茶を運んできて、テーブルに置きながら、

「正臣様、御用の際はこの高波にお申し付けください」

召使にしてはとても上品で、かつ、どこか親しみの持てる柔らかな笑みだった。

「うん。あの……今、少し尋ねてもいいかい？」

「はい」

「三人のご令嬢方も、この家に？」

「月子様と華子様はお住まいです。雪子さまは、嫁がれていらっしゃるのです。今は、お里帰りされていらっしゃるのです」

そうか……雪子さんはもう結婚しているのか……

「雪子様は現在？松方侯爵夫人？です」

高波は僕が三姉妹に興味があることを察知したのか、聞きもしないのにべらべらと話はじめた。

自分は30年も前からこの早乙女家に仕えていて、三人のお嬢様を幼い頃から見守ってきたということ。

雪子さんの夫である松方侯爵は、現在、貴族院議員としてご多忙な毎日を送っていらっしゃるということ。

慎み深い雪子さんとは対照的に、月子さんがとても勝気で華やかな女性であると言うこと。

そんな月子さんを差し置き、二十歳になったばかりの華子さんに、縁談が持ち上がっていると……など。

紅き糸 1 【雪子】

私が10歳も年上の松方孝彰さまと結婚したのは、5年前、21歳のときでした。

結婚してすぐに私は胸を患い、しばらく寝たきりの生活となつてしまいました。

孝彰さんはとても優しい方で、妻としてなんのお役にも立てない私を、とてもいたわってくださりました。

けれども、1年が過ぎ、2年が過ぎ、私の病気は回復に向かったものの、待望の嫡子ができない状態が続くと、すべては少しずつ変わって行つたのです。

孝彰さんの表情も口調もなんとなく冷たく感じられ、素っ気なくなり、一抹の不安と寂しさを感じはじめた頃。

ある日、召使の桂木が、衝撃的な話をもたらしたのです。

「奥様、私はこの御話をお聞かせすべきかどうか、とても悩みました……」

そう、声を詰まらせながら切り出したこと……孝彰さんの中に、私ではない別の女性が存在しているというものでした。

それは、とある子爵家に嫁がれたあと、ご病気でご主人を亡くし、未亡人となつた方。

孝彰さんとは幼馴染にあたるという方でした。

私の実家の早乙女邸で半年ほど療養していた頃、孝彰さんは京都に戻ってきたこの女性と再会し、以来逢瀬を重ねるようになったらしい……というのです。

私は足元から崩れ落ちました。

桂木は駆け寄ってきて、私を抱き起こし涙を流しながら、それでもさらに残酷な話を続けたのです。

松方家のご親族は皆、そのことをご存知であるということ。

そして、万が一、その方に孝彰さんと子供ができたときは、私たち夫婦の子供として養子として受け入れるつもりらしいとのことでした。

桂木が私を苦しめるために、そんなことを聞かせたわけではないとわかっています。

けれども、一時は、桂木を憎みました。

桂木は、私が幼少期から早乙女家に仕え、最も信頼のおける者として松方家まで連れてきた侍女でしたから、それがすべて事実なら私を想ってどんなに苦しんでいたことでしょう。胸が痛みました。

けれども、できるなら、何も知らずにいたかった。

そのような御話がいつか実現してしまったら、孝彰さんご本人の口から正式に申し出があるまで、苦しい時間は少しでも短くあつてほしかったのに、と思いました。

毎日泣いて暮らしました。孝彰さんの前では、何も知らないようにに振舞いました。

お見送りのたびに、振り返ることのない孝彰さんの背中を見つめながら、空が頭上に落ちてくるような絶望感に襲われました。

そのような慟哭の日々、「あの方」の存在がなかったら、私は自ら命を絶っていたかもしれません。

そして、私はやがて、その方と運命の恋に落ちていったのです。

それは……孝彰さんの弟・清彰さんでした。

紅き糸 2 【雪子】

清彰さんは、若くしてご両親から爵位を継がれた兄の孝彰さんとは対照的に、貴族階級の華やかな交流や社交界とは無縁の方で、京都帝大をご卒業後も敬愛する水野文学博士のお手伝いをされながら、論文や小説を執筆していらっしやいました。

以前は、大学の寮にお住まいでしたが、今では（先代の侯爵であられた松方の）ご両親様や私たち夫婦と松方邸に同居されており、いつも近くで私を見守ってくださった方です。

あるとき、寮の庭に咲いていたという水仙の花をつんできてくださり、病に伏せている私のベッドの脇に飾りながら、

「お姉様、家のことは気にされずゆっくり養生されるといいですよ」と、柔らかに微笑みかけてくださいました。

白いレースカーテンの隙間から小春日和の陽射しが差し込み、清彰さんのまるでギリシア彫刻のように端正な横顔を淡く照らしました。思わずみとれてしまったのをよく覚えています。

私は、夫の孝彰さんの秘密を知って以来、食事も喉を通らず、いつもうつむいて考え込んでばかりいました。

孝彰さんもご両親様もそんな私の様子に気づかなかったのか、気づかないふりをしていたのかわかりません。いずれにせよ、この松方家で（侍女の桂木の他に）私の変調に気を留める方はいらっしやいませんでした。

そんな中、週末に寮から戻っていた清彰さんだけが、
「何か、悩んでいることがありませんか？」

と声をかけ、庭の散策に連れ出してくださったのです。

「僕で力になれるかもしれない」

と、氣遣ってくださいましたが、もちろん、私は何もうちあけることはできませんでした。

「体調が思わしくないのです」

と、やっとの思いで申しますと、清彰さんはそれ以上何も聞かず、ただ黙って庭に浮かんでいたボートを見つめていらっしやいました。やがて、

「あれに乗りましょう」と、立ち上がりました。

松方邸内にある広大な池に、ボートで乗り出すのは初めてでした。涼やかな風を受けながら、正面に座ってオールを漕ぐ清彰さんを見ていると不思議と胸の痛みが和らぐ気がしました。

清彰さんは私のことはもう何も聞こうとされず、水野博士の失敗談や欧州から帰国したばかりのご学友の話など楽しいお話を聞かせてくださいました。

私は松方家の中にいることなどすっかり忘れて、できることならいつまでもこんな気持ちで水の上を漂っていたいと思いました。

ふと岸の方を見やると、侍女の桂木が佇んでいました。

そしてその夜、あの事件が起こったのでした。

紅き糸 3 【雪子】

私と孝彰さん、お義父様、お義母様の4人で夕食のテーブルについていました。

清彰さんはなかなかお見えになりません。夕方からずっと、部屋にこもりきりの様子でした。

「清彰さんはどうされたのかしら？」

と、お義母様がつぶやいた瞬間、扉が激しい音を立てて開きました。私は驚きのあまり、フオークを落としてしまいました。

清彰さんが、ものすごい形相で佇んでいらつしたのです。それは、これまで見たこともない、鬼神のように恐ろしい表情でした。「清彰、いったいどうしたんだ？」

と、孝彰さんがお立ちになった瞬間、清彰さんは孝彰さんのもとに駆け寄られ、いきなり孝彰さんの頬を殴りつけたのです。

孝彰さんはテーブルに倒れ込み、料理を載せた皿やグラスが飛び散りました。

「ひいっ」

と、お義母様が声をあげられました。

私も、心臓が口から飛び出しそうな感覚に見舞われました。

孝彰さんに馬乗りになり、なお拳を振り上げる清彰さんを、お義父様が羽交い絞めにしてお止めになりました。

「やめなさいっ！ なにがあつたんだ？」

お義父様が清彰さんを引き剥がし、怒号を浴びせました。

すると、清彰さんが肩で息をされながら、何かつぶやかれました。

「……ます」

「なに？」

「僕は、寮を引き払って、この家に戻ります」

「いったいなんだというのだ？ 気でも狂ったのか？」

お義父様が呆れられたように甲高い口調でおっしゃると、孝彰さ

んも口元の血をぬぐわれ、

「何を言ってる？　こんなことして、出て行くなるともかく、帰ってくるだど？」

清彰さんはお義父様の手を振り払われ、ゆっくりとお立ちになりました。

「明日にでも戻ります」

そして、部屋の壁側に逃げていた私とお義母様の方をちらりとご覧になったのです。

清彰さんと目が合い、身の縮むような緊張が走りました。

先ほどまで火のような激しさをまとっていた清彰さんは、その瞳を別人のように切なく潤ませ、私を見つめられました。

その瞬間、私はすべてを悟ったのです。

私達二人の視線がからみ、刹那にすべてがわかりあったことに、周囲の誰も気づいてはいないようでした。

本当に、星がまたたくような一瞬のことでした。

ああ、清彰さんは、私のためにこのようなことを……

私のために、孝彰さんを殴りつけ、私のために、この家に戻られるおつもりなのだ。

あとでわかったことですが、湖で私たちが楽しく語らっているのを見た桂木が、清彰さんなら私を支えてくださるのではないか、守ってくださるのではないかと直感し、清彰さんにすべてを話していたのです。

私は、どうすればいいのでしょうか？

戸惑い、震え、それでも私はその瞬間を永遠に忘れないと思いました。

孝彰さんのことではいっばいだった心に、まったく違った別の感情

が生まれていくのを感じました。

それは一滴一滴純水が零れ落ち、ゆっくり、けれども確実に染み入っていく感触でした。

否、もしかすると、それはずっと以前にはじまっていたのかもしれないのです。

……水仙の花。

私はその日から、さらに大きな苦悩と葛藤にさいなまれるようになりしました。

紅き糸 4 【雪子】

孝彰さんは、いったいどのような理由で清彰さんに殴られたのか全く見当がつかない……という表情をされていました。私が関係しているなど、夢にも思われていないのです。

まして、妻からすっかり気持ちの離れていた夫は、その妻の中に芽生えたものに気づくはずありませんでした。

数日後、清彰さんはすぐに寮を出られ、松方邸に戻ってこられました。ただならぬ様子の清彰さんにおののき、ご両親様はもちろん、孝彰さんさえ静観するしかない……といった、異様な雰囲気でした。

以来、何かあるにつけ、清彰さんは私に声をかけ、笑いかけ、いつも側で気遣ってくださるようになりました。

あのボートの上で、「このまま時がとまればいいのに……」とよぎった想いが、まるで天に届いたように、清彰さんを身近に感じ、穏やかで甘い感情にひたる時間が増えていきました。

ある日、お借りした詩集をお返ししようと清彰さんのお部屋を訪れた時のことです。

清彰さんはご不在でした。

詩集は机上にお返ししておこうと窓際の机に近づくと、そこには開封されたばかりのお手紙が置いてあり、便箋が無造作に散らばっていました。

次の瞬間、窓からサーツと風が入ってきて、便箋を舞い上げ床に落としました。

拾い上げようと何気なく手に取ると、そこには「自由」「民主主義」「大学の改革」などという言葉が踊っていました。

お手紙の最後に、「日々野博」と、差出人のお名前が記されていました。

……胸の中に、雲のような暗い影が広がりました。

巷では、自由主義・民主主義を訴える風潮が盛んで、様々な運動が起こっており、大きな問題になっていました。（大正デモクラシー）

日々野某という人はそのような運動の急先鋒として、当局が目をつけていた重要人物だったからです。

そのような人たちからすれば、特権階級である私たちは最もうまく憎い存在のはずですし、かたや、華族や貴族院議員にとっても、改革を訴える運動家たちなどこの上なく忌まわしい勢力でした。「東京の日々野が、こちらに来ていているという話した。全く、迷惑なことだ」

お義父様が苦々しいお顔でそうおっしゃるのを、幾度も耳にしたことがあります。

それなのに……その日々野某と清彰さんの間にお手紙を交わすような交流が？

何も見なかったことにしようと慌てて元の場所にお手紙を戻した瞬間、扉が開き、清彰さんが戻ってこられたのです。

「あ、あの、ごめんなさい！ 私……」

最初はきょとんとしたお顔で私を見ていた清彰さんも、まだ床に散らばっていた便箋の一枚に気づかれると、顔を曇らせ、静かにそれを拾い上げられました。

「見てしまったのですね……」

私は小さく頷きましたが、その後しばらくは沈黙が続きました。いつのまにか空は夕日に染まり、窓から金色の光彩が差し込んでいました。

やがて清彰さんが重い口を開かれ、

「ご心配おかけして、すみません」

と、かすかに微笑まれました。

ふっと身体の力が抜けて、肩を落とした瞬間、清彰さんはいきな

り私の手をつかむと、自分の方に激しく引き寄せられたのです。
そして、私を強く抱きすくめました。

紅き糸 5 【雪子】

声が出ませんでした。

両手を下ろしたまま、長身の清彰さんの胸に顔をうずめるような感じでした。

清彰さんはうな垂れたように顎を引き、私の左耳のあたりでささやきました。

「あなたを守ろうと戻ってきたのに、驚かせてしまいましたね」
苦しそうな、かすれたお声でした。

私は目を閉じ、やっとの想いで小さく首を振りました。
そして、ゆっくりと手を持ちあげ、自分の身体を清彰さんから離そうとしました。

けれども清彰さんは、

「もう少し、このままで……」

許されるはずがない。どのような罰をうけることになるだろう。

切り裂かれるような不安と恐怖が全身を貫き、震わせました。

その震えを止めるように、清彰さんは一層激しく、折れそうなほど力を込めたのです。

何かが、私の中ではじけました。

もう一度、両手をあげました。そして、清彰さんの背中をしっかりと握ったのです。

自分の心をごまかすことはできませんでした。

私は清彰さんを愛してしまった。

彼の頬が私の耳元を這い、その切ない息づかいが近づきました。
私たちは視線を合わせる間もないほど性急に……いえ、水が流れるように自然に、初めて唇を重ねました。

窓の外で、孝彰さんの帰宅を告げる車の音がしました。

その夜。

孝彰さんとお義父様が、貴族院議員として欧州視察団に加わるという報が入りました。

「半年間は留守にすることになるだろう」

孝彰さんはそうおっしゃって、さっそく執事らに旅の準備をするよう命じ、私にも留守中の諸々について申し渡しをされました。

私は、すべてを上の空で聞いておりました。

一年前なら、動揺し、寂しさと不安から涙をこぼしたかもしれませんが、少し前なら、あの女性と会うこともできなくなる……と、安堵したかもしれません。

けれど、そんな「仮定」すら、私の中によぎることはなかったのです。

音も香りも風も、周りを取りまく空気すべてが、どこか遠い世界のことにように感じられました。

私の心はずっと、黄昏のあの部屋に留まっております。耳も唇も背中も火照ったまま、甘い熱を持ち続けていました。

紅き糸 6 【月子】

早乙女邸。春風の心地よい穏やかな日。
午後のお茶の時間。

唐突に、華子が口を開いた。

「ねえ、正臣さんは、源氏物語の登場人物で誰がお好き？」

「源氏物語ですか……そうですねえ……」

「私は紫の上ですの」

「ああ、紫の上は素敵な女性ですね。僕も好きです」

「月子お姉さまは？」

「私は朧月夜の君よ」

「ふふふ」と、華子が口を押さえて笑った。

「そうおっしゃると思ったわ。だって、朧月夜って、月子お姉さまによく似ていらっしやるもの！」

「まあ、それは誉め言葉かしら？」

と、私が目を見開いて言うと、

「もちろん、そうですね。華やかで美しくて自由で……」

「奔放で、殿方に積極的？」

今度はそうさえぎると、正臣さんが慌てたご様子で、口をはさまれた。

「朧月夜、確かに大変な美貌の持ち主ですが、一方で、とても聡明で、雅の世には珍しく、しっかりと？自分？を持った強い女性ですね」

私は紅茶カップを軽く掲げて、「ありがとう、正臣さん」と会釈した。

華子はカステラを口に運びながら、意味ありげにつぶやいた。
「そうよ、とっても強くて自由な女性だわ」

華子は、私のことをとてもよく理解し慕ってくれる可愛い妹だけれども、たまに生意気な口ぶりで私を辟易させる。

私は雪子お姉さまのように、父や母の勧めるお相手に嫁ぐのは嫌だった。

だから、せめてお二人が納得するような家系の若様や豪商のご嫡男などと交流し、時間を引き伸ばしていた。

けれども、ただ遊び呆けていたわけではない。いつか自分自身で選んだ方と結ばれたいと思っていたのだ。

今おつきあいしているのは、森倉子爵のご子息で海軍省に勤務されている、森倉和成さまだった。

お父上の森倉子爵は、日露戦争における海軍中將としてのご功績により爵位を賜った方で、現在は海軍大学校長をされていた。

私の両親も和成さんのことはたいそう気に入っており、「今度こそ月子は……」と思っていらいっしやるようだ。

和成さんとは、東京の華族会館で行われた舞踏会でお知り合いになった。

白い制帽を被り、海軍服に身を包まれた和成さんはとても凛々しく、参加していた多くの姫様たちの注目を浴びていた。

当時私はおつきあいをしていた医学博士とお別れしたばかりで、その日もあまり楽しい心持ではなかったので、早々にバルコニーに出て夜風に当たっていた。

そこに、たくさん視線から逃れるように、和成さんが一人でふらりと出ていらっしやっただ。

それからほんの少しお話をただけで意気投合し、一時間後には会場の中心で、私たちは手を取りあってワルツを踊っていた。

周囲の方たちの羨望や嫉妬のまなざしが痛いほどだったが、私はもうすっかり医学博士のことも忘れて、嬉々として舞っていた。

ピロードの紅いドレスを翻しながら。

けれども、この方は私の光源氏ではなかった。
そう、紅い糸で結ばれた「運命」の男性ではなかったのである。

紅き糸 7 【月子】

私の愛馬・クラリスは、以前父が、陸軍が軍馬としてヨーロッパから買い付けてきたうちの一頭を乗馬用にと譲り受けたものだ。今では私の方が気に入って、公務に追われて時間のない父に代わり、いつもクラリスと裏山の散策などに出かけた。

その日は朝から曇り空で、午後からの降雨が懸念されたけれど、私はなんとなく退屈していたので

「お嬢様、今日はお辞めになった方がようございます！」

と、召使の高波が恐い顔で止めるのも聞かずに、さっとクラリスにまたがって、逃げるように家を後にした。

けれども、すぐに後悔した。

裏山の小高い丘に登るつてみると、曇天は重くのしかかり、風は冷たく、心まで陰鬱にさせた。

「やっぱ戻りましょうか」

と、クラリスを撫でながら言うと、彼女も甘えるように私に鼻先をこすりつけた。

次の瞬間、遠くで稲光がきらめき、ポツポツと大粒の雨が落ちてきた。

「振り出してしまったわ！ 急ぎましょう」

慌ててクラリスに飛び乗り、走らせた。雨はすぐに本降りになった。

丘を降り、目の前に森林が見えた。あそこに入れば少しは雨もしのげるだろうと、ムチを入れてクラリスを急かした途端、彼女は濡れた草に足をとられ、その脇の窪みにはまって大きく身体を傾かせた。

「きゃあ！」

私は放り出されるように落馬し、身体を地面に叩きつけられてしまった。

足を痛めてしまったようで、立ち上がるどころか、激痛で身体を起こすことすらできなかった。

観念して仰向けに寝たまま雨を受けていた。顔も髪も豪雨に叩きつけられ、目を開けることもままならない。

クラリスもなすすべもなく、横たわる私の横に佇んでいた。

しばらくすると、雨音に混じって、ギュッギュッと草をふみつける音がした。

「大丈夫ですか？」

一人の男の人が私の頭のところに座り、大きな声で話しかけた。

「…ええ。足を…痛めてしまっ…」

その人は私をすくい上げるように、ひょいと抱きかかえた。

安堵で身体力が抜け、そのまま意識が遠のいた。

紅き糸 8 【月子】

私は足首を骨折していて、しばらく車椅子での生活を余儀なくされた。

お父さまから厳しく叱咤され、足が治っても当分の間乗馬は禁止だと申し渡されてしまった。

事件の翌日、まだ痛くて寝たきりの私の枕元に、母がお茶を運んできた。

助けてくれたあの男性の素性について訪ねると、

「庭師の小島源太の息子ですよ」

「源太の息子さん？」

源太は早乙女家に仕える庭師で、その腕は一流だった。

父も信頼を寄せ、屋敷のすぐ横に家を構えさせて、庭の手入れに留まらず様々な管理等の仕事を長年任せてきた男だった。

子供たちは遠方にいるとかで、妻と死別した後ここ数年は一人暮らしだった。

「もともと東京の方にいたそうだけれど、ひと月ほど前に源太のところに戻ってきたらしいわ。下町の道場で剣道を教えているそうですよ」

「そうなの……」

「丁重に御礼しておいたわ」

でも、私は会っていない。会ってみたいと思った。

直接御礼も言いたいけれど、なんとなくその人に興味が湧いたのだった。

あの雨の中、朦朧とした意識の中で、あの人に抱かれてさざ波のように揺れていた感覚を何度も反芻した。

数日後、母にせがんで、小島源太親子を呼んでもらった。

息子の名前は、小島勇作と言った。

あのときはよくわからなかったが、とてもがっちりとした大きな男だった。

かすりの着物に縦縞の袴という恰好と相まって、いかにも武術などに通じているという風貌だった。

「その節はありがとう。命拾いしました」と笑うと、勇作は

「あんな日に馬で出かけるなんて無謀です」と、静かに言った。

「え？」

「馬もかわいそうです」

水をかけられたように、サツと血が引く感じがした。

「勇作！ お嬢様になんて口を！」

源太が驚いて、勇作の腕をつかんだ。

横に立っていた華子が、クスツと笑った気がした。

「気にしないで、源太。その通りだわ」

私は動揺を悟られないよう、嫣然と微笑んでみせた。

勇作とは、このようにして出会った。

それは、特別な社会の紳士たちに優しくされ、美しい素晴らしいともてはやされることに慣れていた私にとって、衝撃的なものだった。

と言つて、彼が無礼だと怒ったり不愉快に感じたりという想いは微塵もなかった。

動揺したのはむしろ、好意的だと信じていた人の言葉に「傷ついた……」という表現が近いかもしれない、と思った。

私の気性を知っている華子などにしてみれば、全く想像できなかっただろう。

この人のことをもっと知りたいと思った。そして、この不思議な感情の正体をつきとめたいと思った。

紅き糸 9 【月子】

足が完治してから、私は勇作のいる剣術道場「竜心館」に足繁く通った。

最初は、勇作への興味から見学と称して門下生たちが稽古する様子を眺めていただけだった。

一番最初に訪れた日など、私は流行の洋服を着て、ヒラヒラとスカートを翻しながら道場にাগったので、みな目を引き、勇作からは睨まれてしまった。

以来、なるべく地味な文様の小紋の着物を着て、薄化粧で出かけた。

勝気な私が相手に合わせ、気配を殺してもそこにしようとすることや、むさくるしい稽古場に進んで足を運ぶのを、華子や正臣さんは信じられないと言った表情で見送った。

勇作も、最初は軽く挨拶する程度で私など眼中にないと言った感じだったが、やがて、

「あの者がうちの道場で一番の達人なんですよ」

「さっきの動きが、この勝負の分かれ目だったのです」

などと、横で説明してくれるようになった。

私自身、剣術など自分からは遠いところにあるものと思っていたが、道場の独特の緊張感、静寂と激動の間・剣を交える者の間にほとばしる命の煌きに、次第に心惹かれていったのである。

それは私が行った数多くの場所や体感してきた人間関係の中では、一度も出会ったことのないものだった。

理屈ではない、そこには、あえて表現するなら「魂を揺さぶられる」とでもいう歓喜があった。

そして何より心をとらえたもの……

道場では無敵の勇作の雄々しい姿に、私はまるで少女のようになるときめくのだった。

母が、そんなに剣術に興味がわいたのなら、しかるべき先生をつけた方が良いと言いつ出した。

華子に聞いたのだが、源太が「お嬢様があのようなところに通い詰めるのはよくない」と、母に進言したらしい。

勘の鈍いおっとりした母はともかく、源太はなんとなく察知しているのだらうと思った。

ある日、和成さんが私を訪ねて早乙女邸に来られた。

怪我のときも何度もお見舞いに寄ってくださり、お手紙もたくさんいただいていた。

その日は、私の誕生日にとフランスから取り寄せたというドレスを持って来られたのだ。

皆での昼食会のあと、私の部屋で二人きりになったとき……

私はその日、今までのように和成さんのお顔を見ても、喜びを感じることができずにいた。

美しい銀色の帽子もドレスも、色あせた無用の長物に見えた。

だから、和成さんが後ろから私を抱きしめ、接吻をしようとしたとき思わず身をよじり、逃げてしまったのだ。

「月子さん？」

和成さんが怪訝そうにつぶやき、私の顔をじつと見つめた。

私が無表情のまま、窓の外に目をやって黙っていると、和成さんはこうおっしゃった。

「実は、私は今日、正式にあなたに結婚を申し込むために来たのです」

「結婚?!」

紅き糸 10 【月子】

「私の父からも、近いうちに早乙女伯爵に正式な書状が届きます」
和成さんは、淡々とした口調でそう言われた。

そうして、もう一度私の手をつかみ、無理やりに抱きしめようとした。

「やめてください」

私は再度身をよじって、激しくそれを拒んだ。そして、

「結婚をお受けする気持ちはございません」

「月子さん？ どうしてですか？」

「あなたを愛していないからです。今日、はつきりとわかりました。他に理由はございません」

和成さんはお顔を真つ赤にされ、扉をたたきつけるように部屋を出て行った。

それからの数日は、早乙女家は大騒動だった。

父は激昂し、母は泣き喚き、なんとか私を折り伏せようと躍起になっていた。

けれども、私は頑として首を縦に振らなかった。

数日後、私は竜心館に行った。道場の片隅に座って、ぼんやり見学していた。

稽古が終わった後、勇作が声をかけてきた。

「僕も今日は父のところに行きます。お屋敷までお送りしますよ」
私は勇作とゆっくり話したかったので、車を返し、家まで並んで歩くことにした。

しばらくは、黙って歩いていた。

町は立ち並ぶ商店や往来の人たちで活気にあふれ、なんだかまぶ

しかった。

やがて私は、胸にこみあげる熱情に任せ、とうとう口を開いた。

「先日、ある方から結婚を申し込まれました。でも、お断りしたんです」

勇作は黙っていた。私は足を止め、何歩か先に進んだ彼の背中に言った。

「その方を愛していなかったから……そして、気づいたのです。私が愛しているのは……」

勇作は振り返った。彼の肩越しに、一台の荷馬車が横切るのが見えた。

その目前に、はしゃいで路上を走り回っていた子供達の一人が飛び出した。

荷主があわてて手綱をひいたため、馬は勢い余って大きく反り、方向を変えて荷馬車ごと私と勇作の居る方に突っ込んできた。

「……あなた」

そうつぶやいた私の言葉は、馬のいななきにかき消された。

一瞬、勇作は私をかばうように腕を回して、真横の店の軒先に飛び込んだ。

間一髪で馬は私たちの横をかすめ、轟音を立てて隣の花屋に突っ込んだ。

展示していた花が飛び散り、あたり一面、花びらが舞った。

たくさんの方がかけつけ、口々に大声で大丈夫か？と、叫んだ。

「月子さま……」

と、私を抱きかかえたまま、勇作が声を発した。

彼の胸からは、汗の匂いがした。

「僕には、いいなすけ許婚がいます」

耳を疑った。

「あなたにはあなたにふさわしい方が、僕には僕に相応の相手がいいます。これは、どうすることもできないのです」

喧騒の中、私は真っ白になり、無音の世界に突き落とされた。

勇作はなんて残酷なのだろう。

私は、愛しているという言葉さえ、きちんと伝えることを許されないのか。

私は勇作の手を振り解き、小走りにその場を後にした。

クラリスから落ちて傷めた足が、思い出したように痛んだ。

とめどなくあふれる涙は、その痛みのせいだと言い聞かせた。

紅き糸 11 【月子】

私の生活は、また元に戻った。

着飾って、華やかな社交場に出かけて、次々にお相手を変えてダンスを踊り、皆と軽口を叩いて笑いあった。

お酒もたくさん飲んで女王のように振るまいながら、それでも何一つ満たされることなく、胸の中は墨を塗ったように真っ黒だった。

一ヶ月ほど経ったある朝、食事のときに母が父に向かって言った。「源太の息子さんが、大変なことになっていると聞きましたわ。なんでも、目にたいそうなケガを追ったそうですよ」

凍りついた。スプーンの手が止まった。華子や正臣さんの視線を感じた。

父も続けた。

「ああ、筋の悪い男たちに絡まれたお嬢さんを助けようとして、いさかいになったらしい。なまじ武術に長けているからな、油断したのだろう。相手は刃物を持っていて、ほんの少しの隙を突かれて、目を切りつけられたそうだ」

それからのことは記憶にない。

気がついたら源太の家の前に立っていた。

中に入ると、源太が朝餉の茶碗を持ったまま、ぼんやりと宙を見つめていた。

私を見て、我に返ったように「月子お嬢様！」と叫んだ。

「勇作は?! 容態はどうなのですか?!」

すると源太は、茶碗をガチャンと床に落とし、その目からほろほろと涙をこぼした。

そして、「私のせいなのです。私が悪いのです」と、絞り出すように何度も言い、ひれ伏して泣いた。

二ヶ月ほど前、源太は息子の勇作を呼び出して告げた。

「竜心館からもおまえからも、月子お嬢様を遠ざけるように」
もしそれができぬなら、

「たとえ命に代えても、月子お嬢様の想いを受け入れてはならない……」と。

私と勇作が特別な関係になることを、源太はずっと心配していた。二人が思いあつたとて、しょせん身分違いの恋、決して結ばれることはない。

何か間違いでもあれば、大恩ある早乙女伯爵を裏切ることになってしまう。

源太の不安は、やがて大きな恐怖と転じ、その老いた身体にのしかかった。

「私の予感は的中しました。もう遅かったのです。すでに勇作は……勇作にとつては……」

「あなた様はなくてはならない存在になっていたのです」

紅き糸 12 【月子】

雷に撃たれたように、私の体中の血が逆流した。

まさか…まさかそんなはずが… 私、その場に膝を落として座り込んだ。

「お嬢様が子爵家との縁談をお断りになったと聞き、私は頭が真っ白になりました。もし、その原因があいつにあったら…と。私はあいつを殴りつけて、今度こそお別れするようにと厳命したのです。ですからあいつは、断腸の思いであなたに嘘をついたのです。？許婚がいる？」

その後、勇作は荒れたと言う。

稽古はまるで鬼のように激しく、門下生を容赦なく打ちのめした。夜になると酒場に出かけ、浴びるようにお酒を飲んだ。

そしてある日、町の骨董屋を訪れていたどこかのご令嬢に、町の荒くれ者がしつこく絡んでいるのを目にしたとき、飛び込んでいった。

「その女性に、あなた様を重ねてしまったのでしょうか」と、源太は言った。

稽古が休みだったため、その日の勇作は昼間から泥酔していた。けれども、瞬く間に男たちを負かした。

ただでさえ心に闇を抱えていた彼には、鬼気迫るものがあつたのだろう。

だが、逃げてひそんでいた一番軟弱そうな男が、骨董屋の店先から飛び出してきたのだ。

その手には短刀が握られていた。

「心得のあるものなら、そんなとき身体のどこかを一突きしてくるでしょう。ですが、そやつはよほど恐かったのか、ただやみくもにわあわあと叫んで、刀を振り回したのです」

酔っていた勇作は、片付けてしまった直後の油断も手伝ってか、すばやくかわすことができなかった。

短刀は空を切り、直後に彼の目を切り裂いたのだ。

「あいつは来月、ご主人様の推薦で宮内省の剣術大会への出場が内定していました。けれど、けれども……」

源太は身体を震わせた。

「あいつは完全に失明してしまいました。剣術どころか、普通に生きていくことさえままならない身体になってしまったのです」

そして、消え入るような声でつぶやいた。

「私があなた様との仲を引き裂いたりしなければ、こんなことにならなかったのではと……」

私は、勇作が好きだった。

そして、あの道場の空気が好きだった。

それが、源太をこんなに追い詰め、勇作を傷つけて光を奪ってしまったのだ。

朝空には、白く力ない月が浮かんでいた。

勇作は、もう永遠に見ることはできないのか。

私はこれから、どうすればいいのだろう。

紅き糸 13 【華子】

雪子お姉さまは、ときおり早乙女家にお顔を出されるけれど、なんだかお元気がないの。

松方侯爵が近いうちにフランスへ行かれるとおっしゃっていたが、そのせいかしら。

もとより色白で綺麗な人だけれど、この頃はいつそう透き通るように映って、なんだか恐いほど美しい。

早乙女家に来て、お父さまの書斎で難しい本ばかり読んでいらつしやるし。

それも文学ではない、政治や思想にまつわるものばかり。

月子お姉さまは、毎日毎日「竜心館」に通っていらつしやる。

いつも最先端のお洋服を着て、お昼はお買い物、夜になるとパーティとお忙しく過ごされていらつしやったのに、近頃は落ち着いた色合いのお着物に薄化粧。

いつも回りにいた華やかなお取り巻きともすっかり疎遠のご様子。別人のよう。

でも、なんとなく私は、今の月子お姉さまの方が好き。

あの勇作さんにすいぶんご執心みたいだけれど。

確かに、今までお姉さまがおつきあいしていた方たちとは何もかも全く違う。

お姉さまが興味をお持ちになるのは、よくわかる気がする。

けれども、もし本気でお好きになったとしても、周囲が認めるわけがないと思うと、私もとても不安。

どうかお姉さまが悲しい想いをされませんように……と、はらはらしながら見ているだけ。

最近、お父様とお母様は、私にちらほらと縁談を持ってこられる

ようになつたの。

お父さまは、三人の娘の誰か一人でも宮家に嫁がせたいとお考えのようだった。

また、あとの一人は婿養子をとらせてその方に松方家の家督、つまり爵位を継がせることを切望されていらつしやった。

月子お姉さまにはいつも恋人がいらつしやって両親の言うことに耳をかされないの、私に白羽の矢が……

昨年、陛下の弟宮である白河宮の皇子がお妃選びを始めたとき、なんとか華子を……と奔走なされたようだが、皇子には心に決めた姫がいらつしやるとわかり立ち消えに。

それなら次は、華子に婿養子……と。

内藤正臣さんと呼んだのも、その候補者のお一人として吟味なさるおつもりだったのだ。

正臣さんは私より2つも年下だし、結婚相手として考えよとおっしゃられても無理。

私は両親やお姉さまたちや子供の頃から仕えてくれている高波たちに守られて、ふわふわと子供のような感覚で毎日過ごしていたので、まだまだ結婚なんて実感できない。

恋のお相手は、夢の中。

例えば、小説に出てきた素敵な殿方に胸をときめかせたり、お友達の恋愛を自分に置き換えてわくわくしたり。

まだそれで充分。

ああ、本当に困っているの。

紅き糸 14 【華子】

ある日、正臣さんが大学のご学友を連れてこられた。

有島男爵の次男・有島千秋さん。

正臣さんと同じように、東京から来られている方。

玄関でご挨拶をしたとき、私は驚いて息を呑んだ。

だって、まるで異国の方？と思うほど、彫りが深くて綺麗なお顔立ち。

髪の色が薄く、瞳も黒ではなく灰色に近い感じだった。

玄関で正臣さんが紹介してくださったとき、その瞳にじっと見つめられて、思わず顔が赤くなってしまったわ。

私は侍女からお茶とお菓子が乗った盆を奪い取って、正臣さんのお部屋の前にそつと近づいた。

お二人の話し声が聞こえた。

「さっきの人が、華子さん？」

それは、千秋さんのお声。

私のことを話しておられる！ 胸がドキんとした。

「ああ、そつだよ」

「かわいい方だね。まるで僕たちより年下みたいだ」

頬がぱあつと赤くなって、お茶をこぼしそうになってしまったわ。

……でも、千秋さんの次のお言葉で、あつという間にその熱は冷めてしまった。

まるで、水でもかけられたように。

「でもどうせなら、上のお二人にお会いしたかったな。だって僕は、うんと年上の姫様が好きなんだ」

「君は本当に困ったやつだな」

正臣さんがあきれたように言われ、

「ここのお嬢様方に関心を持つのはやめてくれよ。君が今までつき

あつてきた女性たちとは違う。万が一何かあれば、君を連れてきた僕が伯爵にたたき出されてしまう」

私がノックして入っていくと、二人はとても驚かれた表情をされていた。

二人の視線が痛いほど刺さり、緊張で手が震えた。

そして、千秋さんの制服に紅茶をこぼしてしまった。

「わっ！」

「ああ、私ったらなんてことを！ 申し訳ありません！」

慌ててナプキンで拭こうとすると、千秋さんはその手をぱつと静止され、

「お気になさらないください。貴女様の手がよごれてしまいます」
私が「え？」と顔をあげると、鼻があたりそうなほど近くに、千秋さんのお顔があつた。

心臓が破裂しそうに、ドクンと高鳴った。

それが、千秋さんのいつものやり方なのだと、後で正臣さんにお聞きした。

正臣さんは、千秋さんを私に会わせてしまったことをとても後悔していると嘆いておられた。

千秋さんは、大学でも有名な女性好きで、見るたびに違った女性を連れていらっしやるような方なのだそう。

私のような世間知らずを誘惑するなんて、造作もないことだと正臣さんはおっしゃった。

「どうかくれぐれも、あいつに関わらないよう気をつけてくださいね」

と、念を押された。

それなのに……

その日を境に、夜も昼も、千秋さんのことばかり考えるようになった。

私っ
たら
なんて
愚かなの。

紅き糸 15 【華子】

正臣さんの心配をよそに、千秋さんは頻繁に早乙女家に出入りされるようになった。

とても明朗で、かつ、物腰はどことなく雅で美しく、お父さまやお母さまはたいそう気に入られたご様子。

千秋さんの念願どおり、お姉さまたちとお顔をあわせる機会にも恵まれたが、お二人はさしてご興味をしめされず、千秋さんもそれをお察したのか、おとなしくされていた。

特にこの時の月子お姉さまは、勇作さんとは何もかも正反対の千秋さんなど歯牙にもかけなかった。

いい気味……と、いじわるな気持ちを抱いてしまったわ。

一方で、千秋さんへの関心はますます高まり、正臣さんご帰宅の時間になると、ご一緒ではないかとそわそわしてしまう。

ある日、正臣さんがご不在のときにふいに千秋さんが尋ねてこられた。

侍女の高波が正臣さんのお帰りまでにはまだ1時間はございます、と告げると……

「いえ、今日は、華子さんにお取次ぎいただけないだろうか」

高波から聞いて階段をあわてて駆け下りてくると、千秋さんにはにっこり微笑み、私を庭の散策にお誘いになった。

そして、玄関をでるやいなや、

「ねえ華子さん、あなたは僕のことをどう思っておられるのかなあ」と、唐突に。どきまぎしてしまい、

「どう……って？」と、小声でつぶやくように言うと、

「正臣があなたに、僕を女好きだとふきこんだでしょう？ 僕には近づくなって」

凶星だったので、言葉を返すことができなかった。

「僕は女友達が多いし、まあ確かに女性とおつきあいする機会は多いです」

そんなあけすけなお言葉に、私は思わず足を止めてしまった。この人、何を言いたいのか？ ……首をかしげた。

千秋さんも立ち止まり、足元にあった桔梗の花を手折って、

「でもね、本当はね……」

そう言って振り向かれ、私に手渡しながら、目を細めるようににっこりして、

「誰のことも本気で好きになつたことない」

私は桔梗を受け取り、木漏れ日の下でキラキラ輝く千秋さんのお顔をまっすぐに見て、

「……だから？ 何をおっしゃりたいのか？」

「だから……」

「本当に僕を好きになっちゃだめですよ。あなたが傷ついてしまうから」

パキンと、頭の中で音がした。ガラスが飛び散るような音。それもまた、あなたの「やり方」なのかしら？

紅き糸 16 【華子】

雪子お姉さまは、松方侯爵が欧州に行かれた翌週、早乙女の家にお里帰りされた。

しばらくはこちらで過ごされるとおっしゃっていた。

月子お姉さまはあいかわらず、週に2〜3度は勇作さんの道場に通っている。

道場の子供達と仲良くなり、これがなかなか刺激的で楽しいのよとおっしゃる。

私は……

私は、もう千秋さんのことは考えるのはよそうと思った。

正臣さんにもそうお伝えし、何事もなかったように笑ってみせた。「もう心配なさらなくてくださいませね」と。

ところが、それから1ヶ月ほど過ぎた日。

正臣さんから、千秋さんが退学するかもしれない、とお聞きした。心の中で消えかけていた火が、また真っ赤に息を吹き返す。

「千秋の父上の有島男爵が、爵位を返上するかもしれないのです」と、正臣さんは苦悩の表情を浮かべられた。

「有島自身は何も変わらず、明るく振舞ってはいるのですが……」

そんな噂が大学に流れたとたん、千秋さんを取りまいていた良家の姫君たちはたちまちいなくなり、ご学友も、正臣さん以外は少し距離を置くようになったと。

「ずいぶん無理をしているのだろうと……今はまだ、ご実家から正式な連絡はないようだ」

ため息をつく正臣さんを、本当にお優しい人なのだと、あらためて思ったわ。

子供がいなかったりまたは女子だったり正当な継承者がいない華族は、爵位を持つ当主が亡くなると返上しなくてはならない。

けれども、特権階級にすることが経済的に重荷となっている貧しい華族も少なくなき、破産に追い込まれて爵位返上を余儀なくされることもあるらしい。

千秋さんのご実家は、どうもそれにあたるらしい……

なんだか複雑な思いが胸をしめつけた。

私が今度千秋さんとお会いしたとき、前と同じように眩しく思えるかしら。

もちろん、彼が男爵の子息だから魅かれたわけじゃない。

でも、キラキラと自信に満ち溢れた彼には、もう会えないのかも

……

神様は、そんな私をお試しになった。

正臣さんからそのお話をうかがった翌日、千秋さんが早乙女家に。

その日の朝、テラスでお茶を飲んでいたお姉さまたちのところに行き、今の私の揺れる想いを打ち明けていた。

「本当に退学されてしまってもうお会いできなくなるなら、それまでの方……つまり、ご縁のない方だということだわ」

月子お姉さまはそう言われた。けれども、そのあと、

「ただどね、華子が本当に好きなら、その方が華族であるとか、女性好きであるとか、関係のないことよ。今の自分の心に正直に生きるべきよ。傷つくのがこわくて引き返すなら、それも私は止めやしないわ」

月子お姉さまはそう言つて、大きく背伸びをされた。

雪子お姉さまはしばらく黙っていたけれど、月子お姉さまの言葉を受けて、

「そうね。もし思いが深ければ、回りがどんな状況であれ、誰にも止められないかもしれないわね。ただまずは、自分の心としっかり向き合ってみなくては……私は、華子ちゃんに傷ついてほしくないけれど」

午後、千秋さんが来られてすぐ、部屋に閉じこもっていた私を、正臣さん呼びに來られた。

「あなたとお話したいらしい。僕は席をはずしてくれと言われました」

不安そうな正臣さん。私も、手のひらをぎゅっと握り締めた。

正臣さんのお部屋の扉を開けると、窓辺にもたれるように立たれていた千秋さんは、ゆっくり私を見た。

今までに見たことのない、真剣な表情。

「大学はしばらく休学して、東京に戻ります」
そう切り出された。

「その前に、華子さんには本当のことをお伝えしておきたいと思って、ここまで来ました」

そして、学生服の内側から、一通の手紙を取り出した。

「僕の気持ちは、すべてこれに書いています」
手が震えた。

「今、お読みしても？」

「いえ、僕が帰ったあとに読んでください」
千秋さんはそう言って、かすかに微笑んだ。

私が予め思っていたとおり、目の前の千秋さんは以前とは別人のようで、高慢で自信たっぷりの貴公子ではなかった。

けれどもその時の、はかない笑顔。そして、まっすぐに潤んだ瞳

……そこに千秋さんの？本当？がある気がした。

私は胸を破られたような激しい衝撃を受け、ちゃんと「さよなら」も言えぬまま、逃げるように千秋さんと別れた。

すぐに部屋に戻ったが、お手紙を開封することができなかった。

この手の中に、あの方の？本当？がある。

一刻も早く知りたい。けれども、知ってしまえばすべてが終わってしまいかもしれない……大きな葛藤にかき乱された。

それでも、向き合わなくては。千秋さんに。そして、自分の想いに。

私は、ペーパーナイフを手にした。

手紙の前半は、千秋さんのご実家について触れられていた。

お父上の有島男爵がお身体を壊され、それを機に経済状態が悪化され、半年ほど前からには特に社交界でのおつきあいなどが困難を極めているということ。

長男であるお兄様が奔走され、なんとかやりくりされてきたものの、そろそろ限界が近づいているということ。

そんな中、何も力になれず、手をこまねいてご両親やご兄弟の姿を見てこられた千秋さんが、苦悩の末、思いつかれたこと……

それは、自分がしかるべき結婚相手を見つけ、姻戚となったのそのお相手のご実家から男爵家への援助を賜ろうというはかりごとだった。

もちろん、ご両親様もお兄様も、年若い千秋さんのそんな申し出など一笑に付した。

「馬鹿馬鹿しい。おまえは何も心配するな」と。

けれども千秋さんは、自分の生まれながらに授かった美しい容貌を、こんなときこそ最大限に利用しようと、強い決心をされた。

あえて旧知の人が多い東京を離れ、京都帝大に來られた。

以来、ご実家の窮地を救いたい本心を隠し、親友の正臣さんさえ欺いて、様々な女性と関係を持つようになった。

華族のご令嬢や裕福な資産家の娘……いろいろな女性を品定めし、少しでも有利な相手を見つけようと躍起に。

そしてついに、早乙女家に来る機会が巡ってきた。

「早乙女家は僕にとって魅力的でした。姫君ばかりの伯爵家は、放っておけば断絶してしまう。きつと婿養子を取り、その婿に爵位を

継がせたいという想いもおありだろう。うまくいけば、僕がそういう立場となり、いずれは伯爵になれるかもしれない。そうになれば、有島の家だつて救うことができる……そんな野望に駆り立てられ、正臣に頼み込んで、あの日、早乙女伯爵邸にありました」

「しかし、僕がお会いした早乙女家のご令嬢は……貴女は、これまで僕がおつきあいしてきた女性たちとは、全く違っていた。

一輪の花のように愛らしく、無垢な感じがした。僕は初めて、自分の計画や欲を忘れて、純粹な気持ちで女性を見、想いを馳せました」

「しかし僕は、そのような想いを打ち消しました。

遊び人のように思われていた僕が、実家のために女性の心を利用しようと目論んでいた僕が、貴女を求め、騙し、早乙女家に入り込むなんて……そんなことできない、と。

貴女が僕にとって他の女性とは違った大切な存在に思えたからこそ、貴女を巻き込んではいけなかったと思いました。僕の恋はすべて政略結婚のため。最初から本気の恋なんてできないのだ……

けれども僕は、早乙女邸に行くことをやめられなかったのです。

貴女に会いたかった。僕を見て、顔を赤らめ、唇を尖らし、少女のように天真爛漫に振舞う貴女をずっと見ていたかった。

貴女に桔梗を渡しながら言った言葉は、本当です。貴女を傷つけたくなかったのです。

でもあれは、僕が貴女を諦めるために放った、別れの言葉でもあったのです」

「いつそ貴女に想いを打ち明け、計画でもなんでもなく、貴女と本当に結ばれたら、結婚できたらと、何度も思いました。悩みました。そんな矢先、東京から電報が来たのです。

？スグカエレ？と。父の病状が悪化したとのことでした。

僕が悠長に、恋の行く末を悩んでいるひまなどなかったのです。間に合いませんでした。

もしいつかもう一度お会いすることができても、おそらくその時の僕はもう華族の息子ではないでしょう。たとえ貴女と心が通じあっても、早乙女伯爵にお許しただけの立場ではないでしょう。まして、婿養子なんて……それももう見果てぬ夢です。

だからこそ、最後に本当の気持ちを伝えておきたかったのです。貴女が苦しむかもしれないと思いながら、僕の初めての恋、せめ

て貴女にだけは、心にとどめておいてほしかったのです。

わがままな僕をどうかお許しください。

貴女のお幸せを、これからもずっとお祈りしております。さようなら

有島千秋

私は、泣きました。

生まれてはじめて、恋に泣きました。

その数日後、千秋さんは寮を出て東京に戻られたと聞いた。

お姉さまたちも、正臣さんも、見送りに行かないの？ と、心配

されたが、私は家から一步も出なかった。

千秋さんはそれを望んでおられないと思ったから。

京都でのつらい思い出を、いたずらに重ねてしまっただけだと思ったから。

私は、この数ヶ月で、ずいぶん大人になった。

それから二ヶ月ほど過ぎた後、あの忌まわしい関東大震災が起こるのだった。

そして、私と千秋さんが再会するのは、ずっとずっと先。

次回 第三章「蒼き炎」スタート

蒼き炎 1 【雪子】

6月の初め、夫の孝彰さんとお義父様が欧州へ立たれました。

お義母様もこの機にしばらくお里帰りされることになり、翌日には松方の家を出られました。

お屋敷には数人の召使が残されただけで、松方家の人間は私と清彰さんの二人きりになってしまったのです。

その日の夕食のとき、私はどんなお顔で清彰さんと向き合えばよいのか考えあぐねており、食卓についても気まずい空気が流れていました。

桂木が給仕としてついていたものですから、想いをさとられぬよう、必死で平静を装っていました。

やがて、口を開いたのは清彰さんの方でした。

「僕は少し安堵しています」

と、微笑み、

「兄さんがいなくなったから、お姉さまにも自由なお時間が増える。何もお考えにならず、ゆっくり過ごされてください」

「……」

違うのです、清彰さん。あなたもわかっていらっしやるはずです。私はもつともつと大きな、黒く深い苦しみの海に突き落とされて、もがいているのです。

あの日、あの黄昏の中の接吻……

あの日以来、清彰さんは大学の恩師・水野博士のお手伝いで大学にお泊りになっていて、ほとんどお顔をあわせることがありませんでした。

私もまた、孝彰さんの渡欧準備や挨拶回りに追われ、忙しく過ごしておりました。

けれども、あの瞬間を、忘れたことは片時ありませんでした。

お会いできない分、ますます想いが募りました。
甘い慕情は、裏返せば鋭く熱い刃となってこの心を刺し、苦しめるのです。

今こうして清彰さんと二人で過ごす時間が増えることに、嬉しいという感情がなかったといえは嘘になってしまいます。

その反面、自責の念も耐え難く、重くのしかかり、私の胸の内は赤く膿んでいました。

顔を上げてじつと清彰さんを見つめると、彼は桂木の方をチラリとを見、再度私に視線を戻されました。それは、

「周囲に気づかれないうちに振舞わないといけません」
という合図のように見えました。

その時思いました。

もうとうに私たちは人に言えぬ充分な秘密を持ち、こうして罪を重ねているのだ。

そして、これからも…

体の芯がしびれ、熱がかけめぐりました。

やがて清彰さんは、

「ああそういえば…お姉様にお話しようと思っていたことが…」
と、何か思い出したように言われました。

「あの手紙の差出人、日々野氏のことですが……」

あの日見つけた、日々野という方からのお手紙の一件も、実は私の中で暗い影を落としていました。

実家の早乙女邸に戻った際、父の書斎で心当たりのある本や資料を何冊か読みました。

当時わが国では、折からの自由主義運動の中、少しずつ台頭していた共産主義の思想が、前年のソビエト連邦の誕生により、ますます広がりを見せていました。

父の持っていた資料によると、日々野氏は共産主義者のようでした。

た。

水野博士に連れられ足を運んだサロンで、清彰さんはこの日々野氏と出会い、その国や民を思う情熱に深く感銘を受けたということでした。

「社会変革の夢を語る日々野さんは、尊敬に値する方だと思います」

清彰さんはそうおっしゃいましたが、とても危険で恐ろしいことだと思いました。

それは、ご両親様や兄上さまだけでなく、特権階級である華族すべて、そして、清彰さん自らを否定する思想でもあったからです。

「けれど、そこまでです。資料にするためにお話を伺っていただけです。お姉さまは何も心配されなくてください」

「本当に？」

「ええ、もちろんです」

蒼き炎 2 【雪子】

「そういえば、池のほとりで蛍が飛んでいたそうですよ。ねえ、桂木」

食後の紅茶を運んできた桂木に、清彰さんが話しかけました。

「はい、たくさん出ておりました」

「お姉様、どうです、今晚観に行きませんか？」

星月夜でした。

「蛍を愛するには、少し明るすぎますね」

玄関で私を待っておられた清彰さんのお顔を見て、胸がときめきました。

松方家に嫁いであら5年経ちますが、蛍を観に行くなんて初めての経験でした。

結婚したばかりの頃、孝彰さんは優しく、様々な場所へ私を連れて行ってくださいました。けれども、庭のボートに乗ったり、蛍を觀賞したり、そんなことを提案されるような方ではなかったのです。

清彰さんと並んで、池のほとりまで黙って歩きました。

やがて視界が開け、広い池が月の下に静かに姿をあらわしました。蒼く澄んだ夜の池は、これまで見たこともない幻想的な佇まいでそこにありました。

先だって二人で乗ったボートの付近までたどりつきましたが、蛍は一匹もみあたりません。

「いませんね」

「明るすぎるから、出てこないのかしら」

そう言って横を見上げると、清彰さんの肩の辺りでぼうつと光が。

「あ」

一匹の蛍が、とまっていました。

私の視線で清彰さんも気がつき、息を殺してじっとその蛍を見つめました。

蛍は、ヒスイのような深緑色の体を小さく揺らし、濃密な光彩を放っていました。

ぼうつとにじむ発光と、波がひくような闇の到来……月夜と闇夜、満ち潮と引き潮、生と死……無常の営みを、光の点滅で一瞬に体現して見せるように、また、それを使命と定め、誇りとしているかのように、限りある命を燃やして蒼い炎を進らせるのでした。

やがて、すうつと飛びました。

私はそれを目で追いながら、「もう少し見ていたかったのに」と、残念そうな笑みを浮かべて清彰さんを見ました。

その瞬間、彼は覆いかぶさるように、私を抱きしめました。

「雪子さん」

私は目を閉じました。

「今夜、あなたを……」

来るべき時が来たのだと、覚悟しました。

その夜更け、私は召使たちが寝静まってから、清彰さんの部屋に行きました。

窓から洩れ来る月光の下で、私たちは結ばれました。

私の中では喜びと後悔が、祝福の鐘と破滅の足音が、交差するようには浮かんでは消えました。

まるで、あの蒼い光の点滅のように。

蒼き炎 3 【雪子】

私たちは、人前ではこれまでどおり義理の姉弟として振る舞いながら、日を重ねる毎に強く結ばれていきました。

自分の罪深さに眠れぬほど怯えながら、それでも清彰さんへの想いを止めることはできませんでした。

ある日、清彰さんにまた水野先生からお呼びがかかり、学会に出席される先生の助手として東京に行かれることになりました。

たとえ数日でも、清彰さんと離れるのが心細く、この松方の家にとり残されるのが無性に寂しくて、私もその間早乙女の家に戻ることに致しました。

熱に突き動かされるように求めあっていた私たちが、しばらく距離を置き、冷静さを取り戻すには良い機会だったのかもしれない。

早乙女の家に戻った日の夜は、たまたま正臣さんのご学友の有島千秋さんというお方がいらして、みんなで楽しく夕食をとりました。

日頃は快活な華子ちゃんがしおらしく落ち着きがない様子なのは、この美しいご学友のせいかしら？　と思うと、少し微笑ましく思えました。

足の怪我也癒え、今では毎日のように剣術道場へ出かけていくという月子ちゃん、以前の棘のある薔薇のような美しさではなく、百合のように清楚で凜とした雰囲気なたたえていて、どこかまぶしく映りました。

私は……

みなさんの目にはどう映っているのでしょうか？

お父様やお母様、妹たちや正臣さんたち、誰とお話していても、常に彼の面影が脳裏にあり、同時に、あの濃んだような甘い痛みも、常に胸をしめつけていました。

誰かが、私に話しかけました。

「……ですよね？」

正臣さんのご友人、千秋さんでした。

「え？ ああ、ごめんなさい。もう一度お願いできるかしら？」

「松方清彰さんは、雪子様の義弟にあたられる方ですよ？」

思いがけず彼の名前が飛び込んできたので、ドキンとしました。

「ええ、主人の弟ですわ」

「あの方は大学でも有名ですよ。文学部でも将来を嘱望されていたしやるすばらしい方だとお聞きしています」

「ええ、今も、水野先生のおともで東京の学会に……」

「ただ……」

「え？」

「水野先生ご自身は、あまり良いお噂を聞きません。なんでも、共產主義者との交流がおりとかで……」

蒼き炎 4 【雪子】

私は、清彰さんの言葉を何度も反芻し、心を落ち着かせようと思いました。

？お姉様は何も心配されなくてください？

水野先生にそのようなお噂がある、それは、清彰さんにも少なからず関わりあり、日々野氏とおつきあいも単なる？資料集め？ではないということを示唆しておりました。

清彰さんにおたずねし、もしも、そのような思想に傾倒していると今度こそはつきりお認めになられたら、私はどうすればいいのでしょうか。

今、私たちがと進んでいるのは、許されない恋の道行き。

その上、自分たちの家や家族や、これまでの生活・半生、すべてを否定し、覆すような思想への傾倒。

その忘恩に対する報いで、私たちはどんな業火に身を投じることになるのでしょうか。

そんな葛藤の中で、あらためて自分の心を見つめ、私はまざまざと見せつけられたのです。

私が、どんなに清彰さんを愛しているのかを。

そして、決意したのです。

たとえどんなことがあると、私はすべてを受け入れようと。今となつては、私にとって清彰さんがこの世のすべてでした。もしも罰を受けて滅び去っていく運命なら、私は手を携えて、彼について行こうと。

地獄に落ち、無限の苦しみを味わうことになっても。

一週間後、私は松方家に戻りました。その翌日に清彰さんは帰宅する予定でした。

清彰さんにお会いしたい、ゆつくりお話したい……と待ち焦がれておりましたが、早乙女家への海外からのお客様をお迎えするため、私は実家にもう一度戻ることになりました。

私は、清彰さん宛の長い長いお手紙を書きました。

有島千秋さんから水野先生のことをお伺いしてからの数日、苦悶の末にたどり着いた想い……そのすべてを書き綴りました。

そのお手紙を、清彰さんの机の上に置いてお部屋を出たところで、私は意識を失い、倒れてしまいました。

「奥様?!」と叫びながら廊下を走って来る、桂木が遠くに見えましました。

目が覚めたとき、自分のベッドの上に横たわっておりました。

ふと横を見ると、清彰さんが座っておられました。

慌てて身を起こそうとすると、

「どうか、そのまま。無理をなさないで」

と、私の肩にそっと手をかけ、もう一度横たえてくださいました。

「先ほど、主治医の佐久間先生がお帰りになりました。ひどい貧血だそうです。しばらく、ゆつくりご静養されてくださいとのことですよ」

「そう……ですか……」

窓の外からは、激しい雨音が聞こえていました。

私はあらためて清彰さんを見つめ、「おかえりなさい」と小さく言いました。

彼はじつと私の瞳を見、手を握ってこられました。そして、

「あなたからのお手紙、読みました」

遠くで、雷光が瞬きました。

「僕も同じ想いです。でも、」

清彰さんのお顔は悲壮感に満ちています。

「これから僕が言うことを、どうか心を鎮めて受け止めてください」
まさに今耳に響いてくる遠雷のような、激しい胸騒ぎを覚えま
した。

けれども、覚悟したのですから。私は、何があっても清彰さんか
ら逃げないと……

彼の手を強く握り返しました。

そして、次の清彰さんの言葉……

空にも、私の心にも、切り裂くような雷鳴が響き渡ったのでした。

「雪子さん、御懷妊されているようです」

蒼き炎 5 【雪子】

「雪子さん、御懷妊されているようです」

絶句しました。

思いもよらない宣告でした。

全身の血が逆流するような衝撃に見舞われ、呼吸が荒くなるのを自分でも感じました。

「佐久間先生のご診断です。貧血の原因をお調べになっていて、わかったらしいのです。少し流産の兆候がおりになったと」

そんなはずはない！ そんなことがあるはずがない！

「その子は……」

清彰さんは、目を閉じてつぶやきました。

私も、その瞬間、きっと同じことを考えていました。

その子は……

孝彰さんの御子か？ それとも、清彰さんの？

必死で記憶をひもときます。結論は、すぐに出ました。

孝彰さんが欧州に行かれて、約2ヶ月。その間、私は月のしるしを見えています。

……それならば、間違いなく

「あなたの子です」

私は身を起こし、そうつぶやきました。

清彰さんは、半身の私を抱きすくめました。

何年も何年も、叶わなかった願い。届かなかった祈り。
妊娠は、もうとうにあきらめていました。

この侯爵家で肩身の狭い想いをしながら生きていかなばならないのも、夫が別の女性に心をうつしたのも、すべてこの身体のせいだと自分を責め、呪ってきたのです。

そのような悲しい鎖を断ち切り、一身に祝福を受けるはずの朗報。愛する人の御子を産むという、女として最高の喜び。

……けれども、この頬を伝うのは血涙でした。

外は嵐。

これこそが、私たちにくだされた罰なのでしょうか。

蒼き炎 6 【月子】

雪子お姉様の身にそのようなことが起こっているなんて、夢にも思わなかった。

その夜私と華子は、急病のために戻れなくなった雪子お姉様の分まで、海外からの来客の接待に追われた。

その数日前、私は勇作が入院している病院を訪ね、治療に当たった医師から詳しい病状を聞いていた。

右目は傷が奥に達していて、全く手の施しようがなかったが、左目の傷は浅く、視力が戻る可能性もわずかだがある……ということだった。

「しかし、このような町医者では限界があります。正直諦めていたきたいと、彼のお父さんにはお話しました」

「では、もしも転院して高度な治療を受けられるなら？」

「そうですね、それができるなら話は別ですが……おそらく、莫大な費用が……」

それでも、私は医師の言葉に望みをつなぎ、お父様に頼んで眼科の名医を探してもらおうと試みた。

私を助けてくれた恩人であり、源太の息子である勇作のことなら……と、父も引き受けてくれた。

けれども、私ほどの真剣さを持ち合わせていないお父様は、仕事に追われ、なかなか本腰を入れて動こうとはなさらなかった。

焦りが募っていた。

私にはこやかにお客様のお相手をしながらも、心は晴れず、勇作のことばかり考えていた。

担当医にお話を聞いた日、病室の勇作の様子をそつと見に行った。今はまだ、直接声をかけ、話することなどできない……廊下か

から見守った。

勇作はベッドの上に起き上がり、背筋を伸ばして静かに座っていた。目には痛々しく包帯が巻かれていた。

私は駆け寄って抱きつきたい衝動を必死でこらえ、「あなたの目を、必ずとりもどしてみせるから」と、何度も心で念じて忍び泣いた。

ふと、勇作は私が立っている方へ顔を向けた。

そして、真っ直ぐこちらを見据えたように、しばらく動かなかった。

私は足音を立てないようにそっと身を翻し、後ろ髪ひかれる想いで病院を後にした。

「お嬢様」

と、声をかけられて我に返った。

振り向くと、お客様のお一人がにっこり笑って佇んでいらった。

ドイツから来られている医師・ハインツだった。

蒼き炎 7 【月子】

ハインツ・コールマン先生は流暢な日本語で訊ねられた。

「ご気分でも悪いのですか？」

「いいえ、大丈夫です。申し訳ございません。お客様にご心配をおかけしてしまつて」

そう微笑み返した。

いくつか他愛ない言葉を交わした後、私はひらめた。

「コールマン先生にお尋ねしたいことがあります」

先生は若くして医学博士となつた優秀な方で、一昨年25歳で来日し、現在は日本赤十字病院で若い医師たちの育成に携わつておられるという。

この方なら、勇作の目について何かご意見を賜れるのではないかと。

「お嬢様、どうぞハインツとお呼びください」

ハインツはそう言つて私の手を取り、甲にキスをした。

そのようなとき多くの女性なら……いやもしも、数ヶ月前までの私でも、金髪に緑の瞳をたたえたこの若き外国人医師に、胸をときめかせ、頬を紅くしただろう。

「ではハインツ、私のことも月子とお呼びください」

「わかりました、月子。それで、どのようなことですか？ 私にお役に立てるのであれば、なんなりと……」

「ありがとうございます。実は、私の親しい友人のことなのですが……」

勇作の話を一通りきいたハインツは、しばらく宙を見つめて考えた後、

「一度診察してみないことにはなんとも言えません。もしよろしければ、私のところに連れてこられませんか？」

ありがたいお話だと思ったが、私はできることなら眼科の名医を紹介していただく窓口になっていただけたら……と、話をしたのだ。彼自身に診察を頼むのが本意というわけではなかった。

私の不安を察知したのか、ハインツは「OH」と小さく声をあげて、言葉を続けた。

「ご心配なさないで…あなたもそのお友達も、幸運です。こうしてあなたのお話を聞いたのも意味があることなのでしょう。なぜなら私は……」

彼は再び、私の手をとった。そして、今度は強く握りながら言った。

「眼科医なのです」

ああ、やっと動き始めた。

私は手を合わせるような想いで、ハインツを見た。

蒼き炎 8 【月子】

ハインツがいる日赤病院を訪ねたのは、その翌週だった。

最初は固く拒んでいた源太も、やがて私の説得に心を動かし、勇作の転院手続きを守備よく運んだ。

ただ、私の存在はいっさい勇作本人には知らせずに事を進めるところにした。

これだけは源太も「そういうわけには参りません」と最後まで譲らなかったが、私が関係していることがわかれば、勇作は転院を拒むかもしれない、そうなつてはすべてが水泡に帰してしまうからと、必死で訴えた。

紹介者は私ではなく、源太の主人である早乙女侯爵ということにし、ハインツにも私の名前を伏せることを了承していただいた。

勇作が転院し、初めてハインツの診察を受ける日。

勇作が付き添いの源太に連れられて診察室に入ったとき、私はその部屋の隅に立ってすべてを見ていた。

ハインツは、

「どうしてご自分の存在を隠すのですか？」

と言ったが、多くを語らない私の哀願するような瞳をじっと見つめ、ふつと苦笑した。

そして、結局は何も聞かないで、立会いを認めてくれた。

勇作はやせ細っていた。

けれども、以前とは別人のように小さく見えるのは、筋肉のそげ落ちてしまった身体や目に巻いた包帯のせいだけではないと感じた。すべてに絶望し、放棄してしまったかのように、覇気がなかったのだ。

ハインツが包帯をとると、痛々しい傷があらわになった。その瞬間「ああ」と声が漏れそうになるのを、私は必死でこらえた。

まだ縫い目も生々しい赤い傷が二つ。一つは、右目を縦断し、完全につぶしてしまっていた。もう一つの傷はより大きく、左目の外側部分を通過し、鼻の辺りまで斜めに走っていた。

視力回復が可能だと言われたのは、この左目の方だ。

ハインツはしばらく診た後、いくつか検査を受けさせるよう助手や看護婦たちに指示を出した。

勇作が検査のために診察室から消えると、私は緊張から開放され、がつくりとその場に座り込んだ。

駆け寄ろうとした源太より先に、ハインツがすばやく私の腕を持って抱きかかえ、診察ベッドに座らせた。

「どうして、そこまでして？」

と、緑色の瞳が私を見据えて聞いた。

「あの人のことが好きなのですか？ それならばなぜ、ここにいてことを知らさないのですか？」

ハインツの問いに、私は首を横に振るだけだった。

源太も黙ってそこに佇んでいた

勇作本人と、検査書類が診察室に戻ってきた。

黙って書類に目を通すハインツ。

私と源太は固唾を吞んで、その結果を待った。

蒼き炎 9 【月子】

やがて、ハインツは静かに言った。

「なんとかなるでしょう。私が手術すれば、左目だけでも見えるようになるでしょう」

源太は何度も「本当ですか？」と訊ね、笑顔でうなずくハインツに土下座して感謝の意をあらわした。

私も涙があふれた。源太は私を見て、手を合わせた。

けれども、勇作は、まるで他人事のようにみじろぎもせずそこにいた。

やかで、ぼそつと何かをつぶやいた。

「え？」

あまりに小さな声だったので、一瞬私たちは聞き取ることができなかった。

もう一度彼が発した言葉を知ったとき、診察室は凍りついた。

「手術は必要ありません。僕は見えないうままでいいんです」

源太は「何を言ってるんだ!？」と狼狽し、ハインツの顔色もみるみるうちに変わった。

どうして？

私も声を出して叫びたい衝動にかられた。

源太は息子の身体を揺すり、「どうしてなんだ？」と、問い詰めた。

「何も変わらない。見えるようになったからといって、苦しみは終わらない。それならばいつそ、このまま闇の中を漂っていたい。その方が楽だ」

「何も変わらない」

見えても見えなくとも、もつと言うなら、ケガをする前も後も、「変えがたい現実」がそこにある。もう、自分は二度とその現実を直視したくない。その苦しみに戻りたくないのだ……

それが私のことだと思い込むのは、愚かなうぬぼれだろうか。

そう思ったとき、源太が顔をクシャクシャに歪めて、私を見た。

勇作の言葉が何を意味していたのか、父親である彼には、わかっていたのだと思う。

私はゆっくりうなずいた。

慟哭の中にありながら、こんなにも自分が愛されていたことを知り、私は身震いした。

それでも、ハインツは、勇作のつばやきを無視するように入院させた。

だが、私と二人きりになったとき、ハインツは厳しい口調で言った。

「あなたの紹介でなければ、すぐに帰っていただくところでした」
そして、

「ちゃんと話していただけませんか、月子。彼に何があつたのか」
もう隠しておくわけにはいかないと思った。

私たちのことを話せば、彼は勇作の治療を拒否するかもしれない……このことをお父様に話してしまうかもしれない……と不安もあったが、このままでは先に進めない。

「それで、あなたはどうするのです？」

すべてを聞いたハインツは、言った。

「確かに、傷は治つても、あなたたちの恋が成就するわけではない。まして彼は、あなたが今近くにいることを知らない。絶望の淵にあります」

ハインツは私の手を取り、

「月子、彼を励ましてあげなさい。自分の想いを素直に話し、傷が癒えたら二人で一緒に生きていこうと、希望を与えてあげればいい。そうすればきっと、彼はもう一度光に向かうはず」

「でも……」

それと引き換えに、どんなに大きな犠牲をだすことになるだろう。お父様が私たちを許すはずない。

森倉和成さんのお話が破談になって以来、躍起になって私の結婚相手を探しはじめていた。

いくら源太のことを買っていると言っても、勇作に助けてもらっ

たことがあったとしても、それとこれは話が違つと、一蹴されるのは目に見えていた。

しかも犠牲になるのは、私たちだけではない。源太はどうなるだろう。

これまででさえ、彼をどんなに苦しめてしまったか……それを考えるだけで、胸がしめつけられる。

そのようなことを勇作が、受け入れるとは思わない。

ハインツは私の肩を抱き、

「彼は今、あなたがここにいることを知らない。真実を話し、互いの想いを確かめあうべきです。勇気がいるでしょう。けれども、このままではそれこそ彼の言うように何も変わらない」

「ハインツ……でも、どうしてそこまで言ってくださるの？ 勇作だけじゃなく、本当は私だって追い返されてもいいくらいなのに」

「さあ……どうしてでしょうね」

そして、おどけたような明るい表情で、

「美しい女性が泣いているのを見るのは、嫌なんですよ」と、微笑んだ。

こうしてハインツに背中を押され、私は勇作の病室の前にやってきた。

今、暗闇の中にいる彼。

同じように私たちの未来も、まだ何も見えていない。

そう、確かなことなど、何一つなかった。

蒼き炎 11 【月子】

扉をノックする。

「はい」と、勇作の声。

ゆつくりと開けて、入っていく。

勇作はこちらに顔を向けた。

「勇作、私です。月子です」

彼は微動だにせず、じっとしている。

戸惑いながら、ベッドの方へ数歩足を踏み出すと、

「あなたがどうしてここへ？」

素っ気無かった。

まるで、最初にあつた頃の、ぶっきらぼうでつれない彼に戻つたようだった。

駆け寄りたい衝動を抑え、私は今の想いをあますことなく伝えきろつと、話を始めた。

あの花屋の前で勇作と別れてから今日までのことを。

道場に通っていた頃の気持ち。許婚がいると言われたときの悲しみ。すべてを源太から聞いたことも、ハインツのところへ導いたことも、そして、先ほどの診察室にいたことも。

すべてを聞いたあとも、勇作は何も言わずにうつむいて黙つていた。

長い沈黙が続いた。やがて、

「あなたの気持ちは嬉しい。このまま、ここで死んでもいいとさえ思います」

その言葉に、涙があふれた。

しかし、勇作はすぐに「……でも」と、続けた。

「僕の気持ちは……さっき診察室で言つたとおりです。自分の想い

を通したところで、周りの人を苦しめるだけだ。結局、誰も幸せになれない。だから、このままにいるのが一番いいんだ」

私はかぶりを振った。

「いいえ、たとえこのままでも、誰も幸せでは……」

「駄目です！」

勇作は突然大声を上げて、さえぎった。

「そんなことができるくらいなら、最初からそうしていた。花屋の前で言ったのは、半分は本当です。あなたは、あなたにふさわしい人と……」

今度は私が叫んだ。

「私は、あなたが好きです。もしも、受け止めてもらえないと言うなら、何も変わらないからと手術を受けないなら……」

私は、ベッド脇の台に置いてあった湯飲みに目をやった。

それをすばやく手に取り、床に叩きつけた。

病室にガシャーンというけたたましい音が響き渡った。

「何をしているんだ？」

飛び散った破片をゆっくり手に取り、両手で握り締めて言った。

「私もあなたと同じように……」

蒼き炎 12 【月子】

「この欠片で、目を突きます」

「馬鹿な！」

「こうすれば、早乙女家からは勘当されるわ。もう恋愛もできないわ。そうなったら、私は受け入れてくださる？」

両手を目の高さに掲げ、その切っ先を見つめた。

自らの手でこの目を傷つける……手が震えた。

けれども、勇作が味わった痛みを、私も。

そして、これまでの人生に告別を……

「私はすべてを捨てる覚悟で、ここに来たのです」

華やかで甘い日々が脳裏を駆け巡った。

優しい両親。姉妹たち。美しいドレス、宝石、香水。贅沢な晩餐。

恋のかけひき。

艶やかに微笑む私。それを羨望の目で見つめるたくさんの紳士淑女たち。

……ああ、それでも私には、もっと大切なものができてしまった。あの竜心館で真っ赤に焼き付けられた、命のきらめきを、魂の輝きを、そして、この純愛を、この胸から永遠に消し去ることなどできない。

だから、さようなら。

力を込めた瞬間、勇作がベッドから飛び出し、体当たりするようにして覆いかぶさった。

ぐらりと傾いた私の身体を倒れないようにぐっと支えながら、身動きできないように強く抱きしめた。

手から破片が滑り落ちた。勇作は手を緩め、静かに言った。

「あなたは……本当に馬鹿な人だ」

そして、

「本当に俺でいいんですか？ きっと苦労しますよ」

私は、勇作を強く抱きしめて言った。

「平気です、どんなことがあっても。もう心に決めました」

勇作は、手術を受ける決意をした。

「俺も覚悟を決めました。左目が見えるようになったら、二人の将来について真剣に考えます」

この先、二人が本当に結ばれるときまで、どんなに多くの障害が立ちふさがらう。

けれども、激しい吹雪も波濤も、乗り越えてみせる。

私はそう強く信じ、勇作との愛にすべてを賭けようと心に誓った。

遠き虹 1 【正臣】

僕が早乙女家に来て、4ヶ月。
季節は夏を迎えていた。

雪子さんの御懐妊は、早乙女家にも大きな喜びをもたらした。
早乙女伯爵も奥様も、これでやっと侯爵家の嫁としての勤めが果たせると安堵されていた。

ただ、渡欧中の松方侯爵は、当初3ヶ月の滞在日程が延長になり、加えて、同行されていたお父上様が向こうで流行り病を患ってしまったことから、帰国は秋口になりそうだとお聞きした。

本来なら飛んで帰って来られて、雪子さんと喜びを分かち合いたいはずなのに。

雪子さんは貧血と重いつわりで御容態が芳しくなく、早乙女家にもあまりお顔をみせられなかった。

一度、月子さん・華子さんと松方邸にお伺いしたが、いくらお加減が悪いとは言っても、あまりにつらそうで精彩を欠いた雪子さんの面持ちがとても気になった。

月子さんは、小島勇作さんの看病のため甲斐甲斐しく病院通いをされていた。

ご両親には別のところに行くのと偽ってお出かけになることも多く、僕もときに口裏合わせをしてさしあげた。

ハインツ・コールマン先生のおかげで、勇作さんは左目の視力を回復しつつあった。

月子さんは勇作さんを心から愛し、ともに生きていくと強く決心されていた。

僕はそれを祝福し応援したいと思ったが、一方で、いざ事が本当に動き出してしまったら、この伯爵家はどうなるのだろうかという不

安もあつた。

僕がそんなふうに感じるくらいだから、華子さんの動揺はいかばかりだったろう。

最初は真つ向から反対し、「一時の熱病のようなもの」と、月子さんを厳しい口調で責め立てた。

本来のご気性を考えれば強い調子で反論されると思われた月子さんは、妹君の涙の抗議にも一切動じず、胸のうちを悠然とお話になった。

そのお姿、そのお言葉からみなぎる確たるご決意に、僕も華子さんも胸をうたれ、今では心の底から月子さんには幸せになつてほしいと思えるようになった。

そのようにご両親様にもお伝えでき、お許しをいただければいいのに……と祈るばかりである。

華子さんは……

親友の有島千秋が東京に戻ってから、華子さんと僕の関係も少し変わった。

二人でいて大学生活などに話が及べば、いやでも千秋のことを思い出してしまう。

そんなときの華子さんは、明るさを装っておられてもどこかつらそうだった。持ち前の、屈託のない澀刺とした少女の面影は、すっかり影をひそめていた。

そのため、僕は帰宅すると自分の部屋で本を読んだり、一人で出かけたりという時間が増えた。

千秋からは、僕宛に「元気にしている」という旨の短い手紙が一度きたきりだった。

僕の父（内藤伯爵）よりお聞きしたところ、お父上の有島男爵のご病気は小康状態を保っておられるようだったが、有島家の苦境はあいかわらずのようである。

遠き虹 2 【正臣】

そんなある日、華子さんに新しい縁談が舞い込んだ。

あのハイツ先生もご出席されていた早乙女邸での晩餐会で、華子さんを見初めたという紳士からのお申し込みだった。

若田男爵のご子息・圭介氏。

あの夜、華子さんにダンスのお相手を申し込まれ、しばらく一緒に過ごされていた方がいらっしゃったが、それが若田圭介氏だったのだ……と後に華子さんからお聞きした。

若田男爵は一代で貿易会社「若田商会」を築かれた方で、先の日露戦争での武器搬送でご活躍され、財界に名を馳せた豪商。圭介氏は四男にあたられる。現在25歳。

「雪子の懐妊と言い、早乙女家には一度に春が来たようだ」と、早乙女侯爵はたいそうお喜びになられた。

そう……この御話は、ご両親にとって、否、早乙女家にとってこれまでのご縁談とは比べものにならない大きな価値があった。

なぜなら、男爵家は、

「圭介は早乙女侯爵家の婿養子に入るのもいとわない」という心積もりを示されたからである。

それは同時に、華子さんが「早乙女侯爵家存続」という大きな重圧を一身に受けることを意味していた。

華子さんの心の中には、まだ有島千秋の存在が色濃く影を落としているに違いない。

まだ傷も癒えていないこの時期に、あまりにもおかawaiiそうだと、僕は胸が痛んだ。

思えば、若田圭介氏はすべてが有島千秋とは正反対の人物だった。

丸眼鏡がお似合いで知的な方に映ったが、物静かで目立たない方だった。

その分、とても温厚でお優しい方だろうと拝察できるが、遠目から見ていても会話は常に華子さん先導だったし、ダンスの足取りもぎこちなかった。

一方で、若田商会は飛ぶ鳥を落とす勢いの大企業であられたので、その財力は揺ぎ無いものがあつたろう。

若田男爵から御会食のお申し込みがあつたとお聞きした日、僕は久しぶりに華子さんを午後のお茶にお誘いした。

きつと、誰にもお話できないであろう今のお気持ちを、せめて僕ぐらいは受け止めてさしあげようと思ったからだった。

遠き虹 3 【正臣】

高波の運んで来たレモネードに口をつける華子さん。

これまで見たことのない白い麻の洋服や朱色の口紅に、僕は、彼女が僕より年上の大人の女性であることを思い知らされた気がした。やがて、彼女から発せられた言葉……

「私はこのお話をお受けするつもりよ」

「え？」

蝉時雨がうるさかったので、聞き違いをしたのかと思った。

華子さんは小首をかしげ、眉を上げてにっこり微笑んだ。

「圭介さんのような方が早乙女を継いでくださる……願ってもないことですよ」

「でも……」

戸惑う僕に、畳み掛けるように、

「何をおっしゃりたいか、わかりますわ。千秋さんのこと、気にしていらつしやるのでしょうか？ だから、今日は私を呼び出された」

「ええ。僕は、あなたがまだ彼のことを忘れられないのでは……」

華子さんは答えなかった。

テラスの窓から見える空は、目が痛いほど青く澄んでいた。

やがて、

「千秋さんの、お家を想うお気持ちや強い生き方を、私も見習わなくてはと思ったのです」

華子さんは静かにそう言った。

「私もそのくらいしっかりと生きた生き方をしなければ、あの人に恥ずかしい。それに……」

ずっと立ち上がって、僕に背を向け

「そうでもしなければ、あの人と出会って心を通わせたことに、なんの意味もなくなってしまふ」

こちらに顔をむけてはくださらなかったが、泣いているのがわ

かった。

「忘れることなんてできません。あの人のお姿もお考えも、そう、あの生き方すべてが、私にとっては衝撃でした。私は、自分がこれまでどんなに浅はかで、地に足がついていない子供だったのか、思い知らされました。だからこそ、あの人を男性としてだけでなく、大きな指針を示してくれたかけがえのない人として、決して忘れないのです」

淡く切ない初恋を、このように昇華できる華子さんの強さに、僕は震えた。

結ばれることのない人。もしかすると、二度と会うこともない遠い人。

けれども、その人が駆け抜け、残していったものを、自分の人生の糧にする……

僕が華子さんだったら、そのような考えに及ぶだろうか。

そこにはもう、少女の面影は微塵もなかった。

けれども、華子さんは、好きな人に去られた悲しみや苦しみによって、大人びた悲壮感を漂わせていたわけではなかったのだ。

この家を背負って立つのだというご決意と伯爵家令嬢の誇りが、彼女を根底から変えていたのだ。

遠き虹 4 【正臣】

こうして、華子さんの縁談はとんとん拍子に進み、秋には結納の儀が執り行われることになった。

圭介さんが婿養子になることも正式に決定された。

月子さんは、退院して自宅療養中の勇作さんのもとへ通っていた。手術の日、月子さんは勇作さんの手を取り、

「もし見えないままでも、私の気持ちは変わりません。一生、あなたの杖となつて生きます」

と、励まされたと言う。

その想いが、二人の絆が、天に届いたのか、手術は大成功。

勇作さんは光を取り戻した。

僕も華子さんも、胸を撫で下ろした。

だが、難題は山積だった。雪子さんや華子さんのことで、早乙女伯爵夫妻の月子さんへの監視は和らいでいたし、当然、月子さんへの新たな縁談が持ち込まれることもなくなっていた。

華子さんのことで、月子さんの結婚についての制約やご両親の期待も弱まることは考えられたが、かといって、庭師をしている男の息子との結婚が、すんなり許されると思えなかった。

しかも、完全な失明には至らなかったとはいえ、右目はつぶれたまま。

顔には醜い傷跡が残っている。

艶やかな姫君として社交界でも名を馳せていた月子さんが、そのような人と添いたいと申し出れば、伯爵夫人などは驚きのあまり卒倒されるに違いない。

それでも、二人はすべての人に受け入れてもらう道を模索し続けていた。

勇作さんは、二人の交際にずっと反対し続けていた父の源太をも、

説得した。

自分の強固な反対が勇作さんを追い詰めたことを後悔していた源太は、もう何も言わなかった。

また、息子が再び希望を持って生きる決心をした裏に、月子さんの無償の愛があったことに感動し、感謝し、今ではそんな月子さんの想いをなんとか成就して差し上げたいと思っているようだった。

源太は、あとはもう運を天にまかせるしかない……と覚悟したと言う。

ある日、帰宅された月子さんが興奮さめやらぬ様子で、僕と華子さんにお話になった。

「勇作が、もう一度剣術を始めると言い出したの。そして、剣術大会で必ず優勝すると」

そういえば、勇作さんは怪我をされる前に、宮内省の剣術大会に参加することが決まっていた。

もしそこで優勝するようなことになれば、しかるべき人たちの剣術の指南役として、確固たる地位を与えられることになる。

「勇作はその結果を持って、お父様に私たちのことを許していただくようお願いに来るんだ……って」

遠き虹 5 【正臣】

勇作さんの決心は相当なものだろうと、まだ青二才で学生である僕にも男として胸に迫るものがあつた。

いくら剣に自信があつたとしても、隻眼で高みを目指そうというのは無謀すぎる。

これまでその道で戦ってきた勇作さん自身が、充分にわかっているはずだつた。

それでもあえて決意し言葉にした姿に、男としての並々ならぬ覚悟と、月子さんへの深い愛を感じた。

退院して10日もすると、勇作さんはまた道場に通い始めた。

かつて教えた弟子たちや剣術の仲間たちは、大きな戸惑いで彼を迎えたという。

「お遊び程度なら相手もするが、もう一度試合出場を目指そうなんて、馬鹿げている」

面と向かつて、そんな心無い言葉をぶつけるものもいたらしい。

片目だけで人や物と向き合うのは、距離感がつかめずに苦労すると言つが、まして剣を交えようと試みれば決定的に不利……話にならなかつた。

さらに、かつての同僚たちは勇作さんの覚悟を理解できず、むしろ軽蔑や嘲笑を与え、手合わせを申し出る彼を相手にしなかつた。

それならばと、勇作さんは道場の片隅で黙々と素振りを行い、入院生活で落ちていた体力・筋力の回復から始めた。

「月子お姉様は本当に幸せな方ね」

華子さんはため息をついた。

もうすぐ花嫁になろうという女性には相応しくない、かすかな陰

りがその瞳をかすめた。

千秋のことを想っているのだろうか。

「それはそうと……ちよつと気になることがあるの」
華子さんはさつと話題を変えられた。

そして、思いがけず、雪子さんのことを口にした。

遠き虹 6 【正臣】

「明日、圭介さんと一緒に、松方侯爵家にご挨拶に行く予定なの」
「ああ、そうですね。雪子さん、悪阻は落ち着かれたのですか？」
「ええ、もう安定する頃だからずいぶん動けるようになったらしいのだけど、なかなかこちらにはお顔を出されないし」

「ご挨拶と言っても、松方侯爵はまだ帰国なされていないのですよね？」

「ええ。滞在が長くなつたので、次の渡欧団と合流して新しいお仕事に携わるようになったとかで。でも……」

「え？」

「圭介さんからよくないお噂をお聞きしたの。実は、松方侯爵にはずいぶん親しくされている女性がいらつしやると」

華子さんは少しこわばった表情で、言葉を続けられた。

「その女性を……あちらにお呼びになつたと」

僕は愕然とした。

松方侯爵が、そんなことを？！

「侯爵が滞在を延ばし延ばしにされているのは、その女性とのむこうでの時間を少しでも長くとお考えではなのでは……そんなお話が公然と……」

もしそれが事実だとすると、雪子さんがときおり見せられるあの暗い瞳は……

「そんなことが事実だったら……放つてはおけませんよ。あまりにも雪子さんがお可哀想だ」

僕は憤怒のあまり、つい声を荒げてしまった。

「ええ、もちろん、私も同じ気持ち。かといって、お父様たちにお聞かせすることはできないわ。幸い、まだ何もお耳にしていない様子だし……それならば、ご挨拶と言う名目でまずは圭介さんと様子を伺いに行ってみようと。いずれにしても、あちらには弟君の清

彰さまもいらっしやることだし」

雪子さんへの強い同情の想いがこみ上げた。

と同時に、華子さんが圭介さんとそのようなことまで話し、「一緒に姉上様のもとへ……」と心合わせられるご関係にまで発展されていたことに、驚いた。

千秋のことをずっと忘れてほしくないと感じるのは、あまりにも独りよがりで勝手なことだとわかっていながら、華子さんがどんどん遠くなるようで寂しかった。

遠き虹 7 【正臣】

華子さんは、松方邸から衝撃的な情報を持ち帰った。

僕と月子さんは、驚きのあまり言葉を失った。

圭介さんが松方侯爵の弟・清彰氏さんと懇談しているとき、華子さんは雪子さんを別のお部屋にお呼びし、二人きりの時間を作られた。

そして、例の噂について、華子さんはおそろおそろ口を開いた。

「もしそれが真実ならば、いくら松方家の爵位が上と言っても、娘を嫁がせた早乙女としては黙ってはいられない」

慎重にお言葉を選びながらも、姉君を守ろうとする強い想いで、勇気を振り絞って。

ところが、雪子さんは、夫の松方侯爵に女性がいることをすでにご存知だったと言う。

「最初は私も驚き、悲しみに打ちひしがれたわ。誰にも言えず、ずっと苦しんでいたの」

雪子さんはそうおっしゃった。

もしその女性が妊娠するようになれば、ご自分は離縁されるだろうという覚悟までされていたと言う。

「でも今は……もう落ち着いているわ」

「それでは、侯爵の御子を身ごもられたことが、活路になられたの？ そのことで、松方侯爵は女性とお別れして、お姉様のところに戻られるの？」

華子さんは身を乗り出すように、率直に雪子さんに詰め寄ったらしい。

すると……

「それはわからないわ。孝彰さんとその女性のことは、もうどうでもいいことになったの」

「どうでもいいって……お姉様、どういうこと？」

「……華子ちゃん、今から話すことを驚かずに聞いてくださいね。そして、決して他言しないと約束してちょうだい」

華子さんは両手で頭を抱えるようにうつむかれ、小さく、それでいてはつきりと言葉を吐かれた。

「お姉様はおっしゃったの。？このお腹の御子は、夫の子ではないの？……って」

言いようのない緊張が僕の全身を駆け抜けた。生唾をごくりと飲んだ。

月子さんは絶句したまま、側の椅子にガクンと腰を落とされた。

華子さんは続けた。

「思わず、雪子お姉様にすがりついて何度も叫んだわ。？お姉様、嘘でしょう？！嘘よね？！？って。でも、お姉様は涙ぐんで？驚かせてごめんなさい。でも、本当なの？と……」

月子さんが、厳しいまなざしで宙を見据え、つぶやかれた。

「あの雪子お姉様が侯爵のお留守に不義を？ 信じられないわ。相手は誰なの？」

遠き虹 8 【正臣】

「相手がどなたなのか、雪子お姉様は最後まで教えてくださらなかったの。でも、ひとしきりお話した後……」

扉をノックする音。清彰さんが、「食事のご用意ができたそうですよ」と、お二人を呼びに来られたのだ。

そして……お部屋を出るとき、また、食事の最中、華子さんは確信されたと言う。

「清彰さんが雪子お姉様をそつと介助されるご様子。雪子お姉様が清彰さんを見つめるまなざし……御二人は、思い合っているって」

「では、御子は清彰さんの?！」

「ええ、間違いないと思う」

雪子さんは、その御子の父親を心から愛しているとおっしゃった。夫の裏切りを知って最もつらかったときに、その人の存在が支えとなり、生きてくることができたのだ、と。

一方で、侯爵の嫡子をもうけることができず周囲の無言の責め苦にあえいでいた自分に、やっと授かったのが不義の子であるという事実は、逃れようのない宿命であり、罰である……とも。

「雪子お姉様、おっしゃったわ。進むことも退くこともできない今ただ一つ導き出した結論は、?どんなことがあってもその御子の母となること?だって」

華子さんは泣き出した。

「私、何も言えなかった。だって、お姉様、そうおっしゃりながら、微笑まれたの。まるで、菩薩様みたいに美しく……」

月子さんは唇を噛みしめ、天を仰いだ。

僕は、胸がはりさけそうだった。

これまで雪子さんの苦悩は、どんなにか重く深かっただろう。そ

んな地獄の日々を、どんな想いで乗り越えてこられたのだろう。想いはりめぐらせても、僕などにわかるはずもなかった。

そんな雪子さんを、そして、清彰さんを、責める気にはなれなかった。

ただ、悔しかった。

僕でさえそんな複雑な、言いようのない想いになるのだから、月子さんも華子さんも、今どんなに苦しいお気持ちでいらっしやるだろう。

晩夏。大正12年9月1日。

大きな事件が、日本を揺るがした。

関東大震災が起つたのである。

被災者は約340万人。

死者・行方不明者は10万人以上にのぼり、70万戸以上の住宅・建物が倒壊・焼失するという大きな被害となった。

翌日には戒厳令が敷かれ、政府は救援活動にとりかかったが、日本の中枢である東京への壊滅的打撃は政治・経済・社会など様々な方面で甚大な影響を及ぼし、暴動や虐殺事件等の二次的な事件を次々に引き起こすこととなった。

僕は東京の家族の安否がわからず不安な日々を過ごしていたが、数日後、父から電報があり、無事だったことを知って胸を撫で下ろした。

内藤家は屋敷の一部が倒壊するだけの比較的小さな被害に留まり、幸い、負傷者等もでなかった。

ただ、同じ華族の中には、被災して亡くなった方や邸宅が全壊してしまったという方も少なくなかった。

そしてこの天災は、遠く離れたこの早乙女家の三姉妹にも大きな嵐を運んでくることとなった。

次章「秋の嵐」へ

秋の嵐 1 【華子】

震災の報を耳にしたとき、私の脳裏を真つ先にかすめたのは、千秋さんのことだった。

千秋さんはご無事だろうか？ 有島邸は大丈夫だったろうか？ 居ても立ってもいられず、新聞に隅々目を通し、また、帰宅されたお父様が話される現在の東京の状況などに必死に耳を傾けた。

正臣さんは、当然のことだが大変狼狽なされ、ご実家の安否を知られるまではお話ができる状態ではなかった。

有島男爵邸は、確か神田におありだと記憶していたのだが、このあたりもたくさんさんの住宅が焼失し、亡くなった方も多いということだった。

千秋さんが東京に戻られる際、もう二度とお会いすることはないかも……と覚悟を決めていたが、このような形で永遠にお別れすることが決まってしまうのは、耐えられなかった。

どうかご無事でいてほしい。

二度とお顔を見ることができなくても、同じ空の下で強く生き抜いていてほしいと祈り続けた。

だが、ある日。

正臣さんが沈痛な面持ちで私の御部屋に來られた。

そして……

「有島男爵が、倒壊した邸宅の下敷きになり、お亡くなりになられたそうです」

「あの人は？ 千秋さんは？！」

私は正臣さんの腕をつかみ、叫んだ。

「有島千秋は……行方不明のことです。10日経った今でも、安否がわかりません」

正臣さんの腕をつかんだまま、がつくりと膝を落とした。
深い絶望と哀しみが胸にこみ上げ、「ううつ」と声が出た。

「本当に僕を好きになっちゃだめですよ。あなたが傷ついてしまうから」

そうおっしゃって桔梗を差し出した、あの木漏れ日の下の笑顔が鮮明に蘇った。

秋の嵐 2 【華子】

震災で亡くなられた皇族の方もいらつしたため、秋以降に予定されていた種々の式典や祝賀の催しは延期となった。

私と圭介さんの結納も、両家の相談の結果、年明けに執り行うことになった。

千秋さんが行方不明であるとお聞きして以来、私は消沈し、自分の結婚のことなどまったく考える余裕を失くしていた。

圭介さんの若田男爵家は、ほとんど被害がなく、また会社の方も今後復興事業などに携わることでむしろ売上げが伸びるかもしれないと目されていた。

私の心の中は不安や悲哀が渦巻き混沌としていたが、結婚相手の圭介さんが震災の悪影響を受けず、表面的なことに打撃がなかったのはせめてもの救いだっただ。

若田家も圭介さんも、本当に強運の持ち主でいらつしやる。

この出来事は、私にとってどんな意味があるのだらうと、繰り返して自分に問うた。

私が圭介さんを婿養子にお迎えし、早乙女の家督を継いでいただくという決心は、千秋さんとの出会いがなければ生まれなかった想いだっただ。

千秋さんがご実家の男爵家を守り、父上や兄上を助けることが自らの使命と考えて京都に來られたことは、ふわふわと夢心地で生きていた世間知らずの私にとって、目が覚めるような衝撃だった。

一方で、二人のお姉様の、ご自分の心に正直に生きていらつしやるお姿も、胸に迫った。

たとえ何もかも失うようなことになっても、愛する人への想いを

貫きたい……それは、私が、また千秋さんが選ばうとしている道とは正反対の方向に伸びている旅路だった。

その旅路は、光に満ちた強い憧憬を私に運んできた。

けれども……

千秋さんは、もうこの世にはいないかもしれない。

もしかしたらいつか再会できるかもしれないというかすかな願いさえ、完全に潰えてしまった。

否、震災の報を受けたとき、私の片隅にそんな小さな願いが息づいていたことを思い知らされたに過ぎない。

あの日、京都を去るあの人を見送りにさえ行かなかった私に、どんな理由があつたにせよ別の男性との縁談をすんなり受け入れた私に、お姉様たちのような道を進む資格はない。

今さら東京に飛んでいき、瓦礫をかきわけて彼を探すようなことができるわけもない。

反対に、圭介さんは震災の影響を受けることなく、私たちの縁談はなんの障害もなくそこに存在し続けている。

私は、やはり圭介さんの手を取り、お姉様たちとは違った未来へ進まねばならないのか……あの忌まわしい天災がもたらしたものは、私にそのことをあらためて思い知らせ、背中を押すための神の御計ら이었다のだろうか。

秋の嵐 3 【月子】

関東を襲った震災が、私と勇作の未来を大きく左右することになった。

すべての催しが喪に服するために延期となり、勇作が照準を定めていた秋の剣術大会も中止になった。

練習不足の勇作にとってそれは好都合に思えたが、彼自身は落胆していたようだった。

必死で道場に通り続ける勇作の姿に心動かされ、一人二人と相手がかつてくれる人が増え、やっと本来の勘を取り戻しつつあったのだ。

その頃、東京では……

震災の混乱に乗じて、各地で暴動が起こっていた。

？朝鮮人が暴徒と化した？というデマを信じた人たちが、多くの罪のない外国人を手にかけるという虐殺事件も起こった。

治安を維持するには人員不足のため、軍や警察の指導で各地に自警団が結成された。

この自警団に加わるため、道場から何人かが上京することになった。

東京出身の人はもちろん、友人・知人の安否を知るために上京組に志願する人もいた。

その際、勇作にも、声がかかったのである。

勇作は、最初は取り合わなかった。けれども、一人の同僚の言葉に彼の心は動いた。

「剣術大会が延期になった今、これも一つの好機だ。軍に顔を売っ

ておけば、それだけ出世も早くなるぞ」

さらに追い討ちをかけるように、

「おまえの東京の師である香月早雲先生が、重症を負って入院している。予断を許さない状態だ。この機会に、会いに行つてやれよ」

香月先生のことは、私も何度か勇作に聞いたことがあった。

剣の道だけでなくさまざまな人生の教訓を授けてくださった恩ある方だと、勇作は目を輝かせて話していた。

先だつても、？結婚したい女性ができました？と文をお送りしたら、それはそれはお喜びになっていらつしゃつたと言う。

しかし、どんな事情があつても、私は勇作の上京を受け入れることなどできなかった。

「嫌です！ そんな危険な場所に行くなんて。やつと傷も癒え、本格的な稽古が始まつたばかりだというのに」

「月子、本当は俺も不安だよ」

勇作は私を抱きしめた。

「だが、このままここでじつとしていても、君を迎えに行く日は遠のくばかりだ。俺は、東京で国や市民のためにこの力を尽くしたい。その戦いと勝利の姿を持って、俺の価値を認めてもらうんだ。そうすれば……」

「焦つてはいけないわ。そんな保証はどこにもないのですもの。それに、またケガをしたり、もしかすると命さえ……」

私は勇作の顔の傷にそつと触れ、涙を落とした。

「大丈夫だ。もう二度と、君を悲しませたりしないと約束する」

秋の嵐 4 【月子】

「それに、香月先生は……」

彼は、恩師について語り始めた。

「東京に居た頃、本当に世話になった方だ。先生がいなければ、今の俺はなかった。10代の頃、東京ですさんだ生活を送っていた俺を救い、剣を教えてくださいましたのが香月先生だった」

妻子をもたなかった香月先生は勇作を自宅に居候させ、時には嚴格に、時には慈愛にあふれた指導で、息子のように接してくださったという。

「初めての試合のとき、格上の相手に俺はこてんぱんにやられてね、手にケガを負って、あつとう間に負けた。試合の後、悔しくて道場の隅で泣いてたんだ。すると先生がやって来られて、泣くんじゃない！？と強い口調で御叱りになった。？おまえは私の教え子なんだから、きつとこれから上達するから？って。だがそのあと、俺の手をさすりながら？痛そうだな。代わるものなら、代わってやりたいな？と、ご自分も涙をこぼされたんだ」

「こんな時に臆病風に吹かれて、瀕死の恩師のもとに駆けつけることができないなんて、男として恥じるべきことだと思っんだ」

そんな勇作を前に、私はもう何も言えなかった。

今、勇作を信じて送り出すことができないようでは、この先どうして彼を支え、愛し貫いていくことができるだろう。

私はその真っ直ぐな気性こそ、純真な魂こそを、好きになったのだから。

圭介さんも、正臣さんのご実家もご無事だったという知らせに早乙女家の皆が胸を撫で下ろしていた頃、入れ代わるように勇作は東京に旅立った。

改札に消えて行く彼の背中を見つめながら、どうか無事に帰ってきますようにと、手を合わせた。

だがそれから1週間ほど経ったある日、驚愕の事件が再び早乙女家を揺るがした。

松方清彰さんが、東京で逮捕されたという知らせだった。

清彰さんは、8月下旬から、京都帝大の水野博士と上京していた。私も華子も、雪子お姉様からは清彰さんの上京については全く聞かされていなかった。

しかもいったいどんな理由で、侯爵家の次男にあたられるような方が逮捕されるに至ったのか。

私たちは混乱した。

雪子お姉さまは御子の父親については頑なに口を閉ざしされたまま、私や華子が清彰さんだとお察ししていることを御存知なかった。

だから、清彰さんについて、ご自分からお話するはずはなかった。清彰さんが上京していたことはおるか、逮捕されるような危ういお立場であることなど、私たちには知る由もなかったのである。

松方侯爵と先代の御父上は欧州視察中、御母上も震災の被害が大きかった鎌倉のご実家にお里帰りされたまま、（ご無事ではあったものの）身動きがとれない状況でいらっしゃるという。

事件についての一切を、留守を預かる雪子お姉様が一身にお受けする形だった。

お父様（早乙女伯爵）は、理由は何にせよ縁戚から逮捕者が出たことに激しく動揺された。詳細を知るべく、また少しでも身重の娘の力になりたいと、松方侯爵家に赴かれた。

私も、雪子お姉様が心配で、お父様に同行させていただいた。

軍や憲兵隊の中に、震災の混乱に乗じて、自由主義者や社会主義者を一掃してしまおうという動きが高まっていた。

後にわかったことだが、憲兵隊に虐殺された人までおり、その中に清彰さんと親交のあった日々野博一という活動家もいたと言う。

清彰さんや水野博士がその場で殺害されずにすんだのは、不幸中の幸いだった。

けれども、お二人が間違っただけで逮捕されたわけではなく、現実にもそのような運動に関わっていたことは紛れもない事実だった。

「水野博士によくないお噂がある」と、いつかあの有島千秋さんが言っていたのを、私も鮮明に思い出していた。

秋の嵐 5 【月子】

雪子お姉様は憔悴しきっていた。

「清彰君は、事実、そのような運動に関わっていたのかね？」

「水野博士と上京されたのも、活動の一環だったのか？」

お父様の矢継ぎ早の質問に、最初はただ黙って頷かれるだけだった。

少し時間をおいて、

「清彰さんは、純粋なお気持ちでこの国のことを考えられていたのだと思います。そんな時に、水野博士や日々野さんという人の言葉に強く魅かれ、気がついたときには、もう後戻りできない状態だったのです」

と、小さな声で、とぎれとぎれに言われた。

「純粋な気持ち？ 今回のことは、そのような言い分では到底切り抜けられるものではないぞ。侯爵家に在籍する者がそのような輩と通じていたとわかれば……」

そこまで言われたとき、雪子お姉様が顔を激しく歪ませ、「うつ」と嗚咽を漏らされたので、お父様は口をつぐんだ。

続きは、なんとなく私にもわかる気がした。

もし罪が確定し、起訴されるようなことになれば、清彰さんは判決を待たずに侯爵家を追われるだろう。

松方家もまた、華族の品位を汚した家として、嫌悪や好奇の目にさらされるに違いない。

お父様には、やっと念願の嫡子を授かった娘にとって？ 青天の霹靂？であり、侯爵夫人として約束されていた未来を奪われる耐え難き出来事と映っていらっしやるだろう。苦悶の表情を浮かべられ、雪子お姉さまの肩を抱きながら、

「しっかりしないさい。私が知っているから」と、何度も声をかけられた。

けれども、私にはまた別の意味で、お姉様の心中は察するに余りある衝撃と悲哀に見舞われていらっしやるだろうと、胸が切り裂かれる想いだった。

清彰さん……それは、私にとっての勇作のように、お姉様には命とも言えるかけがえのない存在でいらっしやるはずだから……

お父様がいろいろな筋に確認したところによると、外務省を通じて、すでに英国滞在中の松方侯爵には、弟君逮捕の知らせが届いているということだった。

震災直後ということもあり、渡欧団には急遽帰国の途についた方も多くいらっしやったが、松方侯爵は同行されている御父上のご病状がすぐれないという理由で、まだ向こうに留まっていられなかった。

母国が未曾有の天災に見舞われている時に、しかも、自分の妻が念願の懐妊をし、弟がそのような緊急事態にありながら、なお帰国されない松方侯爵……私は怒りを覚えた。

もしもその裏に、あの女性問題があるのなら、なおのこと許せない。

「お父様、お姉様をこのままここにおいて帰るわけにはいきません」と、私は訴えた。

すでにすっかり疲れ切っているお姉様を松方家に一人置いていたら、各方面からの問い合わせや、ともすれば心無い言葉を一身に背負ってしまい、ますます追い詰められてしまうに違いない。

お父様は深く頷かれ、お姉様付きの侍女・桂木を呼びつけて、「雪子は早乙女家に連れて帰る。おまえも急いで支度しなさい」と、命じられた。

秋の嵐 6 【月子】

雪子お姉様が早乙女の家へ帰宅されると、お母様や高波ら侍女たちがお姉様をわつと取り巻いて、甲斐甲斐しくお世話を始めた。

それでもどこか、「腫れ物に触るように」という感じが見え隠れし、そこには妙な空気が漂っていた。

お父様は引き続き宮内省や外務省と連絡を取り、清彰さんや松方侯爵の現在の状態について情報収集をされていた。

屋敷の皆が寝静まったある夜更け、私は華子と申し合わせ、雪子お姉様のお部屋をお訪ねした。

お姉様は寝付かれないご様子で、窓辺に座り、夜空を眺めていらつしやうた。

その美しい黒い瞳は、涙にうるんでおられた。

「御子の父親は清彰さんではないのですか？」

私たちは単刀直入にお訊ねした。

雪子お姉様は一瞬驚かれ、戸惑ったようにお顔を伏せられたが、やがて、

「ええ」

と、吐息混じりに小さく言われた。

華子は、長椅子にかけていたお姉様の横に座りなおし、その手をとって、

「つらかったでしょう、お姉様」

と、涙を浮かべた。

「お姉様の本当のお気持ちを聞きしたいの。これから、どうなさるおつもりだったの？ 清彰さんの御子であることは隠して、孝彰さんの妻としてこのまま侯爵家にいるおつもりなのか。それとも……」

しばらく、沈黙が続いた。

「孝彰さんが帰国されたら、真実をお話し、離縁していただく決心を固めていたの」

雪子お姉様は、そうおっしゃった。

「早乙女には迷惑をかけてしまうけれど、すべてを隠し、想いを偽って侯爵夫人であり続けることなどできないと思っていたわ」

「清彰さんは、ご承知だったの？」

「ええ。彼は、私と赤ちゃんを連れて侯爵家を出て行く決意をされていらした。最初はお断りしたわ。けれども、？もう決めたことですか？と言われて……もし9月になっても孝彰さんが帰国されないときは、英国へ御手紙を書くおつもりでいらっしゃった」

それならばなぜ、そのような大事な時期に上京されたりしたのか。言いようのない悔しさと怒りがこみあげた。

華子も厳しい表情を浮かべ、私と同じ想いをはっきり言葉にした。

「そこまで決心されていたなら、どうして清彰さんはお姉様を残して東京なんか」

「それは……日々野さんとの関係をきっぱり清算するためとおっしゃって……」

清彰さんは、水野博士と日々野さんの前で転向（政治的、思想的立場を変えること）の意思を伝えるために、また、いつかお姉様と新しい暮らしを始めるためのお仕事やお住まいを探すために、東京に行かれたのだという。

お二人の愛が深く強いものであることをあらためて知らされ、心も身体も大波に打たれたような感覚になって、身震いした。

「では、警察で転向の話し合いのために活動家たちと会っていたとお話すれば、釈放されるのでは？」

華子は身乗り出すように言った。

「それをお父様から警察の方に訴えていただきましょうよ！」

「一筋の希望ではあるけれど、今の東京は戒厳令が敷かれて、普通

の状態ではないわ。警察も軍も、非常事態の下でまともに機能していない。不当逮捕や虐殺が横行している中で、そのような説明がどこまで通用するかどうか……」

私は雪子お姉様にはつらい現実だと思いつつ、真実をはっきりお伝えした上でこれからのことを考えねばならないと思い、あえてそう言った。

けれども、雪子お姉様はすべてわかっていているというご様子で、静かに頷かれた。

「私もそう思ったの。新聞や様々な本で調べたけれど、本来、転向なんて易々とできるものではないらしいの。この機会にそのつもりだったと言っても、釈放されたための虚言だと思われかねない」「だめだわ。お二人とも、そんな弱気では……やるだけのことはやってみましょうよ。私、圭介さんにも連絡をとってみるわ。何か、御知恵をお借りできるかも……」

雪子お姉様は、「それはなりません」ときっぱりおっしゃった。若田家にまでご迷惑をおかけしてはならない、ましてや、尽力していただいて釈放まで導いた人が、兄嫁と手を取り合って家を捨てるということになれば、どのようなことになるか……

「それでなくとも、お父様が奔走されている御姿を見るのがつらくてならないのです」

と、苦渋に満ちた表情でつぶやかれた。

そして、すっとお立ちになり、もといた窓辺に戻られた。

夜空にまたたく星を見上げて、静かにこうおっしゃった。

「月ちゃん、華ちゃん、私は、どのようなことがあっても、たとえ一人になっても、この子の母になろうと、それだけを支えにします。もしも、清彰さんがこのまま戻らないようなことがあっても、私のこの想いは変わりません。だからもう、あとは、運を天に任せるしかないと思っているの」

私たちは黙り込んだ。

秋の嵐 7 【月子】

私は、勇作のことを考えていた。

雪子お姉様の言葉を、自分に置き換えて勇作への想いを馳せたと
き、その覚悟は清清しいまでに絶対的で普遍的なものとして、胸の
真ん中に落ちてきた。

私がお姉様でも、きっとそうするだろう。また今の私も、勇作と
の未来を、祈るような想いで天に預けているのだから。

ふと横を見ると、華子は、唇の辺りで手を合わせ、ずっと目を閉
じていた。

何かに祈っているようだった。

その胸には、どのような想いが去来しているのだろうか。

私の脳裏に、有島千秋さんのことがよぎった。

やがて、その華子が口を開いた。

「私は、お姉様たちがともうらやましいと思います。そんなに深
く愛し合える方とめぐり会い、ご自分の心に正直に生きようとなさ
っている……」

「華子……」

「けれども、私は私の生きるべき道を、まっすぐに進んでいく決意
をしているの。圭介さんを婿養子にお迎えして、この早乙女家をもり
たてていくこと……」

「華ちゃん、心の底からそう思っただけで決断したの？」

雪子お姉様が再び長椅子に戻られ、華子に問われた。

「後悔はないの？」

「有島千秋さんのことは……？」

私はその人の名前を口にしても、華子は表情を変えなかった。そ

して、

「まだ生存が確認できていないとお聞きしてる。けれども、お姉様たちがどのようなことがあっても変わらないとおっしゃるように、私も同じなの。あの人と永遠にお会いできなくても……いいえ、それならばなおのこと、たとえ短い時間でも心通わせることができたあの瞬間、あの人が私に残してくれたものを心に刻みつけて、忘れずに生きて行きたいと思ったの……」

圭介さんは素晴らしい方です。私にはもつたいないほど、誠実で純粹で、頼りになる方。私はあの人の想いに答えられるよう努力して、良い妻になりたいと思っています」

華子は微笑み、

「なんだかうまく言えないわ。でも、震災があつたからこそ、この想いは強くなったの。つまり……それが今の私の覚悟なんです」と、言った。

「雪子お姉様も、月子お姉様も、どうか悔いのないようにご自分の道を進んでくださいね。お父様やお母様は動揺されるでしょうけど、あとのことは私に任せて」

「華ちゃん……」

雪子お姉様は華子を抱きすくめ、号泣された。

この半年間で、本当に華子は変わった。そこには、大人になった……という言葉ではとても表しきれない、強さや潔さが迸っていた。「ありがとう」

私もやっとの想いでそれだけつぶやき、手で顔を覆って泣いた。

鈴虫の声が、夜のしじま静寂に響き渡っていた。

雪子お姉様は「二人とも、もう少しここにいて」と、おっしゃった。

私も、自分の部屋に戻る気分ではなかった。いつまでもこうして、

三人でいたいと思った。

華子は、いったん部屋を出て行き、お紅茶を入れてきた。そして、「さあ、次は月子お姉様の番よ」

と、無邪気に笑った。

「勇作さんのこと、聞かせて」

私と勇作のことは、雪子お姉様はほとんど御存知なかった。この数ヶ月間の、私たちの壮絶な日々を知り、たいそう驚かれた。

華子にも彼が震災後の東京に行ったことは聞かせていなかったの
で、顔色を変え、清彰さんや千秋さんを奪った震災が、私と勇作の
運命までも狂わせたことに、

「やりきれない怒りを感じるわ」と、言った。

けれども、私はこの嵐をきつと乗り越えて、勇作との未来をつか
んでみせる…と、強く心に誓っていた。

二人の姉妹が、絶望に呑み込まれることなく、自分の覚悟を貫こ
うとしている姿を見て、勇気をもらった気がした。

哀しい運命の鉄鎖を断ち切って、ともに未来に踏み出したいと思
った。

二人もまた、同じ気持ちだったと思う。

このように三人で語り合い、それぞれ胸の奥深くまでわかりあえ
たのは初めてだったかもしれない。

生涯忘れられない夜となった。

秋の嵐 8 【月子】

その頃、勇作は東京で真つ先に香月先生を訪ねていた。

先生は、倒れかかつてきた筆筭の下敷きになり、腰を骨折。

頭も強打され一時は重体でいらっしやったが、なんとか一命を取り留められ、勇作が会いに行ったときは、長い昏睡状態から抜け出されたばかりだった。

先生は、勇作の傷だらけの顔をご覧になり、黙って涙をこぼされたという。

恩師に生きて再会できたことに勇作は心から安堵し、感謝し、旅の疲れも消し飛んだと言う。

その病院にたどり着くまで、大変な想いをした。

被災後間もない市内は混乱が続いており、交通機関はほとんどが止まったまま。

短い区間の移動にも大変な時間と労力を費やすことになった。

いたるところで大きな建築物が押しつぶされていて、猛火で焼失した建物の焦げた匂いが街を覆っていた。

まるで戦場そのものだった。

家屋をなくした人たちが公園や空き地に溢れかえっていた。

勇作たちは、香月先生が収容されているという病院の近くで活動していた自警団に加わり、避難民のためのバラックを建設することになった。

ある朝、屯所に配達された新聞を見て、勇作は松方清彰さんの逮捕を知った。

私に知らせることも確認することもできず、勇作は、自警団の一人に尋ねてみた。

「この人は自分の知人かもしれない、なんとか確かめることはできないでしょうか？」

するとその人は、あたりをキョロキョロと見回し、

「自由主義者と知り合いとわかれば、あんたの身が危ないよ。俺は聞かなかったことにするから、知らん顔しといた方がいい」と、ささやいた。

勇作はどうするべきか、考え込んでしまった。

上京の目的は、香月先生へ会うことだけではなかった。

東京で支援活動に給仕することで、なんとか公に取り立ててもらう道を模索できないかというものだった。

自警団の人が言うように、逮捕者などに関わってしまったえば、自分まであらぬ疑いをかけられ、すべて水泡に帰してしまうかもしれない。

だが、実際に東京の惨状を目の当たりにし、病院や町で多くの人たちが苦しんでいるのを見て、心の底から力になりたいと思うようになっていた。

まして、早乙女にゆかりのある松方清彰さんが巻き込まれているのなら、放ってはおけない……

勇作は数日後、自警団の活動の合間を縫って秘密裏に、ある警察署を訪ねた。

そこには、清彰さんが留置されていた。

次章「樹氷」へ

樹氷 1 【雪子】

11月中旬、孝彰さんから手紙が届きました。

手紙の大半は、左翼運動に関わり、逮捕されてしまった弟への激しい憤怒と痛烈な批判が延々と書き綴られ、

「清彰は勘当、今後一切、松方家への出入りを禁ずる」

と、締めくくられていました。また、

「父上は、心臓に重大な疾患があることがわかった。
帰国はさらに延期する。」

場合によつては、年単位でこちらに滞在することになるかもしれない」

「船舶等の交通が復興したら、まずは母上をこちらにお呼びする。」

春になって子供が誕生し、母子ともに落ち着いたら、

次はおまえたちを呼び寄せる方向で調整する」

とも書かれておりました。

私をあちらに呼び寄せるのは、あの子爵末亡人との関係に何か変化があったという表れでもありました。

けれども、私には夫の心中を慮ったり苦境を支えようと思つ気持ちは微塵も起こりませんでした。

むしろ、そこから滲み出る孝彰さんの卑怯さや脆弱さに、潮が引くように心が乾くのを感じておりました。

日本国が震災により大打撃を受けたこと、また、その最中に弟君が逮捕されるという不測の事態が起こってしまったこと……孝彰さんは、お義父様のご病気を盾にすべてに背を向けて、嵐が治まるま

での時間稼ぎをなさるおつもりなのだと思います。

また、家族ごと日本を離れようと言うのは無謀とも思われる提案でしたが、早乙女家が先代から蓄えてきた財産を使えば決して無理なことではない……そう思った瞬間、清彰さんがお義父様や孝彰さんと一線を描き、特権階級であるご自分を呪い、あのような活動に魅かれていった心情を初めて「実感」として理解できる気が致しました。

私は、孝彰さんにも、また、早乙女のお父様にも、御子の父親が清彰さんであることを打ち明け、松方家を出る決意をいよいよ固めました。

どのような理由があれ、私が不貞を働いた悪妻であることは否定しようのない？事実？でした。孝彰さんは激怒されるでしょう。早乙女の両親は、どれほど苦しまれるでしょう。この手で、多くの人を傷つけてしまうという罪悪感は、時に、私を死に向かわせるほど重くのしかかっていました。

けれども一方で、清彰さんを愛したことは唯一自分が選択した、この人生の？真実？でもありました。何より私の中で脈打つ小さな生命から、太陽の恵みのような大きな力をもらい、ただただこの子がいとおしく、この子のためならどんな苦難も乗り越えよう、罰も受けようと、心底思えるようになっていったのです

妹たちと語り合うことで、より強くそう信じることができ、私の中からもう一切の迷いは消えていたのです。

私は冬になる前に、早乙女邸を出ようと思いました。

そして、どこかで子供と一緒に清彰さんをお待ちしようと、遠く想いを馳せました。

けれども、清彰さんや勇作さんの消息は未だわからないままでし

た。

樹氷 2 【雪子】

小島勇作さんが戻られたという知らせを受けたのは、その数日後でした。

父親である庭師の源太が、お父様とお母様が不在のときを見計らって、月子を呼びに来たのです。

月子は源太にすがりつき、

「無事だったのね?! 勇作は今どこに?!」
と、叫びました。

「少し弱っていますが、元気です。私の家で休んでおります」

源太も震える声でそう言い、二人は抱き合って泣きました。

「月ちゃん、早く行ってあげて」

と、私が言つと、華子も、

「待ってて、お姉様、コートをとってくるわ」

と、階段を駆け上がりました。

勇作さんの帰郷は、月子だけでなく、私や華子にも安堵と喜びを運んできました。

けれども……

夜更けになつて帰宅した月子は、すぐに私の部屋を訪れました。

当然、再会の喜びにあふれた報告を聞けるものと信じて扉を開けましたが、佇んでいた月子の表情は暗く、真剣でした。

樹氷 3 【月子】

私は、勇作との再会に、この世界中のすべてに感謝を捧げたいほど狂喜し、いつまでも勇作の胸に顔を埋めて泣いた。

懐かしい彼の匂い。このまま時が止まればいいのに、と思った。

でもその感涙はすぐに、悲しい報によって慟哭に変わった。

雪子お姉様……

できるなら勇作の話を雪子お姉様に伝えたくはなかった。

けれどもあの夜、お姉様の御覚悟をお聞きしたからには、私の口からすべてをお話しするのが使命であると、崩れそうな自分を奮い立たせた。

たとえ、どんなに残酷な現実であっても。

勇作は、恩師である香月先生のお見舞いに足繁く通いながら、一方で、避難民のバラック建設や、物資の搬送、混乱に乗じて頻発する窃盗や暴動等の取り締まりに奔走していた。

当初は顔中傷だらけで身体の大きな彼を恐がっていた地元の人たちも、優しく正義感にあふれた彼の姿に次第に心を開き、頼るようになった。

わざわざ関西地方から支援のために駆けつけてくれた勇作たち一行に感謝し、彼らがもともと剣術道場に所属しているのを知った地元の青年や子供たちから、支援活動の合間に剣を教えてほしいという申し出があった。

やがて、勇作たちに目を留めた軍の人たちからもお声がかかり、

被災地を飛び回る医師たちの送迎や護衛を行うことになった。

こうした経緯で、勇作は、医師の井上栄一郎先生と出会った。

井上先生は四十代の紳士で、豪快な気性の方。勇作さんのことをとても気に入ってくれたそうだ。

大阪の診療所に勤務していたご経験があり、なんとあのハインツのこともよく御存知だったという。

こうして、勇作は井上先生と行動をとるようになっていった。

そしてちょうどその頃、彼は、清彰さんが東京で逮捕されていたのを知ったのだった。

なんと不思議なめぐりあわせだろうか。

勇作の口から清彰さんのお名前が出たとき、私は心臓が高鳴り、全身に鳥肌が立った。

勇作は、清彰さんに会いに行った。

警察署で、応対に出た人に勇作は単刀直入に切り出した。

「ここに留置されている松方清彰という人は、僕の知人かもしれない。会うことはできませんか？」

そう言っではみたものの、どこの誰かもわからぬ不気味な隻眼の男を、警察がすんなり受け入れるはずもなかった。

樹氷 4 【月子】

勇作はすぐに別の部屋に連行され、いろいろと詰問された。

自分は関西から支援活動に来ている者であり、清彰さんとは面識がないが、お世話になっっている早乙女伯爵の縁故の方であると思われるから事情を知りたいのだと率直に言い、またかつては東京で香月早雲先生に師事しており、先生の見舞いもかねて上京した旨、根気よく説明した。

それでも最初は信じてもらえず、3日も足止めを食うことになった。

たまたま、その警察署にかつて香月先生から剣を教えてもらったという警官がいたため、入院中の先生への確認がとれ、勇作の話が真実であることが判明した。

さらに、3日目には、自警団の人からここにいるのではないかとお聞きした井上先生が警察を訪ねてこられ、救いの手を差し伸べてくださった。

「ご迷惑をおかけしてすみません」

「無茶なことするなあ、君は」

井上先生は笑い飛ばしながらも、すべてを知った上で、警察へいろいろとかけあってくださったそうだ。

本当に伯爵家ゆかりの人で、身元がきちんとした左翼運動とは無縁の支援者を無下にもできないと判断し、警察はしぶしぶ面会を許可するに至った。

勇作と井上先生は、面会室に通された。

そこに現れた清彰さんは、とても侯爵家の子息とは思えないほど薄汚れ、ボロボロの状態だったという。

逮捕されてすでに3週間以上が経過しており、断続的に続く拷問のような厳しい取調べのため、衰弱しきっていた。

「始めまして、小島勇作と言います。父が早乙女伯爵家で庭師をしており、私も伯爵にはたいへん御世話になっています」

「…そうですか…早乙女伯爵の…」

「支援活動でこちらに来ていて、偶然あなた様のことを知り、お訪ねしました。京都とは連絡がとれませんが、あちらも驚かれ、動揺されていると思われます」

「本当に申し訳なかった。僕は、転向するために東京に来たのに…一足遅かった」

「そうだったのですか…」

「松方家は今、どうなっているのだろうか。あの人は…」

「あの人？」

「雪子さんは……」

「今の時点でお義姉さまのことはわかりません。私が京都を立つ前は、妹君からお元気に過ごしていらっしゃるとお聞きしておりましたが……」

清彰さんはしばらく考え込み、「明日、もう一度会いに来てくれないか」とおっしゃった。

「雪子さんへの御手紙を、君に託したい」

「はい、承知いたしました」

「僕は、生きてここを出られないかもしれない。だから、どうしてもあの人もう一度、想いを伝えておきたいんだ」

勇作は、清彰さんの雪子さんへのただならぬ想いを察知した。横で聞いていらした井上先生も、同じことを感じられたと言う。

さらに、面会室を出られた先生は曇った顔で……

「危険だな。あれは、胸をやられているな」

「病気ですか？」

「時々、咳き込んでいただろう。あれはただの風邪じゃない。労咳（結核）の咳だ」

井上先生は警察に、「明日にでもしかるべき施設にうつさない大変なことになる」と話したが、すぐに聞き入れてもらえる空気ではなかった。

それならばせめてと、

「厳しい取調べは中止してもらわないと、このまま続けていたら死んでしまうぞ」

と、食い下がってくださった。

樹氷 5 【月子】

翌日、勇作はもう一度清彰さんに会いに行き、面会を申し出た。清彰さんは、「雪子へ」と宛名の書かれた書簡を差し出した。

「僕は、あの人を愛しているんだ。あの人も、同じ気持ちだ」
勇作は静かに訊ねた。

「雪子様は御懷妊されているとお聞きしています。まさか……」

「ああ、僕の子なんだ」
胸をえぐられるようだった、と、勇作はその瞬間の心境をそう表した。

「早乙女伯爵家にゆかりのある君に、このようなことを頼むのは本当に申し訳ないと思っている。僕のしたことは、伯爵家にも傷をつけるような大変なことだ。だが……」

清彰さんは激しく咳き込まれた。

口を覆った手のひらを、赤い血が染めた。

「僕はもう、長くない。京都にいるときから病に冒されていることは自覚していた。だからこそ、すべてを清算し、最後の時間をあの人と静かに過ごしたかったんだ」

「どうか、気をしっかり持たれてください。あなたがいつまでもここにいる言われは、もうないはずです。一刻も早くここを出て、雪子様のもとに戻りましょう」

清彰さんは力なく微笑まれ、

「ありがとう」

と、つぶやかれた。勇作は、こう言った。

「僕は、早乙女月子さんと一緒にになりたいと思っています。僕のような身分のものが伯爵家の姫君と添いたいなど、許されるわけはない、恩ある早乙女伯爵を裏切ることにもなると、苦しみました。けれども今では、なんとか認めてもらい、月子さんとともに生きるのだと、希望を捨てずに生きています」

「君……そうだったのか」

「こうしてお会いすることになったのも、僕たちが不思議な何かで結ばれている証拠です。二人で一緒に、京都に帰りましょう」

勇作がそう言うのと、

「ああ、そうだね。そうになると、いいね」

清彰さんは穏やかな表情をたたえ、もう一度、

「本当にありがとう」

面会時間が終わり、清彰さんは警官に促されて立ち上がった。

そして、勇作を振り返り

「雪子さんと、僕たちの子供を……頼みます」

と、おっしゃったそうだ。

樹氷 6 【月子】

「あの戦場のような土地で、俺と清彰さんが出会ったことに、何か大きく、不思議な力を感じた。あの人の想いを知ったとき、俺は自分と月子のことを重ねて、身が切られるような感覚になった。なんとかあの人を救ってやりたいと思った」

勇作は拳を握り、唇をかみしめた。

「だが、結局は何もできなかった。悔しくてたまらない」

勇作は、源太の家の片隅にある、仏壇の方を見やった。

それまで、私はそこに静かに置いてあった白い包みに、全く気づいてなかった。

「そんな……まさか……」

「10月20日だったよ……手紙をお預りしてから3日後だった」

連絡を受けた勇作は井上先生とともに警察署に向かった。

清彰さんは、畳一枚ほどの板の上に横たわり、顔に白い布を掛けられていた。

井上先生は横に立っていた警官の胸倉をつかんで、

「だから行っただろうが！」

と、激怒されたという。

勇作は膝をつき、清彰さんの傷だらけの手を握った。

氷のように冷たかった。

清彰さんのご遺体は、井上先生の御計らいによって茶毘にふされ、

遺骨は勇作が預かって持ち帰り、手紙とともに雪子お姉様に御渡しするということになったのだ。

震災から一月ほど過ぎた頃、孝彰さんから各方面に、

「松方清彰は勘当した。もう松方侯爵家とは縁もゆかりもない者である。この先、清彰の処遇については関知しない。一切の連絡は無用」

との通達が届いていた。

京都の雪子お姉様やお父様（早乙女伯爵）が勘当を知るのは、さらに時間が経過してからだった。

警察は存分に取り調べができるかと力を入れたようだったが、亡くなってしまったことで途方に暮れ、今度は誰かに引き取ってもらわねば困る……とばかりに、勇作に連絡をよこしたようだった。

もし勇作がいなければ、誰にも知らされることなく、現地で闇に葬られていたかもしれない。

勇作が居合わせ、お姉様のところへ遺骨を持ち帰れたのがせめてもの救いだった。

樹氷 7 【月子】

こうして私は、勇作から聞いたすべてを、雪子お姉様にお話した。

お姉様は動じることなく、最後まで静かに聞かれていた。

「お姉様、さあ……今から私と源太の家に参りましょう。源太も勇作も、まだ起きて待っています」

私が涙声でそう言くと、お姉様は悲痛な面持ちで、

「ごめんなさい。今はまだ、何も考えられないの」

と、小さくつぶやき、

「見たくないの」

と言いながら、何度も頭を横に振った。私は、

「でも……」

お姉様の手を握り、しぼり出すように言った。

「誰より、清彰さんが……お姉様が来られるのをお待ちなんですよ」

その瞬間、何かがはじけたように、お姉様は崩れ落ちた。

そして、小さな子供のようになにをあげて泣いた。

源太の家に着いたのは、深夜、日付が変わってからだった。

「雪子様、私の力ではどうすることもできませんでした。誠に申し訳ございません」

勇作はそう言って、お姉様の前で土下座した。

お姉様は、

「勇作さん、どうぞお顔をあげてください」

と言い、勇作の手をとった。そして、

「謝らなくてはならないのは、私の方です。あなたには、つらい想いをさせてしまいました。本当にごめんなさい」

勇作はゆっくり身体を起こし、懷から封書を取り出した。

「お預かりした御手紙です」

お姉様は震える手で、それを受け取った。

封筒には？検閲済み？という物々しい押印がなされており、いたるところ黒く汚れていた。

清彰さんの最後が忍ばれるその薄い封書。

中味は、便箋一枚だけの短いものだった。

当局の検閲を通過するために、手紙の内容は簡素であたりさわりのないものに……とお考えだったのか。

いや、きつと、死期の迫っていたお身体ではその一枚を書き綴るのが、精一杯だったのだろう。

雪子お姉様は遺骨の前に座り、その一枚の手紙を何度も何度も読み返されていた。

瞳からはとめどもなく涙があふれ、お姉様の青白い頬を、灰色の便箋を、そして、小さくせり出した御腹を濡らした。

樹氷 8 【雪子】

「あなたがこのお手紙を読む頃には、嵐山は紅葉で燃えているでしょうか。それとも、美しい樹氷に輝いているでしょうか。最後に、あなたと一緒に見たかった。

あなたを守るとお約束したのに、最後まで心配ばかりおかけして、苦しめてしまったことを悔やみます。許してください。

僕は、生まれ変わって、また一からやり直します。

お顔を合わせることはできなくなっても、

僕はこれからもずっと、お側にいます。いつまでも。

子供が産まれたら、名前は「光」……

男の子でも。女の子でも。

どうでしょう？ 気に入ってくれと良いのですが」

「お身体にさわれますから、少し横になられてください」

源太がそう言って、布団を敷いてくれました。

私は手紙を握り締めたまま横たわり、ずっと白い箱を見つめていました。

いつしか、浅い夢を見ているように、様々な情景が胸に去来していました。

小春日和、柔らかな風にそよぐレースのカーテン、水仙の花。

ゆっくりと進む白いボート、オールを漕ぐ音、キラキラと輝く湖面。

窓から差し込む斜陽、静かな書斎、インクと本の匂い。

月夜の庭、舞い踊る一匹の蒼い蛍。

けれども……どこにもあなたはいませんでした。

どのくらい時間が経ったのでしょうか。

ふと我に帰って部屋を見回すと、月ちゃんも勇作さんも、源太もいませんでした。

空が白み始めていました。

晩秋の朝の空気は冷たく、手足が凍りつくようでした。

いいえ……

本当に凍てついていたのは、私の心。

ねえ、あなた……樹氷は、私の内なる世界に張り巡らされているようです。

いつもはお腹の中で元気に動いて私を起こしてくれる赤ちゃんも、今朝は静かです。

私は一人で、氷の世界に佇んでいます。
朝陽も春も、ずっと遠くに感じられます。

の重奏」へ

次章「冬

冬の重奏 1 【華子】

私はその翌朝早く、月子お姉様に起こされた。

そして前夜の出来事を……帰郷した勇作さんによってもたらされた、あまりにも衝撃的な清彰さんご逝去の事実を、知った。

言葉を失い、しばらくソファの肘掛に顔を伏せたまま死んだように動けなかった。

月子お姉様は私の肩を持ち、力を込めた。そして、

「私たちまで動揺し、立ち往生している暇はない。雪子お姉様をお守りするために、これからのことを話し合わなくてはならないわ」と、毅然とした口調でおっしゃった。

私は、

「お父様たちには全部本当のことを話して、雪子お姉様は松方侯爵と離縁してもらい、この早乙女で赤ちゃんを産むべきだわ」と、激情に任せて訴えた。

「けれども、お父様たちがすんなりそれをお許しになるとは思えない……お父様は、雪子お姉様が嫁ぐときから侯爵夫人になることを喜んでいた。そのお姉様が、華族の誇りを自ら汚したことを公表され、その立場を放棄するなど、許されるはずがないわ。まして、不義のお相手が、左翼運動に関わり勘当されて獄死した侯爵の弟……最悪よ。世間体を気にして、清彰さんの子という事実を隠し通し、侯爵家に戻るよう強く勧めるかもしれない」

「だめだわ。そんなことしたら、お姉様はきっと死んでしまうわ」と、私はいつそう激しく泣き、取り乱した

「華子、しっかりしないさい。事と次第によつてはあなたの若田男爵家との縁談にも差し障りがでるかもしれないのよ」

「そんな……どうすればいいの？」

「だからこそ、すべてがうまく行くよう私たちが手を打っていかなくてはならない」

「月子お姉様……なにかお考えがあるの？」

「…まだわからない。でも、じつとはしてられないわ」

お姉様ははそう言われ、

「桂木を呼んでくるわ」

と、立ち上がった。

その夜、早乙女邸の広い客間で話し合いがもたれた。

お父様、お母様、月子お姉様、私、桂木、そして勇作さんが会した。雪子お姉様は、源太の家に残られた。

冬の重奏 2 【華子】

「月子、雪子のことで重大な話があるとは、いったいどういうことなのだ」

お父様は、集まった人たちの顔ぶれを見回し、訝しげに訊ねられた。

「はい、お父様。まずは、小島勇作さんの方から、松方清彰さんについて報告してもらいます」

「うむ。勇作君、君、もう、傷の方はいいのか？」

少し固い感じの口調で、お父様は問いかけた。

お母様など口元には笑みを浮かべて会釈をされたものの、勇作さんのお顔をみるまなざしには、まるで異世界の人を見るような怯えがあった。

「はい、おかげさまで、左目はすっかり回復いたしました」

「そうか。源太も喜んでいたらかな。で、清彰くんのこととは？」

「はい、申し上げます。私は、つい先日まで、震災後の東京に行き、現地で支援活動に携わっておりました」

「そうだったのか…ご苦労だったね」

「ありがとうございます。あちらでは、被災され入院された師匠の香月早雲先生のお世話に通いながら、一方で軍医の井上先生とともに被災地をめぐっておりました。そんなときに、松方清彰さんの面会に伺う機会を得たのです……」

こうして、勇作さんは、清彰さんの遺骨を持ち帰るまでの経緯を説明した。

だが、この時、雪子お姉様へのお手紙を預かったことは、意図的に伏せられていた。

「そうか……」

お父様は不機嫌そうにため息をつかれた。

「勇作さんは、清彰さんが勘当されたことは知らなかったのだから、お預かりして帰るのが務めだと、わざわざ活動を休止して持ち帰ってくれたのよ」

私がそう口をはさんだ。お父様のお怒りの矛先を、遺骨を持ち帰った勇作さんから反らそうと必死だった。

「それはそうだな……私でさえ、彼が侯爵家から勘当されたのを知ったのはつい先日だ……あれほど動き回ったのに、こちらへの報告はずっと後だったからな。勇作君、大儀だったな」

「いいえ、もったいないお言葉です」

ほつとして、月子お姉様と顔を見合わせる。

「…それで、持ち帰った遺骨は、今、源太の家に？」

「はい」

「それで、雪子はなんと言っているのだ？ 松方侯爵家ではその遺骨は引き取らないと言うはずだ」

「お姉様は、侯爵がご不在の間いろいろと力になってくださった清彰さんに、深い恩義を感じていらっしゃるの。それで、侯爵家の菩提寺に納めることが叶わないなら、なんとかご自分の手でしかるべき場所に埋葬してさしあげたいと…」

「いかん！ それは、いかんぞ、月子。勝手にそんなことをして、侯爵の御怒りをかけてしまったら…」

「お父様、それで、ここからが今夜の本題なのです。実は…」

一瞬の静寂。皆、固唾を吞んで、お姉様の言葉を待った。

「雪子お姉様は、侯爵と離婚され、松方家を出るとおっしゃっています」

「なんだと?!」

冬の重奏 3 【華子】

「何ということ……… いったい、何があったのだ!？」

「松方侯爵にはずっと以前から、愛人がいらっしやるのです」

「愛人だと?!」

「お相手は、東京の寺木子爵家の未亡人だろうと言われています。早乙女家にはそのお噂が届きませんでした。有名なことらしいのです」

きつぱりとそう言い放つ月子お姉様。

私も身を乗り出し、ここぞとばかりに言葉を継いだ。

「圭介さんもご存知でしたわ。それで、私と圭介さんと、雪子お姉様に会いに行き、それとなくお訊ねしたことがあったのです」

「圭介君まで……… 若田家もご存知だったのか……」

お父様は引きつった表情。

「それで、雪子はなんと?」

「お姉様はご存知でした。それについては、桂木が……」

皆、部屋の佇んでいた桂木を一斉に見た。

「はい、おそれながら申し上げます。雪子奥様は、今年の春先にそのことをお知りになり、以来、たいへん苦しんでおられました。なぜなら…… 侯爵家では、奥様に代わってその女性に子供を産ませ、嫡子として迎えるというお話が公然となされていたのです」

「なんだと?!」

「それをお知りになった奥様は、自ら御命を絶つことをお考えのようでした。そのような苦しみの中にあつた奥様を励まし、救ってくださったのが清彰様でございました」

桂木は涙ぐんだ。

お父様は、テーブルを叩いて立ち上がり、その勢いで椅子を倒された。

そして、真つ赤なお顔で、あたりをうろつろと歩き回った。

「しかも、圭介さんがお耳にしたお話では、侯爵はその女性を欧州に呼び寄せられ、あちらで侯爵夫人のように連れ歩いていると」

「帰国を延ばし延ばしにされているのも、それが原因だろうと言われているかもしれません」

私や月子お姉様は矢継ぎ早にたたみかける。お父様は絶句したまま。

突然、お母様が苦しそうに胸に手を当て、口を開かれた。

「なんてことを……それが事実なら、あまりにも雪子が……」

「ああ、雪子が不憫でならない。それに、嫁がせた側とは言え、この早乙女伯爵家に対しても許しがたい侮辱だ」

お父様は顔を歪ませ、拳を握られた。

「私と華子もすべてを知ったとき、悔しくてなりませんでした。そこで、圭介さんの御知恵も拝借しながら考えた結果、やはりお姉様は侯爵家を出られて、新しい人生を生き直すべきだという結果に至りました。お父様にお話しようと思っていた矢先、震災が起こって……これまで隠していて、誠にすみませんでした」

自分たち夫婦だけ蚊帳の外だったということを知ってお父様は不快感をあらわにしたが、それよりもずっと侯爵家への憤怒が大きかったため、私たちがひどく御叱りをうける流れにはならなかった。

「離縁か……」

「愛人のことに加え、清彰さんには御気の毒ですが、今回の清彰さんの事件を理由に、お父様から離縁の申し出をされることはできませんか？」

「しかし、私の力で別れさせるとしても、腹の子はどうする？ 男児が誕生すれば、念願の嫡子だ。侯爵は子供だけでも欲するはずだ。それに……」

その先はおっしゃらなかったが、私にはお父様の心の動きが手にとるようにわかる気がした。

離縁させて連れ戻すこととこのまま侯爵家に返すこと……雪子お姉様のお気持ち差し置き、世間的にはどちらが良いのか天秤に掛

けていらつしやるのだ。

月子お姉様が予測したとおりだった。

それを覆すために予め用意されていた言葉……私の出番だった。

「圭介さんによれば、国の緊急事態に、また、弟君逮捕と言う問題を引き起こしていながら、愛人が原因で帰国されない松方侯爵への風当たりは、とても強いものになっているようです。若田男爵家としても、それをとても気にされていらつしやるようなのです。圭介さんが早乙女を継げば、松方家とも縁戚になる……」

お父様はハタと我に帰ったように表情を変えられた。

「もしも、私の縁談に影響が及んだら……」

私が暗い声でつぶやくと、お父様は椅子に掛けなおし、腕を組んだ。

松方家と若田家……角度を変え、今度はこの二つを天秤に掛けるとするなら、今の早乙女家がどちらを重んじるべきか……それは、火を見るより明らかだった。

さらに、想定しなかった後押しが……

「あなた……私は母親として、雪子を松方家に返すなど、とてもできませんわ。まして、やっと授かった赤ちゃんを取り上げるなんて、あまりにもあの子が可哀想です。雪子も赤ちゃんも、早乙女で面倒をみればいいじゃないですか」

お母様が、涙声でそうおっしゃったのだ。

お父様の瞳に、炎のように強いものが揺らめいた。

冬の重奏 4 【華子】

翌日、雪子お姉様が帰宅され、両親と顔を合わせた。

お母様はお姉様を強く抱きしめ、

「つらかったでしょう、雪子。何もしてあげられなくてごめんなさいね」

と泣かれた。

お父様も、

「しばらくは、先のことは考えずゆつくり過ごさない。すべて、私に任せなさい」

と、お姉様の肩をたたかれた。

雪子お姉様には予め、お腹の御子の父親が清彰さんであることは隠し通し、孝彰さん・松方家の非によってこちらから離縁を申し出る……という方向で進めることを話していた。

それを聞かれた雪子お姉様は、うつろな面持ちで

「そのようなことが許されるのかしら……」

と、つぶやかれた。

「お姉様と赤ちゃんを守るためには、そうするしかないのよ」

と、月子お姉様は、まるで子供を諭すように言い聞かせた。

清彰さんの遺骨を他の誰でもない雪子お姉様ご自身の手でご供養してさしあげること、また、その忘れ形見である赤ちゃんを誰にも邪魔されず無事に出産しともに生きていくこと……この二つを、必ず実現するのよ、と。

勇作さんも桂木も、私たちに力を貸してくれると約束したのだった。

その後、お父様は各所に連絡をし、松方家との関係について協議を進められた。

数日後、圭介さんとお父上の若田男爵が、震災後初めて関西に來られ、早乙女家に立ち寄った。

連絡を受けた私は、お約束の時間にお車が入ってくる音を聞くと、部屋を飛び出した。

パタパタと階段を駆け降りる私の足音を聞いて、お客様も出迎えに出られていた両親も、一斉にこちらを見た。

圭介さんは、

「ああ、華子さん、お久しぶりです。お会いしたかった」と、銀縁眼鏡の奥の目を細めた。

いつもと変わらない圭介さんの柔らかな笑顔。背筋のスツと伸びた、気品ある佇まい。

「私事です。圭介さん、お元気そうでした。ご無事でよかったです。そう言いながら、涙があふれた。

若田男爵はお父様たちは、「おやおや」というように顔を見合わせて笑った。

圭介さんとの再会が、このように胸がつまる劇的なものになるなんて……

お姉様たちの、愛する人たちのために命を削るようなお姿をみてきたこの数ヶ月、私は人を愛するということの重みをずっしりと心に感じ、これから一生ともに生きていく圭介さんへ想いを馳せることが多くなっていた。

そのお顔を拝見したとき、何かが堰を切ったように胸に流れ込んできたのである。

若田男爵と圭介さんは、震災にまつわる様々なお話をしてくださった。

甚大な被害を受けた華族が多い中、若田家は比較的軽い打撃で済

んだものの、それでも復旧のために大変なご苦労をされているとおっしゃった。

お父様も私も、心から御見舞いを申し上げます。

少し雑談した後、いよいよ話は松方侯爵家の問題に及んだ。

「私どもは、雪子を実家に戻し、松方家とは離縁しようと考えているのです」

お父様がそうおっしゃると、若田男爵は深く頷かれ、

「ええ、圭介から詳しいことは聞き及んでおります。まだ正式な婚儀を終えていない時期に、私どもが口を挟むのも差し出がましいようです……」

と、前置きされた上で

「その方向でお話を進めるのがよろしいのでは……と感じております。松方侯爵は、もともと東京の方ではあまり評判が芳しくなかったのですが、震災後の対応でさらに信用を落とされています。このまま雪子様を侯爵夫人にしておくことは、ご本人にとっても、早乙女家にとっても、あまり望ましいことではないと思っております」と、率直に申された。

黒くたつぷりとした髭をたくわえた圭介さんのお父様は、一代で男爵家を築かれた豪商。

そのご経験や人脈などがそうさせるのか、懐深さや幅の広さを感じさせる方で、私のお父様とはまた違った威厳をお持ちの方である。松方侯爵の無責任さや女性問題などは、客観的に、私たちよりさらに厳しく受け止められているようだった。

侯爵からお姉様を離そうと考えた月子お姉様と私は、若田男爵や圭介さんのお名前を出すことでそれがより強い説得力を持つと計算していたが、打ち合わせしてないはずの若田家が、実際にこれほど同調してくださるのは意外だった。

冬の重奏 5 【華子】

皆での会食の後、私の部屋で圭介さんと二人きりでお茶を飲んだ。

「お義父様が松方家との離縁を勧めてくださって、本当に安堵しました」

と、私が言うと、圭介さんは、

「大変かもしれませんが、これからもお力になります。僕にとっても、早乙女家のことはもう他人事ではありませんから」と、おっしゃってくださいました。

「ところで、雪子お姉様はお元気なのですか？ ずいぶんご心労が重なっていらっしゃるでしょうに」

「……ええ」

私は、少し言いよんだ。

お姉様と清彰さんの関係について、圭介さんにすべてお話するかどうか、まだ決めかねていたのである。

月子お姉様と勇作さんがこの問題に心合わせて関わっているように、私も圭介さんにすべてを知っていただき、その上で一緒に雪子お姉様を支えていたきたいという想いもあった。

私にとって圭介さんは、今では心から頼りにできる大切な方になっていた。

そんなお相手に、何か一つでも隠し事をするのが忍びない……と感じはじめていた。

けれども……まだ、早いかもしれない。

圭介さんは、真実を知ったからと言って態度を変えるような方じゃないと信じている……が、彼がお優しい方ならばなおさら、今よりもっと複雑な想いをさせてしまうことになる。時期早乙女家の当

主として、苦しいものを背負わせてしまふことになる。

……それも、申し訳ない気がした。

そんなことを考えていると、圭介さんが、

「どうかしましたか？」

「あ、いいえ……」

「華子さん、少しお会いしない間に、とても大人っぽくなりましたね」

「私が……大人っぽく……ですか？」

「ええ。初めてのときより、2回目にお会いしたときが……次にお会いしたときはもっと……と、見るたびに素敵な女性になっていく気がします」

想いもしない言葉に、ぱあっと頬が赤くなるのが自分でもわかった。

「そ、そんなことはありませんわ。私なんて、お姉様たちに比べるとまだまだ子供で……」

圭介さんも私に呼応するように頬を染め、慌てたように言った。

「ああ、すみません、つい……」

少し会話が途切れ、二人ともうつむいていた。

「そうだ、大切なものを忘れていた」

しばらくして、圭介さんが思い出したように胸の内ポケットをさぐりはじめた。

そして、銀色のリボンに包まれた、小さな赤い箱を取り出した。

「これ、あなたに……」

「ありがとうございます。今ここで、開けてもよろしいでしょうか？」

圭介さんはコクンと頷かれ、箱をすうつと私の目の前に差し出した。

それは、紅いめのう瑪瑙に美しい貴婦人の横顔が彫刻されたカメラのプローチだった。

「欧州のルネッサンス時代のもの……ということですよ」

「まあ、ずいぶん古いものですね。そんな貴重なものを私がいただいていいのでしょうか」

「もちろんです。あなたに贈り物を……と思っても、正直、何も浮かばなかったのです。僕はそういう感覚が鈍くて……」

「そんなことありませんわ。こんなに素敵なものを選んでいただけるなんて」

「これはひと目見たとき、僕もとても心魅かれて……知人の骨董商に譲っていただいたのです。8月にはもう僕の手元にあったのですが……お渡しするのがずいぶん遅くなってしまったなあ」

圭介さんは頭をかいた。

カメオを手に取り、もしも圭介さんが震災に巻き込まれていたら……と思うと、あらためて身震いした。

冬の陽だまりの下、こうして二人で想いを育むことができる幸福に、心から感謝しなくてはならないと思った。

窓の外は雪が落ちてきそうなほど、気温は下がっていた。

「それにしても、京都の冬は寒いですね」

と、圭介さんがぼつりつぶやかれた。

遠い初夏の日。

あの？桔梗？のことは、私の心の中で日を追って薄れていった。

若田家の訪問によりお父様は松方家との離縁をいよいよ決意され、12月半ば、欧州の侯爵と、鎌倉にいらっしゃる侯爵の母君へ書状をお送りすることとなった。

冬の重奏 6 【正臣】

僕は、雪子さんと清彰さんのことやその後の松方家との離縁騒動などについて、華子さんに逐一お話を伺っていた。

若田男爵家が訪問された際には、会食にも同席させていただいた。雪子さんが、若田男爵たちに深々と頭を下げられ

「この度は本当に申し訳ありません」

と涙した姿に、僕も胸がしめつけられる想いだった。

早乙女家の人たちも、若田男爵も圭介さんも、雪子さんに優しいまなざしを向け、励ましのお言葉をかけられた。

皆、彼女とおなかの赤ちゃんが心安らかに過ごせることを心から祈っているようだった。

華子さんは、若田圭介氏との絆をより確かなものへと育まれている様子だった。

もう、有島千秋のことはすっかりお忘れになったのだろうか……僕の中に、寂しさと、ほんの少しの怒りにも似た感情が湧きあがった。

だがある日……

華子さんが圭介さんからいただいたというカメオのブローチを、嬉しそうにお母上に見せているところに出くわした。

その瞬間、僕の中に憎悪にも似た黒い感情がうずまくのを自覚してしまった。

あたかも海底に沈む何かを見つけようとするように自分の胸の奥深くを探ると、華子さんが手の届かない方になってしまつのを憂う僕がいた。

そして、あれほど意識していた有島千秋のことは、華子さんを責めたい理由の一端に過ぎなかったと思い知ったのだ。

知らず知らずのうちに、僕は、華子さんのことを好きになったのだろうか。

……認めたくなかった。

『ルフラン』というカフェに、行ったのはその翌日だった。

一ヶ月ほど前に開店したばかりだが、静かで雰囲気もよく、何より珈琲のおいしい店だと早くから評判になっていた。

銀座の『プラントアン』を初め有名なカフェがいくつもできて、文人や大学生のたまり場として人気を博していると聞いた事はあったが、実際にそのような店に足を運ぶのは初めてだった。

2度行っただけですっかり常連気取りの田宮という友人が、

「とにかく静かでいい場所なんだ。読書もはかどるぜ」と、強く誘ってきたのだ。

「それに、なにより……その女給にかわいらしい子がいてさ」

そう付け加えて、にやにや笑った。

「おまえ、それが目的なんだろう」

僕はため息をついたが、華子さんのことを考えて鬱々とした気持ちにさいなまれていたので、気分転換のためにも行ってみようかという気になり、その日の夕方、田宮についていった。

『ルフラン』は、赤レンガに囲まれた、こじんまりした洋風の一軒家だった。

重い木の扉を押すと、チリンとベルが鳴った。

薄暗い空間が広がり、蓄音機でバイオリンの曲が流れていた。

テーブル席が10個ほど設けられていて、奥には暖炉もあった。

田宮はさつさと進んで行き、暖炉横の席に腰掛けた。僕も続いて、その正面に座った。

田宮は、僕に向かって目配せをした。

「え？」

きょとんとした表情の僕に、田宮が眉をしかめて

「あの子だよ」

と、小声でささやいた。

ほぼ同時に、一人の女給が盆を持って僕たちの方へやってきた。

「やあ、こんにちは。また来ましたよ」

田宮がはずんだ声で言うと、女給は水の入ったグラスを置きながら、

「おこしやす。まいどおおきに」と、微笑んだ。

年は20代前半、といったところだろうか。

色が白く、小さな丸い顔。つぶらな瞳。

紺の着物に白いレースの前掛けといういでたちが可愛らしく、物腰はおっとりとした柔らかな雰囲気だった。

田宮がこの子に会いたくて通う気持ちもわかる気がした。

「今日は友人の内藤を連れてきました」

田宮が紹介すると、その子は僕と初めて視線を合わせた。

「内藤様、よろしゅうおねがいたします」

暖炉の中で、何かがパチンとはじける音がした。

それが、環との出会いだった。

冬の重奏 7 【正臣】

珈琲を注文した後、

「今、かかっている曲はなんという曲ですか？」

と訊ねると、環は

「ベートベンの、ヴァイオリン・ソナタ第9番？ クロイツェル・ソナタ？ どす」

……すらすらと答えが返ってきたので、驚いた。

僕はその後、一人で『ルフラン』に通うようになったが、それは田宮のように環に会うのが目的というわけではなかった。

胸には華子さんのことが重くのしかかっっていて、授業が終わってもすぐに早乙女邸に戻る気にはなれなかった。

加えて、冬休み前に読破しなくてはならない書物が数冊あったので、あの静かな空間で、誰にも邪魔されずに本と向き合っていたという想いもあった。

一人で初めて入った日も、僕は最初のとくと同じように蓄音機から流れているクラシック音楽の曲名を訊ねた。

環はまた、すぐに答えを返した。3度目からは「今流れている曲は……」と、自分から教えてくれるようになった。

ほぼ毎日のように足を運び、一週間が経過した日。

その時間はたまたま客は僕一人だった。

「チャイコフスキーの？ バイオリン協奏曲？ ……」

環はそう言いながら珈琲を置くと、すぐには去らずいろいろと話しかけてきた。

「内藤はんのように、曲名をお訊ねになる方は初めてどした」

「母が音楽好きだから、僕も小さな頃からよく聴かされていてね。今まであまり興味はなかったんだけど」

「うちもこの頃好きになったんです。ここにいるとたくさん聴けるから楽しゅうて……」

「君はこの近く住んでいるの？」

「いいえ、舞鶴から奉公に来とるんです。この店の支配人の御宅に住まわせてもろてます」

「へえ」

「内藤はんは東京の方ですなあ。言葉でわかりますわ」
チリンとベルが鳴った。

僕たちがそろって顔を向けると、ちょうど田宮が店に入ってきたところだった。

田宮は不機嫌な顔になり、僕のテーブルから離れたところに座った。

環は僕に軽く会釈して、田宮の所に注文をとりに行った。

田宮は彼女の手をつかみ、耳元でコソコソと何か話していた。

少し不愉快な気分になったが、本に集中しているふりをしてやり過ごし、店を出るときに田宮のテーブルに寄った。

「田宮、先に出るよ」

と声をかけたが、彼は聞こえないふりをした。

僕と環が親しげにしていたことがよほど面白くなかったのだろう。「なんだい、怒ってるのかい？」

少しおどけたように笑うと、田宮は顔を赤くし、僕をにらみつけて言った。

「ふん、僕を出し抜こうとしたのか？ 見かけによらず、手が早いな」

僕は、

「そんなつもりはないよ」
と、つぶやいて店を出た。

環は確かに魅力的な女性だと思う。彼女に会いたくて『ルフラン』に通う客がいるのもよくわかるし、僕もそんな彼女と話していて悪い気はしない。

だが、田宮が言うように他人を出し抜いて親しくなりたいなど毛頭思っていないかった。

翌日、大学の構内で田宮が恐ろしい形相で駆け寄ってきて、どなりつけるように言った。

「内藤、おまえ環ちゃんのことを好きなのか？」

「どうしたんだよ、朝からやぶからぼうに……」

「昨日、おまえが帰った後、彼女と話をしたんだ。休みの日に一緒に出かけないかと誘った。そしたら、彼女は言ったんだ……？好きな人がいる？って」

僕はすぐには事情がのみこめず、きょとんとした顔で田宮を見た。すると、田宮は少し勢いを弱めて、静かに言った。

「好きな人がいるから、他の人と外で会うわけにはいかない……と断られたんだよ」

「それで？ 僕となんの関係が？」

「好きな人って誰なの？ と聞いたら、環ちゃんはおまえの名前を言ったんだ」

冬の重奏 8 【正臣】

環が僕に好意を？

すぐには信じられなかった。

『ルフラン』に通い始めて一週間……彼女とは、音楽のことで少し話をしただけだ。

自分の方から、あからさまに彼女への好意を表して見せたり、思わせぶりな態度をとったりしたことはない。

田宮が勘違いしたように、本人にも僕が意識していると思われ、それが影響しているのであれば、とても困ったことだと思った。

僕の方は、彼女に特別な感情は抱いていない。

そして、僕は思ったことを田宮にそのまま言った。

すると、田宮はますます激昂して僕の胸倉をつかみ、

「その気がないだど?! じゃあ、二度と『ルフラン』には行くな。あの子がかわいそうじゃないか!」

通りかかった数人の学友が、

「朝から何やってんだ」

と、田宮を僕から引き離れた。

田宮は手を振り解き、鞆を拾い上げながらぼつりと言った。

「環ちゃん、涙ぐんでたんだぞ。あんな顔、初めて見たよ」

そして、

「とにかく、彼女は苦勞しながら頑張っているいい子なんだ。悲しませるようなことするなよ」

僕はその日を境に、『ルフラン』には行かなくなった。

環がもし本当に僕に好意を持っているのなら、それを安易に受け入れるわけにはいかない。

それならば、田宮の言うように最初から関わらないでいる方がよほど彼女のためになる気がした。

また同時に、田宮が本気で彼女を想っていたことを知り、なんとなく胸が痛んでいた。

大学はすぐに冬休みを迎えた。

年末年始は、東京の実家へ戻るつもりでいた。

内藤家が震災で受けた被害も、今では順調に改善されていると連絡を受けていたが、やはりこの機に元気な両親の顔を見たかった。

そして何より、早乙女家や環の問題から、少しの間だけでも離れたかった。

早乙女家を揺るがした雪子さんの離縁問題は、松方侯爵家からの回答をお待ちしている状態だった。

鎌倉の実家にいる侯爵のお母上に若田男爵が会いに行かれ、早乙女家のご意向をお伝えしたらしい。

母上は動揺されたが、侯爵の女性問題については否定されなかった。

そして、年明けにも渡欧して侯爵と合流するので、正式な御返事はしばらく待つてほしい……とおっしゃったらしい。

また、母上は清彰さんの遺骨をひきとりたいようなそぶりを見せたそうだが、若田男爵は雪子さんの想いを尊重し、お断り申し上げた……と、お聞きしていた。

激動の大正12年が暮れようとしていた。

球
根
へ

次
章

球根 1 【月子】

大正13年の新春。

元旦の早乙女伯爵家には、なんともいえない複雑な空気が漂っていた。

華子の婚儀のための準備が本格的に始まるということ、一方で、雪子お姉様の離縁話が進められているということ……皆、どんな顔をして新年の挨拶をすればいいのか戸惑った。

雪子お姉様は、松方侯爵との離縁については先方からの御返事をお待ちするしかないと静観しておられ、その件についてご自分から口にされることはほとんどなかった。

お父様や私たち周囲の者も、それは同じ想いだった。

何よりお姉様の心を占めていたのは、愛する人が逝ってしまったという大きな大きな喪失感。

そして、それを乗り越えて無事に元気な赤ちゃんを産まなければ……という、悲壮なご決意だった。

出産予定は2月。間もなく臨月に入ろうというところだった。

清彰さんの遺骨は、松方家からの正式な連絡があるまでは引き続き源太の家に安置することとなった。

どこかの寺院などにお預けするより、雪子お姉様が足を運びやすいだろうから……と、私と華子がお父様にお願ひした。

雪子お姉様は毎日お花を携えて源太の家を訪れ、長い時間遺骨の前に座っておられた。

華子と圭介さんの結納の儀は、雪子お姉様の出産後、3月に行われることになった。

年明けと同時に、華子とお母様は準備のため忙しく過ごされるよ

うになった。

内藤正臣さんは、大学の冬休みで帰郷された。戻られるのは1月下旬になるとおっしゃっていた。

私は、できるだけ雪子お姉様のおそばに寄り添うようつとめ、侍女に代わってお世話することもあった。

お姉様に付き添って源太宅に行き、そこで勇作とも顔を合わせた。勇作は東京には戻らず、もとのように『竜心館』に通っていた。隻眼での生活にも慣れ、剣の感も取り戻しつつあったので、小さな子供たちの指導ぐらいはできるようになっていた。

激動の半年だったが、少なくとも私たち二人にとっては、穏やかな状態をとり戻しつつあった。

清彰さんのことを通じて勇作が早乙女の両親に会い、彼の誠実さを少しでも伝えることができたのは、私たちにとって一縷の希望となっていた。

冬の庭木の手入れや防寒のための屋敷の管理など、この時期、源太一人では大変な仕事が多いため、勇作も道場通いの合間を縫って父親の仕事の手伝いをするようになった。

早乙女邸でばったり顔をあわせることがあると、私はホツとし、肩の力が抜けた。

最初の頃は、お母様を初め、侍女たちですら勇作を恐がっているような節があつたが、彼が温厚で実直な男だと知れるようになると、皆彼を頼って様々な仕事を言いつけるようになった。

お母様も、

「勇作は源太に似て手先が器用ね」

と、屈託のない微笑で御言葉をかけてくださるようになっていった。

ある日、華子が友人から美味しい珈琲を出す素敵な店が近くに来たことと聞いてきて、

「ちよつと出かけてみましょうよ」

と、私と雪子お姉様に声をかけてきた。

雪子お姉様は源太の家に行く以外はほとんど外出されなかったが、その日はお天気もよく暖かな日だったので、華子はしつこく誘った。お姉様も、

「華ちゃんがそんなに言うのなら」

と、珍しく笑顔を見せて頷かれたので、近くにあるというそのお店に三人で行ってみるようになった。

『ルフラン』というカフェだった。

球根 2 【月子】

評判どおり、落ち着いた雰囲気、洒落たお店だった。

クラシック音楽が流れていて、店内に漂う珈琲の香りも芳しく、なんとなく心が落ち着いていた。

無理に誘ったけれど、これなら雪子お姉様にとっても少しは気分転換になるだろうと安堵した。

一人の女給さんが来て、注文を訊ねた。

私たちは珈琲とカステラを頼んだ。

しばらくすると、一人の学生と思しき男性が近づいてきて、

「あの…早乙女伯爵のご令嬢さま方ではございませんか？」
と、声をかけてきた。

「ええ、そうですけれども……あなた様は？」

「申し遅れました。私は京都帝大に通っております、田宮と申します。内藤正臣君の友人で、一度だけ伯爵家にあがったことがあるのです。」

このような場所でお会いできるなんて、光栄です。少し御一緒させていただいてよろしいでしょうか？」

と言うと、返事も聞かずに私の横の椅子に腰掛けた。

「まあ、正臣さんのご学友ですの……お会いしたことありましたかね。失礼しました」

華子がそう微笑み返したが、私は三人だけの心地よい時間が邪魔されてしまった気がして、少し不愉快になっていた。

「正臣さんは今東京に帰省されていらっしゃいますわ」

と、素っ気無く言うと、田宮さんは「はい、存じ上げております」

と言い、お腹の大きな雪子お姉様をちらつと見て、

「ご出産なのですね。おめでとunggざいます」

と、慇懃に頭を下げた。

お姉様は少し微笑んで頷いただけだった。

「実は、先月、内藤君と喧嘩してしまいまして……そのまま冬休みになり、会えなくなっていたので少し気になっていたのです」

田宮くんは運ばれてきた珈琲を口につけながら、少し暗い声でつぶやくように言った。

「喧嘩ですの？ まあ……どのようなことで？」

「ある女性が内藤君に想いをよせていて……彼にはその気がないようでしたので、それならばその女性に会うべきではないと僕が苦言を……」

「正臣さんのことを思っている女性が？」

正臣さんは19歳。帝大に通う立派な青年である。普通なら恋のお話が持ち上がるのはごく自然なことだと思われたが、思えばこれまでそのような角度で正臣さんと接したり具体的な話をしたりしたことはなかった気がする。

「大学の方ですか？」

「いえ……実は……」

田宮さんは店内を見回し、入り口近くの窓際にあるテーブル指差して言った。

「あの子なんです」

そこには、可愛い女給さんが佇んでいた。

「この店の方？！」

華子は甲高い声をあげ、すぐに慌てて口を押さえた。

「正臣さんもここにいらしたことが？」

「ええ、しばらくの間、彼も通っていたのです」

「あの方が正臣さんに想いをよせていらつしやるの」

「ええ、そうなのです。けれども、片恋だからと、ずっと胸に秘めているようです」

「でも、正臣さんは知ってしまったのね？」

「はい、僕がついつい感情的になって、彼に詰め寄ったのですか

ら……」

田宮さんは頭をかきながらそう言った。

愚かなことを……と、私は内心ため息をついた。

正臣さんは東京の内藤伯爵のご子息であり、今は学業に専念しなくてはならない大切な年代である。

少なくとも、この田宮というどこか擦れた感じの学友に比べるとずっと真面目で清廉とした学生だし、その気もないのに女給さんとの恋のお話に乗ってしまうなんて、ありえないと思った。

「正臣さんは？その気はない？と言ったのよね」

と、私が言つと、田宮さんはため息をつき、

「はい。けれどもあとでよくよく考えてみると、どうも彼には、別に想う人がいるような気がするのです……」

「まさか」

球根 3 【月子】

「はい、すみません。僕の直感なんです。けれども、あいつが世話になっっている早乙女家の方なら、何かご存知かと……」

私には全く心当たりなどなかった。

正臣さんと一番親しく話をするのは華子だ。だが、華子も、

「それは田宮さんの思い過ごしでは？」

と、首をかしげた。

「はい。本当に考え過ぎかもしれません。申し訳ありません。おかしなことを言ってしまったって……」

田宮さんはそう言い、珈琲をぐいっと飲み干し、「お邪魔してすみませんでした」と立ち上がった。

田宮さんは、そのまま入口の方に進んで、財布を取り出した。

正臣さんに想いを寄せていると言う女給さんが、にっこりと微笑んで応対していた。

「本当に可愛い人ね」

と、雪子お姉様がつぶやいた。華子は目を見開き、少しおどけたように、

「正臣さんも隅に置けないわね」

女給さんの屈託ない態度に反し、田宮さんは、どこことなくおどおどして、気まずそうな雰囲気だった。

私はその様子を見て、彼が単なるおせっかいからではなく、彼女に特別な想い入れがあったからこそ、正臣さんに「その気がないなら会つな」と進言したのだろう……と思った。

彼が店を出るのと入れ替わりに、一人の中年男性が店に入ってきた。

鼻の下に髭をはやし、シルクハットを目深にかぶり、光沢のあるスーツを着ていた。

そして、テーブルにかけることなく、ゆったりとした歩調で店の奥に進んだ。

正臣さんに想いを寄せているという女給さんが、はっとした表情になり、その人を追うようにあとに続いた。

二人はそのまま、店の隅でひそひそと話を始めた。

紳士は店内を見回したり、指差したりしながら、話しをしていた。「このお店の支配人さんじゃないかしら」

私がそう言うと、お姉様と華子も「そのようね」と頷いた。

女給さんは、何度も首を縦に振りながら耳を傾けていたが、ある瞬間、そこにふっと別の表情がよぎった。

その顔……

正臣さんが京都に戻ってこられたのは、私たちが『ルフラン』に行つて、一週間ほど過ぎた頃だった。

私たちは、正臣さんに『ルフラン』での出来事をお話するかどうか迷っていた。

仲の良い華子にさえこれまでご本人から何もお話しなかったということは、よほど些細なことだと受け流していたか、そうでなければ、私たちには触れられない出来事だったか……

いずれにしても、私たちがあの女性のことをとりたててお話しするのははばか憚られる気がした。

何より私がひっかかっていたのは、あの支配人と思しき人といった時の、女給さんの様子だった。

一瞬よぎった彼女の表情。

少し頬を赤らめ、うつとりとした熱っぽいまなざしでその紳士を見上げたのだった。

それはまさしく、恋をした女の目だった。その艶っぽさ、なまめ

かしさ……

そこにはつい数分前に、田宮さんから聞かされた？正臣さんに片想いをする健気な女性？はいなかった。

彼女の中に、紛れもない一人の女性としての熱が存在していることを察知してしまったのだ。

私は、勇作と知り合う前、たくさん恋を経験した。

若さにまかせた激しい熱病のようなものもあれば、互いにかけてひきを楽しむ大人の関係もあった。

そのような経験の積み重ねが、男女のえもいわれぬ心の機微を敏感に嗅ぎ取らせてしまうのかもしれない。

彼女が田宮さんに対して「正臣さんが好き」と口にしたことに嘘はなく、その変化はわずかな間に生じたものかもしれないが、その瞬間の彼女のうるんだ目から発せられる何かは、私の背筋を凍らせた。

それは、少なくとも今の私の周囲では感じることはない、甘く濃んだような危険な予感だった。

球根 4 【正臣】

僕が京都に戻ったのは、1月の終わりだった。

早乙女伯爵家の方たちに新年のご挨拶をし、（震災後）なんとかもとの暮らしに戻りつつある実家や両親の様子をご報告した。

三姉妹もにこやかに迎えてくださり、何事もなかったかのように振舞われた。

そう、三人は『ルフラン』に行き、田宮や環と会っていたことをすぐには僕に話さなかった。

僕がそれを知るのは、しばらく後だった。それは、あの？事件？が起こった夜。

事件の10日前。

僕は、久しぶりに大学に顔を出した。

田宮は休んでいて、顔をあわせることはなかった。帰り道、僕は『ルフラン』とは逆の方向に歩いた。

帰省している間も、華子さんのことや環・田宮のことはずっと考えていた。

華子さんは、結納の儀に向けてお忙しく過ごされていた。

華子さんは、どんどん綺麗になっていく。

昨年の春、美しい女性に成長した華子さんと再会してから、僕はずっと自分の想いに気づかなかった。

気づかないふりをしていたのかもしれない。

僕の中に芽生えた恋心は、自覚することのないまま、親友の有島千秋と華子さんが心を通わせたあの頃、胸の奥深く封じ込まれたの

だ。

千秋と華子さんが結ばればよかったのにと、ずっと思ってきた。今でも思っている。

だからこそ、若田圭介氏と華子さんの婚約に苛立ちや寂しさを覚えたのは、千秋の友人としての感情だと思い込もうとした。

今、それが僕自身の嫉妬によるものだったと自覚したところで、何も変わらない。

もしかすると、相手が千秋だったとしても、結局、僕はこんなふうに暗い感情にさいなまれ、自分の弱さを呪っていたかもしれない。いずれにしても、どうあがいたって、華子さんの心を覆すことは無理だと充分わかつているのだ。諦めるしかないのだ。

そして、華子さんが千秋を失ったことで強くなり、今新しい人生に羽ばたこうとしているように、僕もまた、この失恋を糧にできるような強い大人になりたいと思った。

京都に戻って華子さんのお顔を見たとき、胸が騒がなかったといえは嘘になる。

それでも、僕の中には、以前にはなかった前向きで潔い想いがあった。

今は、それで充分なんだと、自らに言い聞かせていた。

環のことは……

球根 5 【正臣】

環のことは、華子さんのことより多くの時間を費やして考えたかもしれない。

僕と彼女が話をしたのはほんのわずかな時間だったのに、本当に彼女は僕のことを好きになったのだろうか。

直接聞かされていないので、最初は実感がわかなかった。

ただ、あの田宮の様子から、彼女がそう言ったことは嘘ではないのだろう。

田宮は一見で軽薄に見える嫌いはあるが、反面、単純で正直だ。僕を陥れたり、からかって楽しんだりするような悪趣味な人間でもない。

環という子は、思えば、本当に可愛らしかった。

好きだと言われれば悪い気はしないし、もし僕に華子さんへの想いがなかったらすぐにその言葉に乗って、田宮を裏切って、今頃は彼女と親密になっていたかもしれない。

華子さんのことがなかったら……

田宮のことがなかったら……

ところが、僕はある時ふっと、すべてをなかったことにして、環に会いに行ってみようかと思ってしまった。

そうすれば、華子さんのことも忘れられるかもしれないという、想いもあった。

僕が帰省している間、環のことをずっと考えていたのは、言い換えれば、そんな葛藤が生まれてしまったからだ。

それは、華子さんが千秋のことを乗り越え、伯爵家の未来をかけて若田圭介さんと婚約したのとは比べ物にもならない、卑怯で愚劣な欲望。

僕は、それを何度も何度も打ち消した。失恋よりもずっと情けない、許せない感情だった。

大袈裟のようだが、決してそんな暗い自分に飲み込まれてはいけな
いと、戦った。

だからこそ、華子さんと再会したとき、環のことは抜きにしても
自分が少し前向きでいられたことに、僕はひとり胸をなでおろした
のだ。

『ルフラン』には行かない。僕はより強く決意していた。

だが、その日、ばったり会ってしまったのだ。
環に。

彼女は、常連客のところに洋菓子を配達した帰り道だった。

「まあ、内藤はん、おひさしぶりですなあ。なんでお店に来られへ
んのですか？」

と、微笑んだ。

長くおさげにしていた髪をバッサリ切り、肩より少し上のおかつ
ぱ頭になっていた。

日本人形のようなすつきりとした雰囲気、彼女の愛らしい顔立
ちをよりひきたてていた。

球根 6 【正臣】

「東京に戻っていたんだ」

僕は小声で言った。

「ああ、ご実家に……」

その後、しばらく沈黙が続いた。僕はなんとなくいたたまれないような想いになり、つい口を開いた。

「髪、切ったんだね」

「まあ、嬉しい！ 気づいてくれはったんだすなあ」

環は顔を赤らめた。

内心、余計なことを言ってしまったと、後悔した。

環はまっすぐに僕を見て、言った。

「内藤はん、実は、相談したいことがあるんどす」

「え？」

「もしよかったら、明日にでも、お時間いただけまへんか？」

「相談って、どんなことだい？ 事によっては、僕なんかではお役に立てないかもしれない」

「あの…… 田宮はんも関係していることなんどす」

環は少し節目がちに、暗い声で言った。

環から相談があるともちかけられた。そして、それが、田宮のとだと言われた。

……今の僕には、それを無下に断ることなどできなかった。

その話には、僕も関わっているかもしれない。

知らないところで話が進むくらいなら、もしも彼女の口から僕の名前までとびだすようなら、その機に自分の気持ちを話した方がいいかもしれない。

少し考え込み、僕は言った。

「今からなら、なんとか時間あるけれど」

このことを持ち帰り、「どのようなことだろう」と、一晩悶々と

するのは耐えられない。いっそ、この勢いで全部聞いてしまい、できれば今日にでも終わらせたいと思ったのだ。

「よかった。私も6時までには店に戻らなくていいんどす」

『ルフラン』では話しづらいと言っているので、僕たちは近くにある公園に足を向けた。

環の話はあまりにも衝撃的なことで、僕は驚きで言葉を失った。

「うち、お腹の中に、ややさんができてしもたんどす」

球根 7 【正臣】

「赤ちゃんができた……って、君……」

最初は、田宮が父親なのかと思ったが、どうも違う。

環は苦悩の表情を浮かべ、

「すんまへん。父親の名前はどうしても言えへんのどす」

環は妊娠したことに戸惑い、つい田宮にそのことをもらしてしま
った。

田宮は驚き、激しく動揺したという。無理もない。

彼は父親が誰かと詰問してきたが、環は頑として明かさなかった。
だが、後日、彼は想いも寄らないことを彼女にもちかけた。

「どうせ父親のやらん子を産むことになるんやったら、自分がやや
さんの父親になるいうて……大学を辞めて働くさかいに、所帯をもと
う言い出したんどす」

そんなことはできるわけないと環が強く抵抗すると、田宮は再び
相手の男は誰だか詰め寄った。

「田宮はん、えろう取り乱して、自分の想いが受け入れてもらえへ
んなら、そんな男、自分が殺してやるいうて」

環はそこまで言うて、顔を伏せてわぁと泣き出した。

「けれど、父親はなんと言ってるんだい？ 名前は明かさずとも、
せめてそれがわからないことには、話が進まないよ」

環の肩に手をかけ、静かな口調でそう言った。

けれども、ふつつつと苛立ちが湧いていた。

僕を好きだと言ってみたり、どこかの男性の子をみごもったり、
なんて節操のない人なんだ！

目の前で泣いている女性、しかも身重だと言っている女性に、強
い言葉を投げつけるわけにはいかないと、必死で言葉を呑んだ。
「相手の人は知ってるのかい？」

環は首を横に振った。

「まず、田宮の問題に置いておいても、これからどうするか、しっかりその人と話すべきだよ」

「そうはいきまへん」

彼女はその先をなかなか言おうとはしなかったが、僕は察知した。相手は、住む世界が違う人？ または、家庭がある人？……いずれにしても、子供ができてしまったことを話し、二人の未来について前向きに語り合える相手ではない、ということだろう。

お互い、愛し合つてのことなのだろうか。それとも……

僕はその先を聞くのが恐ろしかった。というより、もつと正直に言えば、これ以上詳しいことを聞いてしまい、厄介な問題に巻き込まれるのは嫌だった。

自分が関わっているかもしれないとここまで来たものの、僕自身は全く関係がなく、しかも、思ったよりずっと重苦しく深刻な状況に、本当に困惑していた。

「どうしても相手の名前を明かしたくないというなら、それは仕方がない。僕にできることは、今感情的になっている田宮と話をするくらいだが……」

「ええ。うちもそうしていただけたらとの想いで、恥を忍んでお話ししたんです。田宮はんは将来のある身、うちなんかのためにすべてを捨てるなんて、絶対にあきまへん」

「うん」

「近いうちに『ルフラン』は辞めるつもりです。田宮さんには、うちは田舎に帰って、その相手の人と所帯をもつ言うつた……そないなふうに伝えてくれまへんか？」

「君が自分の口で伝えればいいじゃないか」

環は不安げに僕を見た。

「恐いんです。あの人に会うのが……だからこの2、3日は、あまりお店には出ずに、外回りさせてもらてたんです」

確かに、先月僕に環のことで噛み付いた時も、田宮の態度は尋常ではなかった。

それだけ環のことが好きなのだろうと思い、僕もいろいろ考えさせられたのだが、その彼女がどこかの男の子供を妊娠した……彼の動揺は、想像するに余りある。

「相手を殺す」とまで言っているのだから、確かに、少し落ち着くまで環は会わない方がいいかもしれない。

「けれども君、それは田宮を落ち着かせるためのウソなんだろう？ 本当は……」

「ええ。ややさんは、早いうちになんとかせなあかん思ってます」僕は一瞬、その言葉の意味を理解できなかった。

「田宮はんはそれにも反対して……私の体にもしものことがあったらいかなって……」

そこまで聞いて、やっと気づいた。

……「なんとかせな」は、「子供を闇に葬る」という意味なのか？

僕の脳裏に、雪子さんの姿が浮かんだ。

雪子さんのお腹の御子も、決して父親の名を明かせない不義の子である。

だが、彼女は亡き人との絆を信じ、守り、証明するために、母になるという崇高な使命をまっとうしようとしている。必死で、哀しみと戦っている。

「ではこのへんで、僕は失礼するよ。田宮に会ったらさっきのように伝えておくから」

そう言って、立ち上がった。

一刻も早くここを立ち去りたいと思った。

虚しさや憤りの混ざった黒い塊が、口から飛び出しそうだった。「すんまへん。よろしゅうお願いいたします」

環はにっこりと笑った。冬の斜陽に照らされた、その屈託のない顔。

さつきまで、田宮が恐いと泣いていたんじゃないのか？

僕は鳥肌がたった。

彼女は最後まで、相手の男性との愛情や将来について触れることはなかった。

しかも、心の中では墮胎すると決めている。

それゆえ、今の彼女にとって厄介なのは、田宮の存在であって、妊娠したことそのものではないのだ。

「恥を忍んで」と言っただが、妊娠したことは真の意味で彼女にとって本当に恥ずべきことはないのだろう。

だから、何度かしか顔をあわせていない僕さえも、簡単に相談相手に選べるのだ。

年末に僕のことを好きだと言ったのも、きっと今回のように田宮を遠ざける方便だったに違いないと思えた。

それに振り回されケンカまでした僕と田宮、なんて愚かだ。

彼女は、僕などが考えていたよりずっと成熟していて、醜い部分をもった大人の女だったのだ

たとえ一時でも、彼女のことや悩んだ自分が情けなかった。

今日、のこのこついて行って相談に乗ってしまったことを、悔やんだ。

だが一方で、彼女が伝えてくれと言った嘘を、田宮にそのまま話さなくてはならないと思っていた。

田宮もまた、彼女に振り回された被害者の一人だ。

早く忘れたほうがいい。これ以上彼女に関わって、僕のようにその本性を思い知らされるようなことになれば、傷はもっと深くなる。

僕はそんなふうに想いを張り巡らせ、道を急いだ。
早く早乙女邸に帰って、華子さんたちのお顔を見たいと思った。

球根 9 【正臣】

それから毎日、僕は学内で田宮を探した。

けれど、彼はずっと休んでいて、姿を現さなかった。

寮にも長いこと帰った形跡がないらしく、みんな心配していた。

あとでわかったことだが、彼はその間ずっと、環の周辺を調べ回り、お腹の子の父親が誰なのか突き止めようとしていたのだった。

僕はもちろん、二度と『ルフラン』には行かなかった。

ある日の昼食後、華子さんが声をかけてきた。

「最近、元気がないようだけれど、何かあったの？」

早乙女邸では普通に振舞っているつもりだったのに、華子さんにそう言われてしまい、どきつとした。

「ええ、ちょっと気になることがあるので……でも、大丈夫です」

華子さんは「そう？」と微笑んで、お茶のおかわりを注いでくれた。

「今日も雪子さんと月子さんは、源太の家に？」

「ええ、そうみたい。来週にはもう臨月に入るから、あまり動けなくなるし」

「そうですね」

僕はさりげなく話をそらし、華子さんはそれに答えて、お姉様方のことやご自分の近況について話を続けられた。

最近、こんなふうに二人でゆっくり語り合うことはなかった。

冬の陽だまりの中で、花のように輝きを放ちながら笑う華子さんを見ていて、僕は本当に落ち着き、心が洗われるようだった。

一時期僕を苦しめた、嫉妬や寂しさは薄れていた。

華子さんがいつまでもこんなふうに幸せそうに笑っていてくださったら、それでいい。

それから3日後のことだ。

事件の報は、その夜、僕の部屋を訪ねてきた月子さんによってもたらされた。

月子さんはその日、勇作さんの『竜心館』に差し入れを持って行かれていた。

「ねえ、田宮和彦って、正臣さんのご学友の田宮さんよね？」

「田宮？ ええ、そうですが……」

月子さんの口から、田宮の名前が出たことに、ひどく動揺した。

「今、帰宅している途中に知ったの。大学の近くで、事件があったのよ」

「事件って……いったい何かあったのですか？」

田宮や環の顔を浮かび、心臓の鼓動が高鳴った。

「落ち着いて聞いてね」

月子さんは一息つき、

「『ルフラン』というカフェの支配人を、刃物で刺したの。刺された人は……亡くなったわ」

「田宮はん、えろう取り乱して、自分の想いが受け入れてもらえへんなら、そんな男、自分が殺してやるいうて」

環の言葉が甦った。

『ルフラン』の支配人……つまり、その人がお腹の子の父親？

「僕がもつと真剣にあいつを探し、ちゃんと話をしていれば……」

そう言つて頭を抱える僕に、月子さんは「落ち着いて」と、椅子に座るよううながされた。

そうして、想いもよらないことを話し始めた。

「実は私、『ルフラン』に行ったことあるのよ。お姉様や華子と……」

そこで田宮と会い、僕や環の話を聞かされたのだという。

僕の中ではこれまで『ルフラン』と『早乙女伯爵家』、『環』と『華子さん』は、対極にあり、縁もゆかりもない、別々の世界に存在するものだった。

それが、僕の知らないところで交錯していたなんて……

胸が苦しかった。

「申し訳ありません。ご心配をおかけして……」

「いいえ、構わないのよ。それより、あなたもこの事件に何か関係があるの？ さつき？ 僕がもつと真剣に……？ って……」

僕は10日ほど前に環から聞かされたことを話した。

「田宮は大学を休んで、相手の男を捜していたのですね……僕はただ、ふさぎこんで旅にでも出ているのではと、安易に考えてしまっていた」

「正臣さんのせいじゃないわ。たとえ会えたとしても、あなたの説得に耳を傾けたかどうか……あなたも巻き込まれていたかもしれないわ」

「それにしても、支配人が本当に環の相手だったのでしょうか。今、彼女はどこにいるのでしょうか」

「私たちが店に行ったあの日……」

月子さんは、店に現れた支配人と環が語り合う姿を目撃していた。そしてそのときの彼女の様子から、二人がただならぬ関係である

ことを察知していたのだという。

「直感したの、正臣さんは関わらない方がいいと。あなたたちの手に負える人ではないと……」

月子さんがとっくに見抜いていた彼女の本質に気づかず、一時は華子さんを忘れるために会いに行こうとまで……僕は、なんて愚かだろう。

「それで……環は、彼女はその時、側にいたのですか？ 今どうしているのか、聞かれましたか？」

月子さんは首を振った。

「事件現場は『ルフラン』の前の道だったそうよ。すぐに警察や救急車が来て、騒然となったらしいわ。そこに彼女がいたかどうかは、わからない」

「田宮は警察に？」

「ええ。その場に呆然と立ち尽くしていたそうよ」

二人の刑事が僕を訪ねてきたのは、その翌日だった。

田宮は、動機について黙秘しているらしい。

何か心当たりがないか、彼と交流の合った友人に聞き込みをしているとのことだった。

刑事たちは応接室に通され、早乙女伯爵と月子さんも同席されることになった。

田宮が口を割らないのは、環を守ろうとしているからだだろう。それなのに、ここで知っていることをベラベラ話していいものだろうか。

……僕は迷い、すぐに答えることができなかった。

だが、刑事はあっさり言った。

「彼が、島村環と言う女給に想いを寄せていた……という話があるのです」

「はい、そのようでした」

「君はそのことで、田宮とケンカになったことがあるそうですね」

警察は、そのようなことまで調べているのか。だから、僕に会いに来たのか……

「はい。彼は僕たちに関係があると疑っていたようですが、僕にそんな気はないと知ると、それならば『ルフラン』には行くな。彼女に近づくな、と」

「ずいぶん嫉妬深い男のようですね」

刑事の一人がため息をついた。

「今回の犯行も、田宮が、彼女と恋仲にあつた支配人の黒木さんに嫉妬したからだという人もいるのですが……」

「その支配人と女給は、本当に関係があつたのかね？」

伯爵が口を挟んだ。刑事は……

「はい。被害者の黒木さんには妻子がありますから、本人たちはひた隠しにしていたようです。が、他の従業員たちには以前から気づいかれていたようですね」

環が妊娠していたことは、知られていたのだろうか？

「それで、島村環さんは今どこに？」

「行方不明です。下宿先の黒木邸はもちろん、舞鶴の実家にも戻っていません」

「あの……実は一週間ほど前、彼女とばったり会ったのです。そのとき……彼女は『妊娠している』と言っていました」

「それは本当ですか？！」

「はい。ただ、その時は父親の名前は明かせないと……」

刑事たちはボソボソと小声で話し合い、やがて、立ち上がった。

「貴重な情報をありがとうございます」

警察の聞き込みの結果、環は事件のあった日、ある産院で堕胎手術を受けていたことがわかった。

その産院で事件を知り、恐ろしくなつて親しい友人のところに転がり込み、身を潜めていたということだった。

その、身を寄せていた友人……それも、男だった。

僕は、「あなたの手に負える人じゃない」という月子さんの言葉を思い出し、身震いした。

田宮は、そんな女のために殺人という大きな罪に手を染め、すべてを失った。

拘置所の中で、彼は今どんな思いでいるだろうか。

僕が、彼のためにできることが何か一つでもあるだろうか。

様々なことに想いをめぐらせ、悪夢を見ているような重苦しい日々が続いた。

僕の中に、この環と田宮の事件は大きな陰りを落とした。
けれども一方で、その対極にある早乙女三姉妹の生き方が、ひと
きわ神々しい光を放ちながら僕の胸に迫った。
命がけの純粹な愛。力強い絆。誇り高い決心。
僕の憧れ。

松方侯爵家からの返事が届くのは、田宮の事件から十日ほど過ぎ
た頃だった。雪子さんは、臨月に入っていた。

次章
『

虹光る』へ

虹光る 1 【雪子】

孝彰さんが欧州に行かれて、八カ月が経っていました。

時折、近況報告や妊娠生活を氣遣う内容の御手紙が届きましたが、そのような手紙を広げるとき、私はただただ申し訳ないという罪の意識に強くさいなまれ、心安らかに向き合うことなど到底できませんでした。

孝彰さんのお優しい愛情に包まれ幸せに過ごしていた日々は、今では遠い夢のようでした。

けれども、たとえどのようなことがあっても、一度は夫婦としてご縁し、慈しんだ方。

妻として心から信じお慕いした幸福感も、裏切られたとわかつたときの絶望も、すべて私の中から消えてしまうことはありません。

その夫と、いよいよ本当に別離する時がやってきたのです。

お父様たちの予想に反し、離縁の申し出はあっさり受け入れられました。

私が侯爵家を出ること、あの女性を正式に夫人としてお迎えになるおつもりで、喜んで離縁を決意されたのか。

それとも、さらに帰国を延期されるとおっしゃっていたから、こちらでのすべてを清算し、あちらで新しい出発をしようと思われたのか。

いずれにしても、なんの末練も躊躇もなくご決断されたことに、私への愛情がもはや微塵も残っていなかったことだけは、はっきりと証明されたのでした。

けれども、お腹の子供のことも、嘘のようにすんなり諦めてしま

われたのです。

『子供は、早乙女伯爵の庇護の下で、立派に育ててほしい』
『できることなら、いつの日か、会わせてほしい』

そのような短い文言が添えられておりました。

お父様は、このあまりにも簡潔な受諾の知らせに、

「かえって怒りを覚える」

と、おっしゃいました。

清彰さんの血を引くこの子を、孝彰さんが欲したときはどうすばいいのか。

そのような不安が重くのしかかっていた私にとっては、一番恐れていたことが回避され胸をなでおろすのと同時に、それがあまりにも不自然に感じられ、どうしても心から喜ぶことはできませんでした。

けれども、今の私にとっては、清彰さんとの赤ちゃんを産むことだけがすべてなのです。

立ち止まっている余裕など、ありません。

松方侯爵夫人という立場から解き放たれ、赤ちゃん二人自由に生きていける。

この大きな変革に心から感謝し、私を支えてくれた人たちの想いにお答えできるよう、前に進むしかないのです。

希望を持って。

虹光る 2 【雪子】

清彰さん……

私はあの方のことを思ったりその御名前を口にしたりする度、激しい胸の痛みと、同時に、頭がしびれ夢の中にいるような不思議な感覚に見舞われます。

遺骨の箱を見つめ、私は毎日毎日泣き暮らしておりました。

目の前にぽつりと置かれた小さな白い包み。今となつては、これだけがこの世に存在するあの人のすべて……信じたくない。夢であつてほしい。

あの方が逝ってしまったことを、私は今でも受け入れることができませんでした。

私が心から愛し、すべてを捨ててまで共に生きたいと願った運命の人。

赤ちゃんが授かっていなかったら、私はすぐにでもあの人の後を追つたでしょう。

心が折れそうになるとき、私を励ましてくれるように、赤ちゃんは決まって元気に胎動しました。

あの人の死がもたらした悲哀を乗り越えさせてくれるのは、この生が運ぶ無上の歓喜しかない。

それならば、今度こそ私は、この出産に私の生命のすべてを賭けて臨むしかない……何度もそう言い聞かせました。

赤ちゃんをこの手に抱く瞬間を思い浮かべたとき、母になる喜びと誇りが甘く胸に広がりました。

それこそが、それだけが、闇を破り、この魂に天から降り注ぐ虹彩でした。

陣痛が訪れたのは、2月14日の深夜でした。

それは、私の体の奥深くから遠雷のように響き始めました。

ベッドの中で15分の間隔で痛みが訪れているのを確認すると、私は起き上がってすぐにお母様の部屋を訪れました。

出産は病院ではなく、この早乙女邸で……と決めていました。

お母様は少しも慌てることなく、桂木を呼び、産科医の瀬川先生へ連絡するよう申し付けました。そして、

「いよいよね。大丈夫よ。私がそばにいますからね」と、微笑んでくださりました。

お父様や月子・華子、正臣さんまで起き出してきて、私の体を気遣い、様々な激励の言葉をかけてくれました。

ほどなく、瀬川先生がお越しになりました。

虹光る 3 【雪子】

朝方にかけて、陣痛の間隔は少しずつ縮まっていき、それにとともに痛みも強くなっていきました。

けれども、御産の進み方が遅かったので、瀬川先生は「長くかかるかもしれない」とおっしゃいました。

陣痛の波が襲ってきて、体が裂けてしまいそんな強い痛みで歯を食いしばって耐えるとき、すぐるような想いで清彰さんの面影を求めていました。

『僕はこれからもずっと、お側にいます。いつまでも』

最後のお手紙の言葉を何度も思い返しました。

水仙の花の香りを、湖に反射する陽光を、夕焼けに映える書齋を、蛍の幻想的な輝きを……

目を閉じれば、切ない眼差しも、柔らかな笑顔も、力強く暖かい掌も、確かに私の側にありました。

すべてが、昨日のことのように鮮やかにかけぬけていきました。

ああ、あなたはこんな近くに、いてくださったのですね。

痛みの波が通り過ぎると、私は半ば気を失ったようにぐったりと動けなくなり、夢と現実の間を彷徨いながら朦朧としていました。

頑張ろう。もうすぐ、赤ちゃんに会えるのだから。

清彰さん、見守っていてくださいね。

私に、力をくださいね。

声にならない声で何度もそうつぶやきながら、容赦なく訪れる激痛と戦いました。

そして、とうとう、その瞬間が訪れました。

虹光る 4 【華子】

雪子お姉様の出産は、難産だった。

陣痛が微弱で、赤ちゃんがなかなかおりてこなかった。

丸一日痛みと戦い、日付が15日に変わっても、まだ産声は聞こえてこなかった。

月子お姉様も私も応接室に待機し、「どうか母子共にご無事で」と、祈り続けていた。

このところ心労続きで、体力も消耗していたお姉様にとって、長時間のお産は命にも及ぶ危険と隣りあわせだったのだ。

お母様は瀬川先生と共にお姉様に付き添い、声をかけたり、手を握られたりして励まされていた。

お父様は書斎にこもったきり、ほとんど出てこられなかった。

私と月子お姉様は、いつのまにか、応接室の長椅子でうとうとしていた。

冬の早朝。身にしみるような静寂。やがて……

静まり返った早乙女邸に、赤ちゃんの産声が響き渡った。

私たちがお姉様の部屋にかけつけると、ちょうど扉を開けて出てきた瀬川先生が、

「おめでとうございます。元気な若君でございます」と、微笑みながらおっしゃった。

雪子お姉様の隣に、真っ白な産着に包まれた小さな赤ちゃんが寝かされていた。

「おめでとうございます」

月子お姉様はそうつぶやいて、雪子お姉様の手を握った。

「お姉様……よかった。おめでとうございます」

私もやつの想いで声をおかけし、ひざまずいて赤ちゃんの小さな小さな手にそつと触れた。

お姉様は私たちを見つめ、たおやかに笑みを浮かべた。そして、ホ口ホ口と涙をこぼされた。

その面持ち……潤んだ瞳と、乳白色の頬にバラの花びらを浮かべたような血色。

大きな使命を果たされた安堵と歓喜に光り輝いていた。

虹光る 5 【華子】

赤ちゃんは「光」と名づけられた。

清彰さんが、「子供が産まれたら、名前は「光」…」、
と、最後のお手紙に託された御名前だった。

光の誕生で、早乙女家にはひと足先に春がきたような、華やいだ
空気が広がった。

お父様とお母様は、ひまさえあれば雪子お姉様のお部屋を訪れ、
競うように初孫を抱いて目を細められた。

若田男爵家や、正臣さんのご実家である内藤伯爵家を始め、様々
なところからお祝いも届いた。

けれども……

雪子お姉様はお体の回復が遅く、産後の状態は決して安定したも
のではなかった。

お祝いに駆けつけてくれたお客様の前では、無理して起き上がり
笑顔でお話してされていたが、そのように無理をするとひどいめま
いや頭痛に襲われる。

出血も長く続いていたため、毎日瀬川先生に来ていただくてはな
らない、という状態だった。

「来月の華ちゃんの結納には、光と一緒に参列したかったけれど…
…このような体では、無理かもしれないわね」
そう言って、寂しそくに微笑まれた。

私と圭介さんの結納は、一カ月後に予定されいた。

その頃、私たちの知らないところで、月子お姉様と勇作さんの運命もまた、大きく動き始めていた。

虹光る 6 【月子】

一人の紳士が、源太の家を訪れた。

「小島勇作君は、こちらにいらっしゃいますか？」

たまたま早乙女邸から戻ってきた勇作と私が、玄関先でその人と出くわした。

「井上先生？」

井上栄一郎先生……その人こそ、勇作さんが東京でお世話になり、清彰さんの最期に関わってくださった恩人だった。

「東京での仕事が一段落してね。こつちに所要もあつたし……」

帽子をとりながら、井上先生はふと、奥の仏壇の方をみやった。そこには、清彰さんの遺骨が置かれている。

「大変だったね」

先生はそうつぶやかれると、遺骨の前に進み、お線香をあげて手を合わせられた。

少し落ち着いてから、

「井上先生、こちらは……」

勇作は、私を先生に紹介した。

「松方清彰さんが託された御手紙のお相手・雪子さまの妹にあたる、早乙女月子さんです」

「井上先生、はじめまして」

「井上と申します」

先生はにつこりと微笑み、「お会いできて光栄です」と、握手を求めてこられた。

勇作から聞かされていたとおり、飾り気のない、豪放な雰囲気の方だった。

勇作と私は、京都に戻ってから今日までのことを、井上先生に話

した。

そのほとんどが早乙女家にまつわることだった。

清彰さんと雪子お姉様のことや松方家との離縁のこと、そして光の誕生について等、私たちは包み隠さず、すべてをご報告した。

井上先生は「うんうん」と、一つ一つに力強く頷かれ、なんとか清彰さんのご遺志に違わずに運ばれていることに、

「よかったな」

と、安堵の表情を浮かべられた。

虹光る 7 【月子】

少し遅れて帰宅した源太が、井上先生に深々と頭を下げ、何度も何度もお礼を言った。

「立派な息子さんだ。誇りにしてください」
先生のそんな言葉に、源太は涙ぐんだ。

「ところで……」

やがて、井上先生はあらたまったお顔になり、私たちを代わる代わる見つめて、切り出された。

「話の経緯から察するに、君たちは、ただの主従関係というわけではなさそうだな」

私も勇作も、ご報告の際に、あえて私たちの関係には触れなかった。

だが、私は井上先生にそれを隠すつもりも毛頭なかったし、勇作もまた同じ気持ちだったようだ。

「はい、先生のおっしゃるとおりです。僕たちは、互いに想いあっています。一緒になりたいと思っております」

すぐにそう言った。

「そうか……」

井上先生は少し考え込まれ、源太の入れたお茶を手を取った。

源太も息を吞んで、先生の言葉を待っている。

「それは大変だな。こんなことを言うのもなんだが……反対されるのは目に見えている」

「はい、承知しております」

先生は、私の目を、射るように真っ直ぐにご覧になり、

「あなたも、強く決心しているのですね？ 後悔しませんか？」

と、お訊ねになられた。そして、

「私は、この小島君を買っている。この男ほど実直で、正義感にあふれ、清しい気性の者はそういない。気が利くし、頭も切れる。剣術にも長けている。だが……」

少し間を置かれ、

「苦労しますよ。それでもいいのですか？」

私は、深く頷いた。

「はい。覚悟しております」

私は、瞳をそらさず、強い決意を込めて先生を見つめた。

「そうですか」

先生は柔らかく微笑まれ、湯飲みを置くと、ポンツと膝を叩かれた。

そして、想いも寄らなかつたお話を始めた。

「小島君に、あらためて僕の手伝いをしてほしいんだ」

「お手伝い……と、申しますと？」

「君は資格を持たないから医療行為はできないが、それ以外の諸々の作業を手伝ってくれる、いわば助手のような立場で、僕のところに来てほしいのだ」

虹光る 8 【月子】

私たちは顔を見合わせた。

先生の？僕は小島君を買っている？というもったいないお言葉が、現実味を持つて甦った。

「僕は今のところ、軍医としてあちらこちらを転々としているが、今年の夏あたりから満州に赴任するかもしれないという話が持ち上がった。震災後の東京では、君の仕事振りは非常に頼もしかった。そんな君に満州へ同行して手伝ってもらえれば、心強いと思つてねむろん、渡航費から生活費まで、僕がきちんと保障するし、給料も払うよ」

心が騒いだ。

震災後の東京……勇作を送り出し、祈るように暮らしていたあの短くも辛い日々。

また、私たちは離れ離れに？

「先生……」

ほどなく、勇作が口を開いた。

「僕は、井上先生を心から尊敬致しております。ですが……」

「ああ、わかつている」

先生はすぐに、勇作をさえぎった。

「ここを離れたくないのだろう？ 理由は、もう、月子さんを一人にしておけない……違うか？」

「……はい、申し訳ありません」

勇作の言葉に、喜びと安堵が前進を駆け巡った。目を閉じ、ため息をついた。

「僕が、今回京都に来た理由の一つに……」

唐突にそうおっしゃって、井上先生は書類を取り出した。

「今年の春、爵位を賜ることになってね。各所への手続きや挨拶回りのためなのだ」

「それは……おめでとうございます!」

「井上栄太郎男爵様だそうだ……わははは。まったく、柄にもないな」

先生はおどけたように笑い飛ばされた。

「あまり気がのらなかったのだが、少しは役に立ちそうだな。その？男爵様?とやらが……」

そして、一呼吸置かれ、

「小島君がもし僕のところに来てくれるのなら、月子さんも一緒にどうだろう?二人で一緒に、僕の助手として満州に来てもらえないだろうか」

「井上先生?!」

「期間としては長くても2年とみている。だが、二人を引き裂くのは本意ではない。といって、このまま想いを遂げようとすれば、お父上の早乙女伯爵の反対は避けられない。もし君たちが覚悟を決めるのなら、僕が小島君の身元保証人として、また、仲介人として、伯爵の説得に力を貸そう」

「しかし……そこまで先生にお世話になるわけには……」

勇作はそう言いながら、私を見た。

もちろん同じ気持ちだったが、心のどこかで、来るべき時が来た……という、血が沸きあがるような興奮を抑えることができなかった。

様々な想いが駆け巡った。

虹光る 9 【月子】

井上先生のおっしゃるとおり、最初からお父様の反対は覚悟の上の恋だった。

？剣術で大きな結果を残して認めてもらう？という夢はまだ果たされてはいなかったが、勇作の上京とそれによる清彰さんとのご縁また、ここ数ヶ月の早乙女家での彼の働き等によって、今では両親も 勇作の良さは認めてくれてるいる。

一方で、このままいたずらに時を稼いでも、何かが大きく変動するとは考えられない。

今までも、そしてこれから、私たちの変わらない想いを必死で訴えることでしか路は開かれない。

井上先生のお力添いを賜ったうえ、光の誕生・華子の結納と両親の心が豊かになっている今は、最高の好機かもしれないと思えた。

私は勇作をじっと見返した。

彼も同じことを考えていたのだろう。

最初は戸惑いの浮かんでいた左目に、強い光のようなゆらめきが宿った。

それから数日後、軍医・井上先生こと「井上栄一郎男爵」が早乙女邸を訪れ、お父様に面会を申し出た。

私と勇作も、同席した。

井上先生から、私たちのことを聞かされたお父様は……

思いのほか、冷静だった。

「そうだったのか」

と、つぶやき、あとはしばらく黙ったままだった。

めったに吸われない葉巻を取り出し、火をつけられた。
取り乱したのは、お母様の方だった。

「勇作！ あなた、なんということを！」

お顔を真つ赤にされ、勇作をなじった。

「月子には、たくさんの方との縁談があつたのですよ。なのに、よりによって……」

それでも、彼は背筋を伸ばしたまま、私たちがどれほど強く惹かれあい、無二の相手として互いを必要としているかを、切々と訴えた。

井上先生は、

「伯爵夫人の御嘆きはごもつともです。源太さんも、伯爵からお受けた御恩を仇で返すようなものだ、死をも厭わぬ覚悟で反対したそうです。しかし……」

先生は、勇作が目の手術を受けないと言い出したとき、私が身を挺して説得したときのことを話された。

湯飲みの破片を手に、

「あなたが好きです。もしも、受け止めてもらえないと言うなら、何も変わらないからと手術を受けないなら……私もあなたと同じように……この欠片で、目を突きます」「

「私はすべてを捨てる覚悟で、ここに來たのです」

黙りこくっていたお父様も、目を見開いて、私を見つめた。

「あの日を境に、勇作くんご本人も、父親の源太さんも、月子様の想いを受け止め、ともに生きていく覚悟をしたのです」

もう何年も昔のことのようだった。

けれども、今でも私の決心は変わっていない。

「わがままを言って、本当にごめんなさい」

ハンケチで顔を覆い、震えているお母様の肩に手を触れた。

「勇作と生きることが、私の幸せなのです」

お母様は顔を上げ、

「幸せ？」

「はい」

長い長い沈黙の後、お父様が口を開かれた。

「井上先生、本日は誠にありがとうございました。しかしながら、すぐに答えをだせそうにありません。しばらく時間をいただきたい」

虹光る 10 【月子】

その日は、お父様は夜まで書斎から出てこられなかった。

お母様は、夕方までそんなお父様の御側いらっしゃったようだが、その後華子のお部屋に行き、二人で長い時間お話をされていた。

私は雪子お姉様のお部屋で、光の寝顔を見つめていた。

「華ちゃんから聞いたわ。とうとう、お父様たちに打ち明けたのね」

「ええ。とても、緊張したわ」

私がそう言つて微笑むと、お姉様は目を閉じ、

「大丈夫よ。きっと」

「そうかしら……」

「私にはわかるのよ。いろいろなことがあつたから、お父様たちのことをとても近く感じられるようになった。きっと、月ちゃんの望みを叶えてくださるわ」

お姉様は、なんども「わかるのよ」と言われた。

「お姉様は光を産んだから、親としての御立場を理解できるようになつたつてこと？」

「そうね……そうかもしれない」

お姉様はゆつくりと体を起された。そして、

「お父様は、もしかすると、私と清彰さんのこともお気づきになつていたかもしれないと思うの。そのうえで、知らぬふりをしてくださつて私と光を受け入れてくださつた……そんな気がしているの」

「え？ そうでしたの！？」

「私の直感でしかないけれど。お父様は……いいえ、お父様だけでなく、お母様もきっと、私たちの本当の幸せを望んで下さっている。そう、信じることができるの」

直感……お姉様のそれは、きっと軽いものではなく、苦難を乗り越えてきたからこそ得ることができた、研ぎ澄まされた、確信に満ちた感覚なのだろうと思つた。

「ねえ、月ちゃん……」

この後、雪子お姉様は意外なことをお話になられた。
それを私以外の方たちが知るのには、この夜から数ヶ月経ってから
だった。

虹光る 11 【月子】

翌朝、私の部屋の扉を叩く音……お父様が佇んでいた。

「お父様！」

「月子、支度しなさい。私と一緒に来なさい」

「一緒に……って、どちらへ？」

お父様はそれには答えず、くるりと背中を向け、

「30分後に玄関で待っている」

と、おっしゃった。

お父様はコートと帽子を手に取り、車を呼ばず、歩いてお屋敷を出られた。

私は黙って、後に続いた。

お父様は一言もお話にならず、時折立ち止まって、針葉樹の葉に触れたり、ステッキで枯れ木を軽く叩いたりして歩きながら、やがて門を出られた。

そして……

源太の家の前で立ち止まった。

源太の家の和室で、源太と勇作が私たちを待っていた。

その傍らにある仏壇には、清彰さんの遺骨が置かれている。

お父様は真つ先に遺骨の前に進み、長いこと目を閉じて手を合わせておられた。

やがて、

「今日は、主として来たわけではない」

楽にするように……と、緊張した面持ちの源太に、お言葉をかけられた。

そして、

「勇作君、今日は月子の父親として、ここに来たと、告げられた。」

「君は本気で、月子と一緒にいる気なんだな」

勇作は、唇をぎゅっと結び、深く頷いた。そして、

「この命に代えても、必ずお嬢様をお守りします」

そう言つて、畳に額を押し付けるように、頭を深く下げた。

「月子、おまえも覚悟しているのだな。もう、華族の娘ではなくなるのだぞ。どんな苦勞が押し寄せてきても、耐えられると誓えるのか？」

私は、勇作の隣に座りなおし、頭を告げたままの勇作の横で、同じように手をついた。

「はい、お父様、お誓い申しあげます」

「……わかった。もういい、二人とも、顔をあげなさい」

けれども私は、すぐに体を起こすことができなかった。

緊張で、手の震えが止まらなかった。

……勘当を言い渡される……そう、覚悟していた。

すると、

「媒酌人は、井上男爵にお願いしよう。源太、いいね？」

お父様の柔らかな声が聴こえた。

虹光る 12 【正臣】

大正13年3月。

若田男爵家四男・圭介氏と早乙女伯爵家三女・華子姫の結納の儀が執り行われた。

両家・そのご親戚筋やご縁のある多くの華族が招かれ、盛大な晩餐会も催された。

その華やかで賑々しい一日、僕はずっと遠い春の日、三姉妹に初めてお会いしたあの茶会のことを思い出していた。

華子さんは始終、本当にお幸せそうに笑っておられた。

様々な想いが去来したが、これでよかったのだと思え、この時に心から祝福できる自分に戻れたことに、安堵していた。

月子さんは、勇作さんとの結婚を許されたが、圭介さんと華子さんが正式挙式される6月まで、その件は伏せられることになった。

華族の結婚には、宮内省の許可が必要となる。

伯爵令嬢が使用人の息子に嫁ぐとなれば、大きな物議をかもしだろつ。

だから、若田家との姻戚関係がきちんと確立するまで時を稼ぎ、夏頃、月子さんは「勘当」という形で家を出て、満州に渡る……

これが、早乙女伯爵が二人の仲をお認めになる際、提示された条件だった。

たとえ形だけでも「勘当」という方法で愛娘を送り出さねばならないご両親の心情を思うと、胸が痛んだ。

それでも、伯爵家としての体裁より娘の想いを優先させた伯爵ご夫妻に、僕はあらためて大きな敬愛の念を抱いた。

雪子さんのお加減は、依然芳しくなかった。

産後2カ月が過ぎても、床から起き上がって元気に動くことはできなかった。

妹君の結納の儀にも参列することは叶わず、どんなにお寂しい想いをされただろう。

一方で、光君はすすくと成長され、おめでたく華々しい春を迎えた早乙女家に、その御名のとおり一層大きな光を与えておられた。

けれども……

夏を迎える頃、その早乙女伯爵家がまた暗く翳る、哀しい出来事が起こるのだった。

次章「花影」へ

花影 1 【正臣】

6月、早乙女家伯爵家と若田男爵家を結ぶ、盛大な華燭の典が執り行われた。

圭介さんは、『早乙女圭介』氏となり、京都・早乙女邸の住人になった。

圭介さんと華子さんは夏の北海道に新婚旅行に出かけられた。生後5ヶ月の光君はますます可愛らしさを増され、伯爵夫妻を始め早乙女家の方々の愛情を一身に集めておられる。

月子さんや華子さんは、

「光の綺麗な顔立ちは、まるで清彰さんを見ているようね。そっくりだわ」

と、お話しあっていた。

月子さんは、8月の満州へのご出発に備えて、勇作さんとともにいろいろと準備を進められていた。

軍医の井上男爵は、京都に来られるたびに早乙女邸をお訪ねになり、伯爵とのつながりを深められた。伯爵夫妻は、井上先生の人となりを知り、信頼を深めていらつしやるようだ。

昨年来の、震災や松方清彰さんのご逝去・雪子さんと松方侯爵の離縁など、重苦しい冬を耐え続けた早乙女伯爵家は、今、暗いトンネルを抜けきらめく光の中にあつた。

結婚の儀から数日経ったある日。

その日は、週に一度の瀬川先生の往診日だった。

雪子さんは産後の肥立ちが悪く、酷い貧血や微熱・体の痛みなどに苦しめられていた。

華子さんの結婚の儀には無理を押しして参列されたが、翌日からは

また寝たきりの生活となった。

瀬川先生や井上男爵の伝で、何人かの名医と呼ばれる方たちに診ていただいたが、一向に改善されない。

しかも数日前から、微熱が続き、時折ひどく咳き込んでおられた。結婚の儀の際、久方ぶりに外に出られ多くの方たちと接したので、風邪でもうつされてしまったのではないかと……と、皆、心配されている。

僕も何度かお顔を見に伺ったが、妙な咳に加え、その面持ちは青白く透き通るようで、一抹の不安が……。

光君は、風邪がうつってはいけないからと、伯爵夫人のお部屋で過ごされていた。

花影 2 【正臣】

診察を終えた瀬川先生は、早口で告げられた。

「雪子さまはこのお屋敷を出られ、転地療養された方がよろしいと思われます。……至急、私の方で手配させていただきます」

伯爵夫人も、隣にいた月子さんと僕も、息を飲んだ。

「先生、どういことですか？ 雪子はいつたい……」

「あの症状は、肺結核に間違いないと思われます」

肺結核……伯爵夫人の体はよろめき、月子さんが慌ててそれを支えられた。

強制的に隔離され、長い闘病生活を強いられ、その患者のほとんどが死に至るといふ恐ろしい病だった。

結婚の儀で外出された際に、どこかで感染してしまったのだろう。しかも、雪子さんは産後で体力がなかったため、かなり重篤な症状に陥ってしまったという。

一刻も早くしかるべき施設で治療しなければ、危険だ。

また、早乙女家の人たちから隔離し、感染を防ぐことも急務だった。

数日のうちに、雪子さんは軽井沢のサナトリウムに移されることが決まった。

それまでは、先生の指示により、雪子さんの部屋に出入りする人は、マスクをつけることが義務付けられた。

また、当然、雪子さんは光君との触れ合いを一切断たれてしまった。

僕は、月子さんのお部屋を訪ねた。

「少しお話したいのですが…… よろしいでしょうか」

月子さんは、読書をしておられたが、僕の方を振り返りぱたりと本を閉じられた。

「ええ、もちろんよ」

「どうしてこんなことになるのでしょうか…… 雪子さんばかり……」
暗い声でそう切り出す。でも本当は、何をお話していいかわからなかった。

ただ、重く苦しい気持ちを、吐き出したいだけなのだ。

「光君とこれからともに生きて行こうと、希望に満ち溢れていたはずなのに……」

月子さんは黙ったままだった。

「しかも…… 清彰さんと同じ病気だなんて。清彰さんを失った哀しみを乗り越えようとしていた矢先に」

花影 3 【正臣】

「実はね……」

月子さんは小声で切り出した。

「お姉様は、本当は軽井沢には行きたくないと思っただけなのよ。皆に迷惑をかけてはいけないからと我慢されているようだけれど、本当は光の側を離れたくない。そして、できれば……」

そこまでおっしゃると、声をつまらせ、しばらく黙っておられた。

「月子さん？」

やがて、大きくため息を吐かれ、

「ここで、みんなの側で、最期を迎えたいと……」

僕は絶句した。

誰もが、決して想像したくないそのこと。

口にはならないと、怯えているそのこと。

—— 雪子さんが、逝ってしまうかもしれない。

いつも気丈な月子さんが、お顔を覆って泣き出した。

「瀬川先生に詳しくお聞きしたところ、お姉様は私たちが想像している以上によくない状態らしいの。それを、誰よりもお姉様ご自身が、自覚していらっしゃる。だから、軽井沢に行ってしまうえば、もう二度とこの家に帰ることはない、お覚悟を……」

「伯爵ご夫妻には、そのことをお話したのですか？ 華子さんたちには、ご連絡したのですか？」

「華子たちは、旅行の日程を延ばして、お姉様が転院するまで戻ると伝えたそうよ。お父様とお母様は……今夜も、私とお父様たちでそのことをお話したの。お父様は、光だけでなく、他の家族や、内藤伯爵家の若君であるあなたも、守らなくてはならない、だから、どんなに辛くても、雪子をここにおいていくわけには行かないと……」

当主として、伯爵のご采配・ご決断は当然のことかもしれない。

一方で、父親として娘を遠い所に送りださねばならないご心情は、察するに余りある。雪子さんが苦しんでこられたこの一年を思えば、雪子さんの新たな人生を支え、今度こそ幸せにしてさしあげたいと、どんなに強く願っておられただろう。

月子さんは考えあぐねた結果、一つの提案をされたという。それは、

「お庭に、お姉様が皆と離れて過ごすことのできる離れを建ててはどうかしらって、言ったの」

「離れ……ああ、それは良い提案ですね！ 雪子さんも、遠くに行かなくてすみます」

僕は身乗り出した。

「お父様は、明日、先生方にご相談してみるとおっしゃってくれたわ。私も今、自宅療養で治療できる方法を調べていたの」

月子さんが読まれていた本は、肺結核について詳しく解説された医学書だった。

「そうでしたか」

「でも、仮にそれが実現したとして、お姉様が急によくなるわけじゃない。むしろ、十分な治療が受けられず、いつそう悪くなる可能性も……何より、お姉様のお覚悟が覆されるわけではないわ」

僕の心の霧は、晴れなかった。

さらに、月子さんがいつになく取り乱されているのが、どうしてもひっかった。

花影 4 【月子】

けれども、雪子お姉様のために庭に離れを建てるという話が、実現することはなかった。

誰より、お姉様ご自身が、それを頑なに拒まれたのである。

私は、お姉様のお気持ちが胸に迫り、涙が止まらなかった。

お父様たちは、「いつも気丈な月子が、そんなに泣いてどうするのだ」と、戸惑われていた。

軽井沢に行かれたからといって、二度とお会いできなくなるわけじゃない。

光だっている。

光を残したまま、この早乙女邸に帰ってこない……そんなこと、あるはずはない。

誰もが自分に言い聞かすように、そう口にした。

私もそう、信じたかった。

その夜、雪子お姉様に呼ばれた。

私は、マスクをかけ、お部屋を訪ねた。

「月ちゃん、私のために、いろいろとありがとう。離れのこと、ごめんなさいね」

お姉様はそうつぶやき、微笑まれた。

日に日に痩せて、すっかり体力がなくなっていraftしやる。言葉を発するのさえつらそうに見えた。

「いいの、お姉様。もう何も気になさらないで。とにかく、心を強く持つて、必ず元気になって戻ってね」

「ええ」

そのあと、お姉様は枕元から、一通の手紙を出された。

「それは？」

「今朝、書いたの。もしも、私がもどらないようなことがあったら、これを……」

「駄目です!」

私は強い口調でそのお言葉をさえぎった。

遺書。

そうに違いなと思った。

「月ちゃん、私の気持ちは、前にも話したわよね。そのことをあらためて、文章に残しておこうと思って……」

花影 5 【月子】

私が、以前聞かされた、お姉様の想い。

あれは、2月。

私と勇作のことをお父様にお話した日の夜。

お姉様のお部屋で、光の寝顔を見ながら語り合っているときだった。

「ねえ、月ちゃん……」

お姉様は、思いも寄らなかったことを口にされたのである。

「私ね、なんだかもう、長くない気がするの」

「長くないって……お姉様、急に何てことを！」

驚きや動揺よりもっと激しい、怒りにも似た感情がわきあがった。
「御産したばかりで、お気持ちが不安定なのね。いけないわ、そんなこと口にされては……」

「ごめんなさいね。でもね、これは前から思っていたことなのよ。」

私は、赤ちゃんを産むという大きな お仕事を終えたら、あの人との約束を果たし、使命を終えることができる……そうしたら、もう

……」

「やめてください！」

「決して、今すぐに……というわけではないのよ。私だって、光と一緒に生きて行きたい。一日でも、一秒でも長く」

私は黙り込んだ。

お姉様の瞳には、優しい語り口とは裏腹に、それまで見たことのないほど強いきらめきがあった。

言葉を差し挟むことすら許されない気がし、何か大きなものに飲み込まれるような錯覚にとらわれた。

お姉様は、お話を続けられた。

「それがいつかはわからないけれど、もしも、私にもしものことがあつたら、あなたに光をお願いしたいの。」

「私に？」

「ええ。勇作さんとあなたに」

「で、でも……」

光は、雪子お姉様の子であると同時に、松方侯爵家の血を引く若君だ。

松方侯爵が離縁の際に、

早乙女伯爵の庇護の下で、立派に育ててほしい

と託されたように、私たちも当然、この早乙女伯爵家で育てられるのだと信じて疑わなかった。

光の行く末は、伯爵家の跡を継ぐ華子と圭介さんをお願いしたいというのが筋だと思われた。

花影 6 【月子】

雪子お姉様は、遠い目をして、ゆっくりと言葉をかみしめるようにお話になられた。

「清彰さんは、ご自分が侯爵の子息として生まれたことを、とても悩んでいたのです」

「悩んで？ どういう意味なの？」

「どんな命も、この世界に生まれ出た人間は、同じです。身分など関係ない。皆が、平等であるべきなのです……清彰さんは、あの思想に傾いていかれた想いを、そのように語っておられました。だから、ご自分が華族として特別な扱いを受け、裕福な生活をし、ともすれば、必死で働き生きている人たちを踏みにじるような、そんな身分でいることを……」

お姉様は、一呼吸おかれ、

「恥じていたのです」

その言葉を聞き、私は全身が震えた。

「月ちゃん、今のあなたなら、清彰さんのおっしゃっていたことを、心の深いところで実感することができるのではないかしら？」

お姉様のおっしゃるとおりだった。

私は、華族の娘という身分を捨ててでも、勇作とともに生きることとを固く決心している。

身分や階級といった厚い壁を越え、呪縛から解放たれ、人を心の底から愛しすることの素晴らしさ、尊さ……私たちは、誰よりも熱く感じている。そして、そんな道を歩んでいけることは、本当に幸せなことだと信じることができる。

理屈ではなく、命の奥底にみなぎる、確信のようなものだった。

私は、かつて松方邸でお逢いした清彰さんの姿を思い浮かべた。
あの柔らかでお優しい瞳の奥に、そのような苦悩がおりだったこと、そのような崇高な信念が燃えていらつしたこと。そして、すべてを越えたお姉様への深い深い愛が、輝いていらつしたこと……様々な想いが去来し、涙が込み上げた。

「もしも、あの方が今でもお元気だったら、松方侯爵家からも早乙女伯爵家からも離れたところで生きていくことを選ばれたと思うのももちろん、私と赤ちゃんも一緒に……」

「ええ、お姉様、わかります」

「だから、私に万が一のことがあったら、光は、あなたと勇作さんに託したいのです」

花影 7 【月子】

こうして、雪子お姉様とお話した冬の一夜。

私は、勇作と自分のことがどうなるかもわからない不安の中、雪子お姉様の祈りにも似た強い願いを聞かされ、真つ暗な闇の中に佇んでいる心境だった。

お姉様の想いは、痛いほどわかった。

けれども、それ以前に、お姉様が自らの死を口にされたことがたまらなく不安で、恐ろしかった。

宵闇に染み入るように零れ落ちるお姉様のお言葉、その一つ一つが、神の訓示のような、どこか有無を言わさぬ重さがあった。

あれから数カ月。

ご自分で予知されたように、雪子お姉様には、本当に死の影が忍び寄ってきている。

私の抱いていた戸惑いや不安が、日に日に濃さを増し、形ある確かなものになっているようだった。

そしてとうとう、雪子お姉様は、「遺書」を認められてしまった。受け取ってしまえば、いよいよ事態が悪い方に流れていきそうで、怖かった。

でも、お姉様につき返すことなど、できるわけではない。

どんな想いで、おつらい体を起こし、筆をとられたか……私は胸がかきむしられ、その場に泣き崩れたいのを必死で我慢した。

「わかりました。確かに私がお預かりします」

やっとの想いでそう言い、手を差し伸べた。

「ありがとう」

雪子お姉様は、目を細め、やわらかな笑みを浮かべて、手紙を手渡してくださった。

そして、

「さあ、では、お部屋に戻って。長くここにいてはいけないわ。うつってしまったら、大変ですもの」

私は黙ってうなずき、後ろ髪ひかれる想いで扉を閉めた。

それから自分の部屋に戻ると、ベッドに倒れこんで泣いた。

ああ、季節がうつろうように、山水が川から海へと流れるように、きつと雪子お姉様は静かに、けれども確実に、逝っておしまいになる。それは、誰にもとめることのできない。

清彰さん、お姉様を連れて行かないで！

心の中でそう叫びながら、私は、ただただ狂ったように慟哭した。

花影 8 【正臣】

その三日後、雪子さんは、軽井沢へと旅立たれた。

見送りは、マスクをおつけになった早乙女伯爵と月子さん、そして二人の侍女だけだった。

光君は、伯爵夫人に抱かれ、二階の窓から雪子さんの出発を見送った。

看護婦にお体を支えられ、車に乗り込む瞬間、雪子さんは、ちらりと光君を見上げた。

そして、すっかり色をなくしてしまった小さな唇をかみしめられ、切なく微笑まれた。

そんな哀しい瞬間にさえ、雪子さんは美しかった。

雪子さんが軽井沢のサナトリウムに行かれた数日後、圭介さんと華子さんが、新婚旅行からお帰りになられた。

雪子さんのことで暗い空気が漂っていた伯爵邸に、明るく華やかだ活気のようなものがいくらか戻ってきたようだった。

お二人はたくさんのお土産を広げ、一人一人に手渡された。

皆が一つ一つ手にした後、テーブルの上には、ぽつんと一つだけ小さな箱が残された。

「それは……雪子お姉様にと、買ったものよ」

華子さんが寂しげ気にそう言うと、皆、一同に顔を曇らせた。

華子さんは、旅先で雪子さんへの励ましのお便りを何通も綴られていたが、雪子さんと直接お話できないままだったことをとても悔やまれていた。

僕はその数日前、実家の父から一通の手紙を受け取っていた。

主に、華子さんのご結婚への祝辞や雪子さん・光君の近況をお尋ねになる内容だったが、その最後に、驚くべきことが綴られてあった。

それは……

あの、有島千秋が、生きていた……というものだった。

花影 9 【正臣】

震災の時、東京の有島邸は甚大な被害を受けた。

千秋のお父上・有島男爵は建物の下敷きになって亡くなられ、千秋もまた、行方不明のまま、生還したという知らせはいつまでたつても届かなかった。

詳細はわからないが、震災が起こった時、千秋は外出していて、出先で被災し、病院に運ばれていたのだという。

かなり重篤の状態だったのか、なかなか本人から話を聞くことができず、身元確認が遅れたようだった。

僕は、千秋が生きていたことが本当に嬉しかった。

彼の死を認めたくないという想いは、どんなに時間が経っても僕の中で暗く影を落としていた。

その死を前提にして華子さんとお話するのはつらかったし、一方で、そう思い込まないと先に進むことができないという苦しい場面は何度もあった。

生きていることで、彼が背負わねばならないことはたくさんあるだろう。

有島男爵家は、震災前、経済状況が悪化し、爵位返上の窮地にあった。

当主である男爵が亡くなってしまったことで、千秋や彼の兄上が、さらに大変な状況に陥るのは火を見るよりも明らかだった。

それでも、生きてさえいれば……

この一年、間近で拝見してきた、早乙女伯爵家の方々、清彰さん、勇作さん、井上先生……お一人お一人のお顔を思い浮かべながら、僕は、人が信じあい、愛し合い、生きていくということの力強さや尊さを思う。

千秋もまた、あの震災から不死鳥のように甦り、様々な苦境を乗り越えほしい……そう、祈った。

震災から10カ月、千秋、君は今、どうしている？

けれども、僕は、迷った。

有島千秋が生きていたという知らせを、華子さんに、お伝えするかどうか……

華子さんは、ご結婚されたばかり。

姉上の雪子さんのことでおつらい想いもされているだろうが、一方で、しかるべき御仁の妻となった幸福感の中で、新たな人生に踏み出したばかりだ。

華子さんが圭介さんとのご結婚を決意されたのは、千秋が亡くなったと思い込んだからではなかった。

ご婚約のご意思を示されたのは、震災前だ。

千秋の生死に関わらず、圭介さんとともに生き、早乙女伯爵家を継いで行かれるお覚悟をされたのだから、千秋が生きていたことは何の障害にもならないはずである。

けれども、華子さんの人生にとって、千秋が大きな存在であることは変わらない。

生きていたとお知りになれば、どんなに喜ばれ、安堵されるだろう……そう思いつつ、それでなくとも雪子さんのことで胸を痛めていらつしやる華子さんに、動揺を与えてしまうことになるのでは？
その心のうちに、波紋を広げることにはなるのでは？

悩んだ拳句、僕は、しばらくの間、千秋のことは華子さんに話すまいと決心した。

ずっと隠し通すつもりもなかったが、せめて、新婚生活が軌道に乗り、雪子さんのご病状が安定するなど、華子さんが落ちつかれる

のを待つてからお話しようと思った。

そして……

雪子さんのご病気は、月子さんの行く末にも少なからず影響を与えることになった。

井上男爵が早乙女邸をご訪問されたのは、啓介さんと華子さんが戻られた翌日だった。

8月の満州行きに向けて、男爵は奔走されていた。もちろん、勇作さんと月子さんも、男爵に同行するために少しずつ準備を始めていた。ところが……

早乙女邸の応接室で、早乙女伯爵ご夫妻と、啓介さん・華子さん、そして、勇作さん、月子さんがご歓談されていた。

その席で、月子さんが突然、「満州には行かない」と、言い出されたのである。

花影 11 【華子】

月子お姉様は、

「突然、こんなことを申し上げるのはとても心苦しいのですが」と、前置きし、

「私は、今回の満州行きを、ご辞退させていただこうと思っています」

……そう、おっしゃった。

皆、沈黙した。理由は、訊くまでもなかった。

それはきつと、雪子お姉様のことが心配だからに違いない……誰もがそう感じたからである。

しばらくして、井上先生が口を開かれた。

「あなたのお気持ちはわかります。私はもちろん、あなたのお気持ちを尊重してさしあげたい。だが……」

井上先生は、勇作さんを見た。

そこにいた全員が、先生に続いて、勇作さんに注目した。

勇作さんは、真剣な表情のまま黙って一点を見つめていたが、お父様が、

「それは、二人で話し合ったことなのかね？ 勇作君はどうするのかね？」

と言われると、勇作さんは、

「私は、井上先生の助手として同行させていたいただきます。二人で話し合って、決めました」

その瞬間、私は思わず、「待つてください」と、口にしていた。「どういことですか？ まさか……」

二人は、お別れしてしまうの？ そう言いたかったが、続けることができなかった。

恐る恐る、月子お姉様のお顔を見た。すると、お姉様は首をふり、

「いいえ、違うわ」

と、ささやくようにおっしゃった。そして、静かに話を始められた。井上先生、本当に申し訳ございません。勇作のことを信頼していただき、さらに、私たちのことをお父様にお認めいただくよう、お力をお貸しいただいたこと、心から感謝しております。どんなに御礼申し上げても、言い尽くせないほどのです。せめて、私も満州に行かせていただき、少しでもそのご恩返しができればと思っております。けれども、どうしても、雪子お姉様のことが心配で、今、ここを離れることはできないのです」

「ああ、わかつているとも。氣に病むことはないよ」

井上先生は、笑みを浮かべた。

「もしお許しいただけるなら、お姉様のご病状が安定し、ここに帰ってこられるほどお元気になられたら、私も満州に渡りたいと思っております……いかがでしょうか？」

先生とお父様は顔を見合わせ、深く頷き合われた。

「もちろんだ。待っているよ。雪子さんが元気になられるのを。そして、あなたが満州に来られるのを」

先生のそのお言葉を聞いた瞬間、月子お姉様はフツと肩の力をぬかれたように溜息をつかれた。

「ありがとうございます」

月子お姉様と勇作さんは声を合わせて御礼の言葉を言い、見つめ合った。

花影 12 【華子】

この時まで、月子お姉さまと勇作さんは、長い時間をかけて将来のことを話し合っていたのだった。

満州行きのことに限らず、この時の私たちは想像もできなかった、大きな大きな決断についても。

昨年、勇作さんが上京し離れ離れになったことをとても悲しんでいらつしやった月子お姉様。

一方で、雪子お姉さまのためにここに残りたいという想い……どんなに大きな葛藤があったことだろう。

だからこそ、月子お姉様の出した結論は、お姉様の想いをしっかりと受け止め支えようとしてくれる勇作さんの愛情、もっと言うなら、二人の揺ぎない絆の証明でもあった。

いくらお二人の仲が許されたといっても、それは内内のお話で、当然、勇作さんは公の場所にお姉さまの婚約者として参列されることは許されていない。

それに加え、お顔の傷のせいもあって、「ご迷惑をおかけしてはならない」と、早乙女邸の出入りも裏口から。源太とともに、使用人として、人の目の届かない場所で黙々と働いていた。

仕事と道場とのかけもちは肉体的にはつらい日もあるはずなのに、夜になると、「少しでも井上先生のお役に立ちたい」と、難しい資料片手に医学や貿易や政治のことを独学で勉強しているという。

そのように誠実で努力家なところは、お父様やお母様の耳にも届くこととなり、お二人は、勇作さんへの信頼を日に日に深めていらつしやるようだった。

私は、人にとって一番大事で尊いものをしっかりと見出し、娘た

ちの幸せのために心を砕いてくださるお二人に、深い感謝と尊敬を感じずにはいられなかった。

お二人は、私と啓介さんにとって、目標であり、憧れとなっていた。

翌日から、勇作さんは満州渡航のための準備に本格的にとりかかり、月子お姉様はそのお手伝いをされた。

私と啓介さんは、二人で各方面へご挨拶周りをしたり、晩餐会に出席したり、忙しい日々が始った。

穏やかで物静でそれでいて人懐っこい啓介さんは、いろいろな人たちに好感をもたれた。次代の早乙女伯爵家を担う者として、さまざまな方面からのご期待を一身に集めていた。

光は、もう寝返りがうてるようになり、時おり、愛らしい表情で「あー」「うー」と言葉を発して、私たちをとっても喜ばせた。

7月も半ばに差し掛かっていた。

次章「屋気楼」へ

厩気楼 1 【華子】

早乙女邸の庭に、蝉時雨が響き渡っていた。

雪子お姉様が軽井沢のサナトリウムに移られて約二カ月。

涼しい軽井沢の空気が功を奏したのか、お姉様は少し元気を取り戻されたというお便りが届き、皆、胸を撫で下ろしていた。

勇作さんと井上先生の出発の時がやってきた。

この頃、大日本帝国は、満州への進出を積極的に行っていた。

井上先生は、満州に滞在している要人や軍関係者を担当する軍医として渡航される予定だった。

しかも、医療部門を統括する指導的立場での着任で、任期は二年間だとお聞きしていた。

いよいよ勇作さんが京都を離れる日、私たちは早乙女邸の玄関で、挨拶に訪れた勇作さんを見送った。

啓介さんが、

「どうかお元気で。ご無事を祈っています」

とおっしゃり、早乙女家からの饞別のお品を手渡した。

「ありがとうございます」

勇作さんは、私やお父様とお母様、一人一人に深々と頭を下げた。その後、月子お姉様と源太が、駅までお見送りに行った。

お姉様と勇作さんに、多くの言葉は要らなかった。

ただ、二人の誓いをもう一度確かめ合うように、強く抱擁しあったという。

「待っていてくださいね。必ず、あとから参ります」

お姉様は毅然とそうおっしゃり、最後まで笑顔だった。

早乙女邸に戻ってから、月子お姉様はお父様に、

「元気で旅立っていきました」

と、明るい顔でご報告された。

だが、その日の夜、私が紅茶をいれてお姉さまのお部屋をお尋ねした時……

扉の向こうから、嗚咽のような哀しい声が聴こえてきた。

月子お姉様が声を殺し、泣いていらっしやっただ。

私は胸がしめつけられるような想いになって、声はかげず、そのまま立ち去った。

厩気楼 2 【華子】

ある日、早乙女邸を一人の若い女性が訪れた。
たまたま、玄関先にいた私が応対に出ると……

その人は、短い髪につばの大きな帽子を被り、かかとの高い靴を履き、細い体にぴったりと沿うような颯爽とした洋装に身を包んでいた。

それは、流行の最先端をいく、“モダンガール”そのままの佇まいだった。

「岩波百合子と申します。啓介さまはいらっしゃいますでしょうか？」

そのお名前には、確かに聞き覚えがあった

「岩波様と申しますと……福岡の岩波様のご関係の方ですか？」

「はい、岩波徳次郎の長女でございます」

岩波氏は、九州・筑豊炭田で炭鉱王として名を馳せていらっしゃる方で、啓介さんのお父上・若田のお義父様と大変近い間柄だった。

結婚の儀の際、お義父様よりご紹介を受け、ご挨拶したことを思い出した。

その人は艶やかに微笑み、

「啓介さまのご結婚の際には欧州に行っており、お式には参列できませんでした。誠に失礼致しました。先月、やっと帰国いたしましたので、こちらに所要がありましたものですから、お祝いを兼ねて、ご訪問させていただきました」

と、言った。

大輪の花を思わせる華やかさを携え、外国の女優さんのような印象。

とても美しい人だった。

啓介さんは不在だった。
すると、

「本日はご挨拶にお寄りいただけですので、次回はお祝いのお品を持って、あらためてご訪問させていただきます。しばらくこちらに滞在しておりますので、啓介さまにお伝えください」と、メモを差し出された。

そこには、“京都ホテル”の連絡先が書かれてあった。
多くの外国人や中央の要人の方々が滞在されている、名門ホテルである。

「はい、お伝えいたします」

と、微笑み返すと、岩波百合子さんは目を細め、

「本当に可愛い奥様でいらっしやいますのね」

そう、つぶやくようにおっしゃった。

午後になり、お父様と一緒に帰宅された啓介さんに、岩波さんの来訪をご報告した。

私の話に耳を傾けていた啓介さんは、突然眉をひそめ、

「百合子さんが？」

と、低い声で言われた。

それは、私が啓介さんとお逢いして以来、初めて目にした険しい表情だった。

厩気楼 3 【華子】

それも一瞬で、啓介さんは、

「うん、わかったよ」

とすぐにいつものような穏やかな顔に戻られ、何事もないように振舞われたが……とても気になった。

夕食の時、お父様や正臣さんの間で岩波氏の話題がのぼった。

たまたま、正臣さんのお父上・内藤伯爵が、貴族院議員として岩波氏の炭鉱を視察に行かれたことがある、ということだった。

「父は、たくさんの方働者が生き生きと働いてとても活気を感じた、わが国の産業発展のためにも、石炭はますます需要が伸び、炭田は栄えるだろうと申しておりました」

正臣さんがそうおっしゃると、お父様もうなづき、

「そうだね。特に、岩波氏は各界の方々と様々な交流をしているよ。うだから、業績もうなぎのぼりだと耳にしている。結婚の折に若田男爵のご紹介で始めて会ったが、なかなかの紳士だった」

そして、啓介さんを見やり、

「若田家も、昔から公私共にわたってたいへんご懇意にされていると、お父上もおっしゃっていたよ」

「はい」

啓介さんはうなづかれたが、そのお顔はどことなく暗かった。

すると、唐突に月子お姉様が、

「啓介さんは、ご令嬢とも以前からお親しいの？」

そう言っ、ちらっと私の方を見られた。

「とても綺麗な方だそうね、高波が言っていたわ。ね？」

と、給仕をしていた高波を見た。

高波は、「コ、コホン」と、咳払いをし、

「はい、洋装で、西洋の方のように洗練されていらっしやいました」

と、答えた。

私がおぼろげに感じていることを、何倍もの速さで敏感に感じ取り、素早く次のことを起こす……何事にも鋭く、聡明なお姉様……いつも、ドキッとさせられる。

「ええ、幼い頃から何度かお逢いしたことがあります」

啓介さんはそう言ったが、それ以上言葉を続けなかった。

お姉様は、

「まさか……ご両親が決められた、

いいなすけ
許婚　でいらしたとか？」

と、おどけるようにおっしゃった。

ところが、啓介さんがすぐにはお答えにならず、無表情で黙りこくっていたので、食卓はたちまち気まずい空気に包まれてしまった。

厩気楼 4 【華子】

私が不安げな顔で月子お姉様を見ると、お姉様は唇に微笑をたたえたまま、まなざしだけはとても真剣で、挑むようなお顔で啓介さんを見つめていた。

胸が高鳴った。

やがてお母様が、

「月子、失礼ですよ」

と、厳しい口調でおっしゃると、お姉様はおどけたように、

「冗談ですわ。ごめんなさい、啓介さん」

と、さらりと流した。

啓介さんは、

「いいえ……それに、百合子さんは僕の許婚などではありませんよ」
少し笑顔をお作りになられて、そうおっしゃった。

そこで、話題は他のことに移り、滞りなく時間は過ぎていったが

……

食事が終わった後、お部屋に戻ろうとすると、ふと腕をつかまれた。

月子お姉様だった。

お姉様は私を、ご自分の部屋にお誘いになった。

「岩波百合子さん……実は、お名前を聞いたことあるのよ」

「え？」

「華ちゃん、私がおつきあいしていた森倉和成さん……覚えている？」

「ええ、もちろん」

森倉和成さんは、海軍大学校長である森倉子爵のご子息で海軍省に勤務されていた方。

とても容姿端麗な方で、多くの姫君の憧れの的だった。

鹿鳴館で月子お姉様と手をとって踊られるご様子は、まるで映画の一場面のよう……そんなお噂が駆け巡ったことがあった。

だが、月子お姉様はそのような御方からの求婚をきっぱりお断りし、勇作さんを選んだのだった。

「私が和成さんとお知り合いになる直前までおつきあいしていた女性、岩波百合子さんだったのよ」

とても驚いた。

「私、和成さんにお尋ねしたことあるのよ。“その女性はどのような方でしたの？ 私よりずっと美しい方？”と」。

「まあ、お姉様だったら、そんなこと……」

「あの頃の私は、恋にかけては誰にも負けたくないという思いが強く、とても高慢で、鼻持ちならない女性だったもの」

お姉様はそうおっしゃって、ケラケラと声を立てて笑った。

「それで……和成さまは？」

厩気楼 5 【華子】

「ああ、君に勝るとも劣らない素敵な女性だった」……「ただ……」
「だけど？」

お姉様は真顔になり、一呼吸置かれて、

「彼女には、幼いときから一途に思い続けている人がいた。他の方のおつきあいは、すべてその方を忘れるためだと、言っていた。それで、僕たちは、お別れしたんだよ」

私は、何か鋭いもので、胸をグサリと貫かれたような想いになった。

「私ね、その言葉がとても印象に残っていたの。だから今日、その方が啓介さんを訪ねてこられたとお聞きして……」

「お姉様……まさか……」

自分でも、みるみるうちに顔が青ざめていくのがわかった。

「もちろん、彼女の想い人が啓介さんと決まったわけではないわ」

お姉様は、テーブルの上の私の手をそつと握った。

「でも、とても美しく情熱的な方で、啓介さんのおつきあいが長いことは真実。そして、啓介さんが、少し動揺されていたらしい。それだ。そういうことを踏まえて、接した方がいいということよ。けれども、心の奥では、啓介さんを信じてあげること大切よ」

私は、こくりと頷いた。

それにしても……

月子お姉様は、やはり、このようなお話になると鋭く、抜かりがない。

清彰さんがご逝去された時や、正臣さんと『ルフラン』の女給さ

んの事件の時もそうだったが、誰よりも素早く流れを読む。そして、慎重に的確に行動される。

雪子お姉様の軽井沢行きや勇作さんの満州渡航のため、このころ元気がなかったお姉様が、以前と変わらない強さを示されたことが、なんとなく嬉しかった。

岩波百合子さんのことになるといつもの啓介さんではない、重く暗い表情におなりになる……食卓でそれを確信してしまった私は、彼女がたとえ許婚ではなかったとしても、啓介さん、または、若田家にとって、何か特別な存在に違いないと思っていた。

そのうえ、さらに不安を駆り立てるような月子お姉様のお話。胸のうちに、暗雲が広がっていた。

その夜、私と二人きりになっても、啓介さんは百合子さんのことには触れられなかった。

私もまた、何事もないように振舞ったが、心からの笑顔をお見せすることができなかった。

厩気楼 6 【華子】

数日後、岩波百合子さんが再び来訪した。

私と啓介さん、そして、お母様が応対した。

お父様はご不在。月子お姉様も、ドイツ人医師、ハインツ・コーマン先生の講演を聞きに行かれることになっていた。

ハインツ先生は、勇作さんの目を治してくださった大恩人。

「岩波さんとお会いしたかったのに……あなたのことも心配だし」
そう言って、悔しそうにされていた。

私も、お姉様がそばにいてくれたら心強いのに……と思いつつ、
「ハインツ先生によろしくね。私は大丈夫よ」
と、元気に笑ってみせた。

百合子さんは、やはり前回同様、颯爽としたモダンガールスタイルだった。

「啓介さん、ご結婚おめでとうございます。久しぶりにお会いできて、嬉しいですわ」

そう微笑む百合子さんに、啓介さんも穏やかに、

「あなたも元気そうで、なによりです」

と、答えられた。

百合子さんは、フランスで購入されたというアール・ヌーヴオの大きなステンドランプを、「ご結婚のお祝いに」とお持ちになられた。

その後、皆で食事をした。

啓介さんは数日前に見せた不自然な振る舞いが嘘のように、終始明るく穏やかな様子だった。

百合子さんが幼い頃の楽しい思い出話などをされると、声を出して笑われる場面もあった。

だからと言って「あの日の啓介さんのご様子が、こちらの思い出だったかも?」……そんなふうに、感じることもできなかった。さらに、啓介さんと百合子さん、お二人にしかわらない思い出や人間関係についてお聞きしているうちに、どこか取り残されたような寂しい想いが染み出してくるのを感じていた。

「ああ、本当に嬉しゅうございますわ。早乙女伯爵家の方々とお近づきになれ、啓介さんとも昔話ができて……」

百合子さんはナプキンで唇を押さえながら、独り言のように言われた。

そして、私を見て、

「華子奥様……もしよろしければ、この後、少しの間、啓介さんをお借りしてよろしいでしょうか?」

「え?」

「百合子さん、借りるってどういう意味だい?」

啓介さんがすかさずそう口を挟むと、

「他にも積もるお話がたくさんありますの。思い出話だけではなく、岩波家の事業についてご相談に乗っていただきたいことも……でも、今ここで話すべきことではありませから、もしよろしければ、啓介さんにお時間ただいて、二人でお話したいと思っておりますの」

厩気楼 7 【華子】

そのお申し出は、啓介さんご自身がお断りしない限り、誰にも止めることなどできない類のものだった。

ほんのわずかな時間、私は、啓介さんが初めて百合子さんの来訪を知らされたときのような厳しいお顔で、「それはできません」と言われるのを待った。望んでしまった。

けれども啓介さんは、

「わかりました。それでは、庭の散策でもしながら、お話ししましょう」

と、すんなり言われた。

「ああ、素敵ですわね」

高い声を上げて喜ばれる百合子さんをご覧になり、お母様は、あからさまに不快な表情をされた。

やはりこれは、誰が考えてもよくないことなのだ……という実感が込み上げ、不安で張り裂けそうになった。

こんなとき、月子お姉様がいてくださったら……そう思った瞬間、お姉様のおっしゃった、

「啓介さんを信じてあげることも大切よ」

というお言葉が蘇った。私はそれを、何度も何度も、心の中で反芻した。

「いつてらっしゃい」

私は、百合子さんと連れ立ってお部屋を出て行く啓介さんに、お言葉をかけた。

すると啓介さんは、

「ああ、少しの間、待っていてね」

と、優しい笑みでおっしゃった。

涙があふれた。

それなのに……

しばらくして、私は二階のバルコニーに出てみた。

お二人が散策に出られて、もう1時間は経っていた。

もうそろそろ、お戻りになる頃では？　そう思って庭先を見やっ
たとき……

並んで歩いて来られるお二人の姿が見えた。

細かな表情までは見えない距離だったが、何か会話をされていた。
すると突然、百合子さんが立ち止まった。

啓介さんは、しばらく百合子さんに話しかけていたが、やがて、
その場に彼女を残したまま、ひとりだけ先に歩きはじめた。

百合子さんは取り残されたまま、空を見つめていた。

が、すぐに、先を歩く啓介さんに向って小走りで駆け寄り……
後ろから、啓介さんの背中に抱きついたのだった。

厩気楼 8 【華子】

膝から崩れ落ちそうになった。

啓介さんは、胸に回された百合子さんの手を取り、ゆっくりと振り返った。

そして、手を握られたまま切々と何かを訴えているようだったが、こちらに背中を向けた形だったので、その表情は見えなかった。

やがて、お二人は再び並んで歩き始め、玄関の方へ戻って来た。

私は、パルコニーからよろよろと自分の部屋に戻り、何度も深呼吸をした。

お二人は、強く抱擁したわけでも、接吻を交わしたわけでもないけれども、啓介さんと百合子さんの間には、やはり、何か大きな秘め事がある……それが、確かなこととなってしまった。

だからといって、何もわかっていない。

私は泣くことすらできなかった。

ただただ混乱し、逆巻く嵐のような胸の中から、何も見てないふりをしてお二人を迎えるため、冷静な笑顔を繰り出さねばならなかった。

応接室に戻ってこられたお二人……

啓介さんは、少し消沈したような面持ちで、元気がなかった。

「お帰りなさいませ」

と、ささやくように口にした私へ、出かける前と同じように、優しく

いまなざしで頷かれた。

百合子さんは、泣いた後がうかがえる少し濡れた瞳をたたえつつ、「見事な庭園でございました。感動いたしました」

と、先ほどまでと変わらない明るい笑みを振り撒かれていた。そして、

「それでは、早乙女家の皆様、私はそろそろ失礼致します」
再度テーブルにつくこともなく、帰り支度を始めた。

私は、視線は向けていない時でも、背中、肩で、お二人の様子に神経を集中させていた。

お二人は、戻られてからは言葉を交わさず、視線すら合わせなかった。

玄関まで見送りに出た私たちに向って、百合子さんは、

「今日は本当にお世話になりました。ありがとうございました」
と、深く頭を下げた。私の方を見て、

「華子奥様、どうぞ、お幸せに」

その少し泣きそうな、子供のような瞳……百合子さんに初めてよぎった、切なく力ない光だった。

そして最後に、啓介さんを見て、

「若田家の皆様にも、よろしくお伝えください」
と、言われた。

啓介さんは、静かに首を縦に振っただけだった。

厩気楼 9 【華子】

その日の夕刻、帰宅した月子お姉様のお部屋に行った。

「おかえりなさいませ」

「ああ、華ちゃん、岩波さんはどうだった?！」

私は扉の所に立ちすぐんだまま、何も言うことができなかった。
お姉さまのお顔を見ると、何か糸が切れたような気持ちになり、
体の力が抜けていくのがわかった。

はらはらと、数条の涙が頬を伝った。

「華ちゃん?!」

私からお昼間の出来事の一部始終をお聞きになった月子お姉様は、
今にもお部屋を飛び出して啓介さんのもとへ走りそうな勢いで、激
しくお怒りになった。

「もう、何も関係がないとは言えないわ。啓介さんに、はつきり問
いいただいた方がいいわ」

「でも……」

私には、どうしてもそれができなかった。

「バルコニーからお二人の様子を伺っていたなんて……取り乱して
そのようにはしたくないことをしたなんて……私、とても啓介さんに
は言えないわ」

お姉様はため息をつき、ソファーに背中を預けるように、どさっ
と勢いよく座り込んだ。

「どうすれば良いかしら……」

しばらくの沈黙の後、

「岩波さんの滞在先はどこかしら?」

「確か……京都ホテルだわ」

お姉様は身を起こされ、

「私が、会いに行くわ」

「ええ?! お姉様が、百合子さんに?」

「そうよ」

「お姉様に、そのようなことをお願いするわけには……」

「何を言ってるの」

お姉様は私を遮った。

「万が一、二人の間に何か人には言えないような秘密があり、それがあなたを裏切るようなことであるならば、黙って見過ごすわけには行かないわ。だって……」

一呼吸置き、強い口調で言い放たれた。

「啓介さんは、いずれ“早乙女伯爵”になれる方なのよ」

心臓の鼓動が早くなり、呼吸が荒くなるのが、自分でもわかった。

私は、ただ、啓介さんの妻として、様々な想いを張り巡らせ、不安に押しつぶされそうになっていた。

けれども、お姉様のおっしゃるとおり、啓介さんには……いえ、私もまた、この早乙女伯爵家を継ぐ者としての責任がある。

もっと強くなり、もっと大人として冷静に振る舞うべきなのだ。

私の脳裏に、“あの方”のお顔がよぎった。

有島千秋さん……

私は、あの方と出逢ったことで、この伯爵家を守っていかうと決心することができた。

若い千秋さんが自分を殺し、ご両親やお家を守るため強く生き抜いておられたお姿に、心を揺り動かされたのだった。

あの方に、恥ずかしくない生き方を……そう思っていたはずなのに。

啓介さんとの縁談をお受けした時のきらめくような想いは、すっ

かり薄れていた。

お姉様のお言葉で、そのことを思い知らされたのだった。

厩気楼 10 【華子】

京都ホテル。

そこを訪れるお客は、皇族・華族や政府の高官・軍関係者、さらに文化人・外国観光客といった方々ばかりで、上方の迎賓館とも言われるほど、格式の高いホテルだった。

木造二階建ての建物は、著名な建築家が手がけたという和洋折衷様式。

飾られている調度品・美術品も一つ一つが目を見張るようなものばかりで、すべてにおいて華麗で、豪華な雰囲気が漂っていた。

そのホテルのロビーで、月子お姉様は、岩波百合子さんとお会いすることになった。

お姉様は、最近ほとんどお見かけしなかった洋装に身を包み、洗練された百合子さんに引けをとらぬよう、気を配られていた。

勇作さんと知り合う前、たくさんのお殿方を虜にし、美貌の伯爵家令嬢と皆の憧れを一身に集めていた月子お姉様……本当に久方ぶりに、あの頃のお姉様か帰ってきたようだった。

私のためにご足労をおかけするというのに、美しいお二人が京都ホテルで対峙するご様子を想像すると、その華麗な競演はどんなに素敵だろうと、身震いが起こるほどだった。

その日、月子お姉様は午後からお出かけし、夕方、帰宅された。すぐに食事の時間で、私はお姉様から詳細をお聞きすることなく、テーブルについた。

お父様と啓介さんは不在だったが、お母様や正臣さんの手前、月子お姉様は何もお話にならなかった。

お姉様はいつもと変わらない様子で、動揺しているようには感じられなかったので、私が気に病んでいるようなことはないのかも……と、期待していた。

正臣さんが、とても個性的なご学友のお話をされ、お母様やお姉様はとても楽しそうにそれを聞いていらっしゃった。けれども、私は上の空。

食事の時間が、とても長く感じられた。

厩気楼 11 【月子】

私はその日、京都ホテルのロビーで、岩波百合子さんとお会いした。

森倉和成さんの口からそのお名前をお聞きしたのは、もう2年も前になる。私と和成さんとは縁がなかったが、彼女とこうしてお会いすることになるなんて、不思議な巡り合わせだと思っていた。

一方で、華子と啓介さんや、ともすれば、早乙女伯爵家にも大きな影響を及ぼすかもしれない方。

私は、慎重に、彼女の本心・真実をお聞きせねばならないと強く心に決めていた。

百合子さんは、お噂どりの美しい人だった。つぶらな瞳と細く筋が通った高い鼻が、短い髪と相まって、まさしく西洋人のような雰囲気をかもしだしていた。足の長いすらりとした体型には、流行の最先端を行く艶やかな洋装がとてもよく似合っていた。

「早乙女月子様でいらっしゃいますね？……お待たせして、誠に申し訳ございません」

「いいえ、私の方こそ、突然お呼び立てしてしまいました。失礼をお許してください」

私たちは挨拶をすませると、ロビーの端にある、庭園に面した椅子に向かい合って腰掛けた。

手入れの行き届いた緑と鹿^{しし}薔^{あざ}しを施した丸池の上を、夏の爽風がそよそよと吹きぬけていた。

私は、まず、和成さんのお名前を出し、百合子さんの表情を伺った。私も和成さんと婚約寸前までおつあいしていたことを知ると、

とても驚いた顔をされていたが、「まあ、そうでございましたか……」と微笑む彼女の表情は明るく、言葉にもよどみはなかった。ところが、

「若田家とはずいぶんご懇意にされていらっしやいますのね」

「はい、若田男爵様と私の父が、仕事上、深い関わりがございました……もう、20年来のおつきあいだと伺っております」

「そのようですね。両家のご子息も……あなたと啓介さんとも、幼馴染でいらっしやいますのね」

「はい」

そう言ったとき、彼女の顔にわずかな曇りが宿ったのを、私は見逃さなかった。

私はいよいよ、本題に入ることにした。

そこまで、交わした言葉はわずかだったが、彼女は聡明な方だと感じた。

私がわざわざ訪ねてきたことにも、「何かある」と、すでに察知しているだろう。それならば、回りくどい聞き方ではなく、単刀直入に話をした方がよいと思ったのだった。

「百合子さん、今日、お尋ねしたのは、どうしてもお伺いしたいことがあったからです」

百合子さんは小首をかしげ、目を見開いた。唇は、きゅつと一文字に結ばれていた。

「森倉和成さんからお聞きしたことがあるのです。“百合子さんには長い間想い続けている殿方がいらっしやる”と……」

百合子さんの顔色がさっと変わった。

「……月子お嬢様？ どうして今、そのようなお話を？」

塵気楼 11 【月子】（後書き）

別件と掛け持ちのため、これからは更新の間隔が少し長くなるかもしれない。すみません。

今後とも、よろしくお願い致します。

蜃気楼 12 【月子】

「率直に申しますわ。実は、見た者がいるのです」

「？」

「あなたと、啓介さんのお庭でのご様子を……」

私は真つ直ぐな瞳で、百合子さんを見つめた。

「もう、おわかりですね？ 私が今日お伺いしたのは、確かめたかったです。その、“想い続けていらっしゃる”という方が、啓介さんかどうかを」

百合子さんは、つぶらな目をいつそう大きくし、息を飲むような表情をされた。

「あなたのもとに突然押しかけ、このようなことを問いただすことは、嗜^{たしな}みのない、不躰なことだと重々承知しております。けれども、華子の姉として、早乙女家の者として、知ってしまったからには、黙って通り過ぎることなどできないのです」

私は、彼女の心に染み込むようにとの想いを込めて、冷静に、言葉を選びながらゆっくり語った。

百合子さんは背筋を伸ばし、身を乗り出すような格好で聞いていたが、やがてフツと肩の力を抜き、座椅子にゆつくりと背中を預けた。私たちの間にはしばし沈黙が流れ、鹿^{しか}脅^{おどし}しの音だけが、緊迫した時を刻む合図のように、静かに響いていた。

どれくらい時間が流れただろうか。

百合子さんが、口を開いた。

「啓介さんからは、何もお聞きになっていらっしゃらないのですね？」

「ええ。あくまでも私が、和成さんのお話と、庭でのお二人を目撃した者の話から、推測したまでですわ」

百合子さんは口元を少しほころばせ、それでいて、悲しく神妙な面

持ちを崩さないまま、言った。

「それを聞いて、安堵いたしました。啓介さんがもしも、私のことを早乙女家の方々にお話していたとしたら、私はあの方に失望し、あの方を信頼していた自分を、愚かだと責めていたことでしょう」

「？」

「誤解を生むような振る舞いをしてしまい、誠に申し訳ございません。けれども、私と啓介さんの間には、月子様がご心配されているような関係はございませんわ」

だが、それだけでは安心できなかった。私は、畳み掛けるように、「でも、やはり、お庭ではお仕事のことでなく……」

百合子さんは、目を伏せたまま、

「……はい。私がどうしても内密にお話したいことがあり、二人きりのお時間をとっていただいたのです。それは、間違いございません」

と、頷いた。

そして彼女は、いよいよ、真相を語り始めた。

塵気楼 13 【月子】

「森倉和成さんのおっしゃったことは本当です。私には、長い間お慕い申し上げている方がいらっしやいます。けれども……」

百合子さんは目を伏せ、

「その方は、どんなにお心を寄せても、決して結ばれることのないお相手なのでございます」

「結ばれることのない……」

私の中に、それまでとは違った百合子さんへの感情が芽生え始めた。

早乙女家の者として、華子の姉として真相を聞きたいと思っただけなのに、一人の女性としての彼女の「真の姿」を知りたいと思ったのである

「月子お嬢様は私を軽蔑なさるかもしれませんが、ですが、早乙女家の方々の不安をとりのぞいてさしあげることが、今の私にできることなのであれば、恥を忍んでお話しします」

「恥……それは、どういうことでしょうか？」

百合子さんの瞳は切なく、それでいて深き想いを秘めた真剣な光をたたえていた。

「その方は……すでにご結婚をされていらっしやるのです」

以前の私であれば、恋多き女性の戯言だと、笑ったかもしれない。または、そのような相手に想いを寄せる彼女を不快に思ったかもしれない。

だが……

許されない恋、報われることのない愛……それでも、求めずにはいられない……この世に、そのような恋愛が存在していることを、今の私はよく知っている。

「お相手の方は、百合子さんの想いをご存知なのですか？」

「はい」

「それでは……」

「お察しのとおりです。一時期、おつきあいしておりました」

百合子さんはどれほどの想いでこのお話をされただろう。それほど重く、また、覚悟を要する告白だった。

聞かされた私が、それが姦通罪にあたると大騒ぎするかもしれないのだから……

「百合子さん」

しばしの沈黙の後、私は口を開いた。

「私は、あなたを責める気持ちなどございませんわ。軽蔑もいたしませんし、このことを他言するつもりも……」

「月子お嬢様……」

「ありがとうございます」

百合子さんは、少し安堵したように頬を緩ませ、小さくため息をついた。そして、

「啓介さんは、私との方とおつきあいをご存知で、以前から相談に乗ってくださいだったのです」

「まあ……そうでしたの」

百合子さんが先刻、“啓介さんがもしも、私のことを早乙女家の方々にお話していたとしたら、私はあの方に失望し、あの方を信頼していた自分を、愚かだと責めていたことでしょう”と言っていたのを思い出した。

「では、あの日も、そのことでお話になっていたのですね？」

「はい、啓介さんとは幼い頃から親戚のように近い交流をして参りましたから、私の気性などもわかってくださっております。この件についても、何年も前から相談に乗ってくださいっていたのです。あの日もつい、私の方が甘えた態度で接してしまつて……それが誤解を生んでしまったのですね。軽率でした。誠に、申し訳ないことだと思っております」

「そうでしたか……それで、啓介さんは、なんとおっしゃっているのかしら？」

「すぐにでも、その方のことは忘れるべきだと……それなのに、私が何年もずるずると想いをひきずっているものですから、いつも叱られてしまいます」

無理もない。百合子さんを思えばこそ、厳しいお言葉もかけられたのであろう。まして、啓介さんは誰よりも実直で、清廉な方だ。不義の関係を、黙って見過ごすはずはないと思えた。

「たとえ、信頼する啓介さんに止められても、その方とお別れすることはできないのですね？」

私がそう問うと、百合子さんはうつむき、「はい」と、消えるような声で言った。続けて、

「でも……私は今度こそその方との関係を断ち、すべてを忘れるために、欧州に行くことにしたのです」

「欧州に……」

「はい。この秋に出立の予定です。あちらで、服飾について学んでこようと思います」

「よく、ご決心されましたね」

「相手の方の奥様が、初めてのお子様を懐妊されてのです。先日そのことを耳にし、哀しみにうちひしがれておりましたが……啓介さんとお話し、決心が付きました」

お相手の方のことを、詮索する気はなかった。

ただただ、このような重大な告白をしてくれた百合子さんに、深謝の想いでいっぱいになっていた。

「お話してくださって、ありがとうございました。先ほども申しましたように、このお話を外に漏らすようなことは致しません。啓介さんにも、今日私たちがお会いしたことは、お話しなつもりです」

「お嬢様、私、なんと申し上げたらいいか……」

百合子さんは、涙ぐみ、ハンカチで目元を押さえた。

華やかで、気丈に見える外見とは裏腹に、一途な恋に心震わし、不器用に生きてきた彼女の、まさに「真の姿」がそこにあった。

厩気楼 15 【月子】

その夜、私は華子を部屋に呼び、百合子さんにお聞きした一部始終を話した。

すべてを聞き終えた華子は、深く長いため息をつき、ふっと体の力を抜いて言った。

「啓介さんを信じられなかった自分を、恥ずかしいと思うわ。ただど一方で、啓介さんが真剣に一人の人と関わり、相談にのってあげ、叱咤激励していらした……それは、とても、素晴らしいことだとも思います」

「そうね」

「お姉様、ありがとうございました。私、とても安心したわ。でも……なんだかとても、切ない」

と、華子は複雑な面持ちで窓の外を見やった。

「そうね」

報われない恋の重さ……私が感じた、百合子さんへの共感とも同情ともつかない感覚を、華子も同じように感じているのだろうと思った。

そして、数日後。

お茶の時間に、お母様が何気なく切り出されたお話に、私と華子は顔を見合わせ、息を飲んだ。

「若田男爵家のご嫡子・佑介様の奥方様が、ご懐妊されたそうですよ。ご結婚されて3年目、待望のやや様ですって」

私たちは、百合子さんのお相手は、啓介さんのお兄様にあたる、若田佑介様に違いないと確信した。

そう考えれば、百合子さんが啓介さんに相談を持ちかけ、啓介さんが厳しく戒められていたということも納得がいく。

すべて若田男爵家にも直結する問題だったからに違いない……と。

私は、京都ホテルの玄関に佇み、いつまでも私を見送ってくれた岩波百合子さんを思い出していた。

本当に、とても美しい人だった。

あれは、真の愛と哀しみを知っているからこそ醸し出される、深き意味ある美であったのだろう。

啓介さんと華子は、仲睦まじく、二人してあいかわらず忙しい日々を送っていた。

華子は何も知らないふりをして、いつもどおりほがらかに明るく過ごしていたが、今回のことは、やがて早乙女家を背負う伯爵夫人としての自覚や覚悟が強まった、意味のある出来事となったようだ。

ひぐらしの声が、早乙女邸の庭園に響いていた。

こうして私と華子がこの出来事に翻弄されていた頃、軽井沢の雪子お姉様にもまた、“意味のある出来事”が起こっていた。

章「曼珠沙華」に続く

次

曼珠沙華 1 【雪子】

私が軽井沢に来て、3カ月が過ぎました。

京都では、「もう二度と立つことすらできないかもしれない」「思うように言葉を発することさえ叶わないかもしれない」と感じるほど弱りきっていましたが、涼しい避暑地で手厚い看護を受け、私はなんとか危険な状態から抜け出すことができました。

ベッドの上に起き上がり、少しずつ食事がとれるようになった頃には、京都から毎週のようにお手紙が届くようになりました。

お父様、お母様、月子や華子、正臣さん……皆、代わる代わる励ましの言葉を綴り、光の近況を伝えてくれました。

けれどもこれまで一日たりとも、心まで晴れるような日はございませんでした。

際限のない暗闇の中、なすすべもなく死の穴に吸い込まれていくような恐怖が、常に私の胸に張り付いているのです。

介抱してくださる方たちの優しさも、高価で良質なお薬も、草原を吹き抜ける爽やかな風も、そこから私を救い出してはくれません。

毎日、夕焼けが西の空を染める時間になると、光と離れ離れになつてしまった寂しさや、愛しい人たちに二度と会えないかもしれないという哀しみが怒涛のように胸になだれ込んでくるのです。

夜になると、布団を握り締め、枕に顔をうずめて慟哭していました。

窓から見える満天の星、まるで宝石のようなその美しさも、心に

届くことはありませんでした。

亡き人の忘れ形見をこの手に抱くまで、どのような苦難も乗り越えよう……そう決意していた頃の私は、どこに行ってしまったのでしょうか。

月子が自宅療養できるようにと尽力してくれた想いを固辞し、覚悟を決めてここに来たはずなのに、早乙女家から遠く離れて過ごす生活は、日に日に私の内から強さやあらゆる希望を奪っていきました。

清彰さん……

あの方のお名前を何度も呼びながら、私は毎夜、その面影を求めて彷徨っていました。

清彰さんが逝ってしまったのも、一年前のこの季節でした。震災後の東京で囚われの身となり、牢獄の中たった一人でこの病と向き合っていたのです。

私が全く同じ病で倒れることになってしまったこと。それは、絆と呼ぶにはあまりにも残酷で、縁と言うにはあまりにも哀しい繋がりでした。

そもそも、あの方が一身に背負われたものを、私がこの身で体感することなど到底無理なのです。

何より、光にしてみれば父母がそろって同じ病で早くに命を落としてしまうなんて……そう思うと、胸がかきむしられるような気持ちでした。

けれども……

それは、燃えるような曼珠沙華が咲き乱れる頃。

ある夜の出来事でした。

曼珠沙華 2 【雪子】

私が療養生活を送っている「軽井沢サナトリウム」は、五年前に開設された療養所で、木造二階建ての洋館でした。所長のエドワード・スコット博士のお名前より、別名「スコット病院」とも呼ばれていました。

エドワード先生は肺結核治療の権威で、このサナトリウムでもご自分の医療技術をあますことなく発揮され、多くの結核患者さんの治療にあたっておられました。志高く慈愛に満ちた素晴らしい医者様で、治療費が払えないような貧しい方を無料で診てあげることもありでした。

そのエドワード先生より大きな信頼を寄せられている看護婦長の静乃さんが、私の担当として付き添い、日々お世話をしてくださっていました。

御年は五十代半ば。サナトリウムの設立当初からすべてを見てこられたという静乃さんは、エドワード先生から療養所の様々なことを任されておられました。

静乃さんはそのご期待に沿うように、清廉な先生のご意思を丁寧に看護業務に託されておられました。多くの患者さんたちを暖かく励まし、まるで子供を慈しむ母親のように一人一人に心を配り、一方で、素早く的確にお仕事をこなす凛々しいお姿は、若い看護婦さんたちの憧れを一身に集めていらっしやいました。

まさに、白衣の天使・聖母といった言葉にふさわしい、素晴らしい方——静乃さんの存在がなかったら、私の憂いはもっともっと深くなっていたかもしれません。

日替わりで窓辺に季節のお花を飾ってくださったり、夜遅くに病室を訪れ外国文学の朗読をしてくださったり……泣き明かし、目を腫らした私の側に腰掛け、長い時間何も言わずそっと手を握って

くださっていたこともありました。

ある日、その静乃さんが

「雪子様、もしお加減がよろしければ、この辺りを散策してみませんか？」

と、お声をかけて来られました。

静乃さんに車椅子を押してもらい、このサナトリウムに来て初めて外に出ました。

サナトリウムの側には白樺の林があり、木の間をそよそよと心地よい風が吹いていました。

「雪子様、今朝も京都からのお手紙が届いておられましたね」

「はい、今週は妹の華子からでした」

「そうですか。本当に仲のおよろしい、素晴らしいご姉妹でいらつしやいますね」

「ありがとうございます」

華子からの手紙。

「昨日、光が、お父様の大切にしていたの本の頁をちぎって遊んでいたのです。その時のお父様ったら。一瞬目を吊り上げて声をあげそうになったけれど、何もわからずに楽しそうにしている光の愛らしい笑顔を見たたん、力が抜けてしまわれたのか、急に笑い出して……“まったく、光はやんちゃだなあ”と目をほそめていらつしやったわ。私たちが幼い頃はずいぶん厳しく叱られた記憶があるけれど、光だけは特別のようですね」

「本当に、早乙女邸の様子が目に浮かぶようですわ」

そうつぶやいた途端、私はたまらず、下を向いてしまいました。胸が詰まり、涙が溢れてしまったのです。

「雪子様？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2755k/>

春の精霊たち

2011年2月3日01時25分発行